

---

# 有名人な彼

武村 華音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

有名な彼

### 【Nコード】

N7791C

### 【作者名】

武村 華音

### 【あらすじ】

平凡な三十路女、五十嵐彩が飲み会の帰りに出会った男は超有名な人だった。

## 10・1（前書き）

平凡な三十路女、彩が出会ったのは超有名人だった。

私は三十路の独身OL。  
容姿も性格も視力も良いとは言えない。

身長160cm、中肉中背、常に眼鏡を着用し、顔も十人並み。  
特にパツと目を引くほどの長所もなければ特徴もない。

強いて言うなら自慢は長い髪……だろうか。  
艶やかで頑固なほど真っ直ぐな髪の毛だけは友人達から羨ましが  
られている。

他に褒める場所などないのだろう。

彼氏もないし。  
恋愛もしばらくしていない。

そのくらい私は平々凡々でつまらない女なのだ。

怒涛の決算月が過ぎ、新年度へと移った4月最初の週末。  
私は会社の同僚や上司達と飲んでいた。  
今日は決算を無事に終えた打ち上げという名の飲み会だ。

頻繁に飲みに出掛ける面子ではないけれど。

いつものメンバーは同期の男性だけ。  
入社当時から付き合いなので遠慮なく語り合える同志。  
当然ながら特別な関係はない。

会社の人間、取引先の人間と特別な関係を持たない。  
それが私の中のルール。  
それ以前に、私に興味を持つモノ好きもいないだろうが。

飲み屋はいつも通っている新橋駅の傍。  
半地下で店構えは素朴なのにいつだって混雑していて、予約を入れておかないと1時間や2時間待たされる事も当たり前な人気店である。

恥ずかしながら私はその常連客。  
常連客だから、という理由で特別に予約を入れさせてもらっているが、基本的に予約はお断りしていると店長さんは言っていた。

ほとんどの客の目当ては従業員。  
イケメン居酒屋といえば駅前に停まっているタクシーの運転手さんも知っているほどに有名なのだ。  
店長さんを含め、従業員はほとんどがモデル経験者。  
女性従業員も男性従業員も美形揃い。

サラリーマンやOLは目の保養にやって来ているのだろう。

私は単純に、店の雰囲気と店員さんの人柄が好きで通っている。  
開店当初からずっと。

一次会が終わる頃、私は同期にこっそり帰る事を告げて、周囲にはお手洗いにいくと言って店を出た。

当然二次会へは行かない。  
行く気もない。

酒が入るとセクハラも当然の事。  
気色悪い上司に手や肩や膝などを触られると張り倒したくなる。  
張り倒したくなるだけで実際にできないのが辛い所だけれど。

部長がいないのを好機とばかりに私の隣を陣取り触り放題。  
同僚達も私も上司相手には文句も言えず、我慢するだけの2時間。

途中で私が席を立った隙に、同僚が課長の隣に座ってお酌をしてくれていたお蔭で難を逃れたけれど、女は私1人なのだからどうしてもターゲットにされてしまう。

触りたきやお触りが可能な店にでも行きなさいよ！ と、言えたらどんなに気が晴れることが……。

席を立った際に同僚達が謝ってきたけれど、これは決して彼らの責任ではない。

課長の人間性が問題なのだと思う。

あれじゃ出世はできないだろうなあ……。

店を出た私は、駅に向かって1人歩いていた。  
夜風が気持ちいい。

酒で火照った身体を心地よく冷やしてくれる。

上司から逃げた事で徐々に気分が良くなって足も軽くなっていく。  
少し前まであった店がなくなっていたり、新しくオープンしてい

る店があつたり、日頃気にしない駅までの道をのんびりと見上げながら歩く。

間抜けな顔をしていたかもしれない。

反対側の建物にコーヒー豆の販売店を見つけ、進む速度を緩めた時だった。

注意力散漫になっていた私は、曲がり角に差し掛かったところで人とぶつかった。

「すみません！」

倒れそうになった私を抱き留めながら長身の男が謝る。  
その顔には見覚えがあつた。

……誰だっけ？

私が男の顔を見上げていると急にたくさんの声が聞こえてきた。

「こつちに來たはず！」

「どこお?!」

足音からかなりな人数と思われる。

この男は何をしでかしたのだろっ？

「やべっ……!!」

男が私の後ろに身を屈めた。

大き過ぎて全くと言っていいほど隠れていないけれど。

面倒な事には関わりたくないし、その場を立ち去りたいけれど…

…何故か服を掴まれている。

なんで……？

楯になれって事？

「海だよ！ 望月<sup>もちづき</sup> 海<sup>かい</sup>がいたの！」

私は背後で蹲っている男に視線を移した。

「ああ……望月 海」

男の肩が震えた。

ビンゴ、か。

どうりで見た事があるはずだ。

「ちょっと助けて。サインならあとであげるから」  
「要らないわ」

貰ってもどうしていいか分からないし。

私は鞆の中のカーディガンを取り出して男に被せ、ペットボトルの水を手渡した。

「俳優なら吐く真似くらいできるでしょ？」

足音はどんどん近付いてくる。

今更考える時間もなければ悩む時間もない。

望月 海といえば最近人気の実力派俳優だ。  
今放送中のドラマは結構好きで、毎週ビデオに録っている。



だからといって特別熱を上げているわけではないが。

私は男の背中を擦りながら声を掛けた。

「だから飲み過ぎだつて言つたでしょ？」

俳優なら乗つてくると思った。

逃げ通したいなら尚更だ。

大勢の女性達が私達の傍を駆け抜ける。

人数が多いと地面が揺れるらしい。

さすがにその人数の多さに驚く。

こんな大人数に追われていたのか……。

この子も災難ね。

「ねえ、望月 海見なかった？」

男の背中を擦っていると面識のない女が尋ねてきた。

それが他人にものを尋ねる態度？ と思うほど偉そうに。

仁王立ちで腕を前で組んでいて、当然ながらしゃがんでいる私達を見下している。

更にはタメ語だ。

こういう人間は大嫌いだ。

人にもものを尋ねるなら敬語というのが常識だと思う。

「知るわけないでしょ！ こっちはそれどころじゃないのよ、見て分からないわけ?!」

さつさと消えてくれと思いながら私は声を荒らげた。  
面倒な事にこれ以上関わりたくない。  
早く解放されたい。

本当、勘弁して。

早く帰りたい……。

早く消えて。

タイミング良く男が水を噴いた。

「やだぁ！ 汚っ」

女達は心底嫌そうな顔をして足早に去って行った。

自分達が探している男だというのに……所詮そんなもんよね。

「……行つたみたいよ」

足音が遠ざかったのを確認して男からカーディガンを剥ぎ取り、  
簡単に畳んで鞆に突っ込む。

大体、なんでこんな所に芸能人がいるのよ？

それも単身で。

「ありがとう、助かった」

いい笑顔……充分なお礼だろう、釣りは出せないけれど。

「じゃ」

私がその場を離れようとした時、再び服を掴まれた。

「何の真似かしら？」

「携帯の充電切れちゃって困ってるんだけど、助けてくれない？」

「コンビニで買えば？」

最近の芸能人は買い物も出来ないわけ？  
さすがにそこまでの面倒は見きれない。

「近くのコンビニで売り切れだったんだ」

だから何だったのよ？  
私には関係ない。

「お姉さんの携帯のメーカーは？」

「ドモだけど？」

「お姉さんの充電器貸して」

はあ？

うちに来るって言うの？

「何言ってるの？」

「お願いっ」

信じられない奴……。

芸能人は常識が欠如している奴が多いという噂は聞いていたけれど……この男は本当に欠如している。

ありえない。

「そのコンビニで充電器買おうとしたらバレちゃって他のところ

でもこんな目に遭うのかなんて考えたら恐くて行けないよ……」

ああ……もお、情けない声を出さないでよ。  
そんな涙目で私を見ないで。

「マネージャーの携帯番号もスケジュールもこの中だし途方に暮れてんの。助けて、ね？」

何なの、この可愛さは……反則だわ。

「……充電だけよ」

芸能人だし仕方ないわよね……。  
このまま放っておくのはさすがに可哀想だし。

私は仕方なく近くのタクシー乗り場に向かった。

「あの……お姉さん？」

「電車なんて乗れないでしょ？」

私はタクシーに乗り込んで男に言った。

「早くしなさい……って、別に来なくても構わないけど」

できるならお断りしたいくらいだし。

男は置いて行かれないらしく、慌ててタクシーに乗り込んできた。

新橋から電車でも車でも1時間掛からない場所に私のマンションはある。

タクシーを降りて部屋に向かう私の後ろからイケメン俳優がついて来る。

ありえない……。

夢か現実かの区別も出来ないまま男を部屋に招き入れる。

私は2LDKの賃貸マンションに1人暮らし。

「結構いいところに住んでるんだね」

「携帯貸しなさいよ、充電するから」

男の話など聞く気もなかった。

「お姉さん、名前は？」

「いがらし五十嵐 あや彩」

部屋中を見回しながら男が微笑む。

女の部屋が珍しいのだろうか？

私は男の携帯に充電器のソケットを差し込んで少し待ち、電源を入れた。

「はい、マネージャーさんにも電話して迎えに来てもらって」

私はそのまま浴室に向かった。

決算が終わってようやく忙しさから開放された週末。  
怒涛の1週間の締めがコレか……。

やっとゆつくり休めるはずだったのに。

……この際あの男の存在は無視だ。

今頃、充電しながらマネージャーさんに電話をしているだろう。  
あの男さえ部屋から追い出せば平和な時間が戻ってくる。

私はお風呂で酒と煙草の臭いを洗い流してリビングに戻った。

「……まだいたの？」

しっかりソファで寛いでいる。

何故か部屋に馴染んでいる事が腹立たしい。

ここは私の部屋なのに。

「だって電話が繋がらないんだもん」

携帯は握っているけれど……そんな寂しそうな目をしないで欲しい。  
い。

「珈琲くらい淹れてあげる。でもさっさと帰ってよね」

「彼氏でも来るの？」

「いたらあんたを部屋に上げたりしないわよ」

「じゃあ、今日泊めて？」

……厚かましいにも程がある。

「あんだねえ……」

「海。俺の名前、望月 海」

「知ってるわよ」

毎週テレビで観てるもの。

「彩さん、ビールない？」

早速名前呼び？

図々しい。

「あんだ遠慮ってモノ知らないの？」

「遠慮なんてしてたら生きていけないよ」

「遠慮しないで生きてたらそのうち刺されるわよ」

私は冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「銘柄に文句は言わないでよね」

「彩さんも一緒に飲もうよ」

「私は外で飲んできたからもういいわ」

珈琲メーカーのスイッチを入れて対面キッチンのカウンターの椅子に腰を下ろす。

何を話していいのかわらず、テレビを点けた。

住んでいる世界が違って、年齢も大きく離れた私達に共通の話題などあるはずがない。

「彩さんっていくつ？」

この男……私を怒らせたのか？

「女に年齢訊くなんて最低の男のする事よ？」

どうせあんたよりもずっと上よ。

「彩さん、俺と変わらないくらいかなって思ったから訊いたんだけど？」

「そんなわけないでしょ？」

そこまでのお世辞は嘘くさい……っというか嘘にしか聞こえない。

「あんた22でしょ？」

「うん、彩さんだって25くらいでしょ？」

「30」

男は意外そうな顔をした。

「嘘でしょ？」

何が嘘なのよ？

普通、嘘吐くなら若く言うに決まってるじゃない、馬鹿じゃないの？

誰が好き好んで三十路だなんて言うのよ？

「だって芸能人の30って素顔見れないよ？」

それって失礼じゃない？

「彩さんはすっぴんも綺麗」



もともと化粧は好きではないので薄めだし、今は風呂上りで完全にすっぴん。

しててもしていなくても変わらない気がするのは、ただ単に私の化粧の腕がないからだろう。

日焼け止め程度にしか考えてないのも確かだ。

男は私に歩み寄ってきてまじまじと見つめてきた。

「さっきから喧嘩売ってんの？」

お肌の曲がり角をとくに過ぎた私を馬鹿にしてる？  
綺麗な肌して羨ましいと思ったらない。

「うっん、綺麗だから見てたいなって思って」

男の手が伸びてきて私の眼鏡を外した。

「返しなさいよ、見えないじゃない」  
「俺の顔見える？」

男との距離20cm。

「み……見えるけど……」

男の顔が近付いてくる。

「あんま近くなると見えな……」

男との距離0cm。  
唇が重なった。

若いくせに慣れてる……。  
小憎らしいガキだわ。

「……彩さんに惚れたって言ったら信じる？」  
「絶っつ対に信じない」

信じるわけがない。  
出会って1時間。

更に相手はかなり年下の芸能人。

「欲求不満なら他で解消して。当てはいくらでもあるでしょ？」

私は立ち上がり珈琲を淹れた。

「あんたも飲む？」

「海」

「え？」

「あんたってやめて。海って呼んで。彩さんの声で呼んで欲しい」

この男は天性のプレイボーイなのだろう。  
絶対に名前なんて呼んでやらないんだから。

「で？　飲むの飲まないの？」

私は男の言葉を無視して尋ねた。

「飲む」

一々俳優の言葉を真剣に聞いていられるわけがない。

恥ずかしげもなく齒の浮くような台詞を吐いている人種なんて胡散臭い。

最も信用できない人種だ。

男は不貞腐れたような顔をしている。

こんなところはまだまだガキだわ。

こんな坊やになんか騙されるもんですか。

## 10-1 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

10話完結のお話を書きました。

武村的には短めのお話ですね……。

でも、彩視点のみなので、追々他の視点からの番外編を載せていくつもりです

取り敢えず10日間お楽しみ下さい

明日も更新します。

よろしくお願い致します

## 10・2 (前書き)

とんでもない人物を持って帰って来てしまった彩。  
さっさと帰って欲しい・・・彩の願いは届くのか？

「いい加減、電話繋がるんじゃない？」

私は部屋で寛ぐイケメンを眺めながら溜め息を吐いた。  
何度この台詞を吐いただろう？

「彩さんはそんなに早く帰って欲しいの？」  
「当然でしょ」

当たり前じゃない。  
私は早く寝たいの。  
だから早く帰って。

「泊めてくれるんじゃないの？」  
「仕事あるんじゃないの？」

8歳も年下の男だけど、正直……モロ好み。  
さすがにヤバイ……。

「芸能人は観賞物よ。さっさと迎えに来てもらって。でなきゃ安心して寝れないじゃない」

珈琲も既に3杯目。  
さすがにもう飲みたくはない。

「彩さん、眠たいの？」

「眠いに決まってるでしょ、何時だと思ってるの？」

午前2時よ？

遅くても6時には起きなきゃいけないってのに……。

仕事はなくても生活リズムを崩すのは嫌いなのだ。

肌のためにも健康のためにも規則的な生活は当たり前。

私はシンクにカップを置いて、本を取りに寝室へと向った。

こんな男がいたら安心して寝られない。

何かしていないと起きているのもツライ時間だ。

ベッド脇の本に手を伸ばすと後ろから抱きしめられた。

「ちよっ……?!」

「彩さんいい匂い……」

「放しなさいっ。おばさんをからかわないでっ！」

「おばさんなんて思ってるじゃないよ？」

男の体重が押し掛かって私はベッドに倒れ込んだ。

「言ったでしょ？ 彩さんに惚れたって」

「会って数時間で惚れるってありえないわ」

男の腕は私を解放してはくれないらしい。

「俺はもつと前から彩さんを知ってるよ？」

「はい？」

何言ってるの？

「彩さん、新橋で結構頻繁に飲んでるでしょ？」

そりゃ頻繁に飲んでるけれど……。

入社当時から週に3日ペースで。

「友達がやってる店で彩さんを見掛けたんだ。可愛い人だなんて思った」

急にそんな事を言わないで欲しい。

私は知らないし……。

「彩さんはいっつも会社の人達と来てて二次会前に退散するんだよね？」

「スケベオヤジの相手なんかしたくないもの」

「皆に可愛がられて笑顔の彩さんをいっつも眼が追ってた」

騙されちゃいけない……コイツは役者だ。

でも……なんで知ってるのよ？

「偶然、彩さんにぶつかって……彩さんが助けてくれて、運命だっと思って」

「運命なんてない。さ、放して頂戴」

「真剣に聞いてよ」

肩に掛けられた手に力が籠る。

うつ伏せだった私の身体を反転させて、男は真剣な顔で私を見下



ろしていた。

「会社の人達が彩さんが帰ってから彩さんの話で盛り上がってるのを見て、愛されてるんだなあって思ったよ。皆彩さんが大好きなんだなって……悪口言う人なんかいなかった。2度3度見ていたら彩さんしか見えなくなってた」

しょっちゅう行ってる店って事は……あの半地下の飲み屋か？  
って、そんな事を暢気に考えていられる状況ではない。  
押し倒されちゃってるし、私！

「彩さん、俺と真剣に付き合ってよ」  
「嫌」

即答した。

だって、ごきんぐ胡散臭い。

確かに会社ではマスコットかも知れない。  
元々女性社員が少ない会社だし、所属する部で女は私だけ。  
女というだけでちやほやされてる事は認めよう。

でも、ソレとコレは別。

この男は華やかな世界にいるわけだし、私をからかってるのは説明の必要もないくらい明らかだ。

「彩さん……どうしたら信じてくれる？」  
「何しても信じない」

信じられるわけがない。

それよりも、今の状況から早く抜け出したい。  
ちよつと危険な体勢だと思う。

リビングで携帯が鳴り出した。  
聞き覚えのない曲。  
私ではない。

「あんたの携帯鳴ってるわよ？　早く出なさいよ、マネージャーさんからじゃないの？」  
「彩さん、黙って」

男の顔が近付いてきて唇を塞いだ。  
唇を割って入った男の舌が私の口内を弄る。

触れるだけのキスだけでも久しぶりなのにディープは刺激が強過ぎる。

それも相手はイケメン人気俳優ときたもんだ。

「ちょ……っ！」

唇から離れた男の唇が首筋をなぞる。

「あっ……」

やゝめゝてゝっ!!

8歳も年下だけど男なのだ……。  
私の抗う力なんて大した事ないらしい。  
ぴくりともしない。

「彩さん……」

男の口から繰り返し発せられる名前が私の動きを封じる。  
強すぎる刺激と飲んできた酒が手伝って、一服盛られたように意識が朦朧とする中、私は男に……抱かれた。

聞き慣れない携帯の着信音で目を覚ますと、隣には気持ちよさそうな顔をして寝ているイケメンがいた。

食ってしまった……。

朝一から私は奈落の底に突き落とされたような気分だった。

「……おはよ、彩さん」

私の名前覚えてるんだ……？

「身体……大丈夫？ 久しぶりだったんでしょ？」

何でそれを……？

私は最中にソレを口走ったのか……？

私が真っ赤な顔で男を睨むと男はさわやかな笑顔で私の腕を掴んだ。

「昨日、痛そうだったから何となくそんな気がしたんだ」

よく見てるなあ。

……って感心してる場合じゃなあいつ！

「あんたの携帯鳴ってたわよ」

「海。いい加減呼んでよ」

「嫌」

ベッド脇に転がっている丈の長いパジャマを拾い上げて羽織る。

「彩さん、もつと一緒にしようよ」

「仕事をいい加減にやる男は嫌いよ」

私は男の顔も見ずにリビングに向った。

当然ながら男の携帯の充電は完了している。

ソケットから充電器を外して携帯を開くと……着信が13件。  
鳴っているのにも気付かないほど爆睡していたようだ。

携帯を閉じようとした瞬間、14回目のコールが響きだす。

「……?!」

私はパニックを起こして1人あたふたした。

そして……。

何故か通話ボタンを押してしまった……らしい。

『海?! あんたどこにいるの?! マンションに帰ってないじゃない!』

うつわぁ……！  
どおしよう……っ。

「かつ……海……！」

私は咄嗟に男の名前を呼んだ。

「彩さん、今呼んだ？ 海って呼んだ？」

嬉しそうに顔を出した男の胸に私は携帯を押し付けた。

「ボ……ボタン押しちゃった……っ！」  
「はぁ〜？」

間拔けな声を発した男は、一瞬戸惑ったが携帯を耳に当てて喋りだした。

「おはよう柴田さん……ん？ 今？ 大好きな人の部屋」

ちよっ……待つて！  
そんな事言っていいの……？！

「ごめんねえ、昨日携帯の電源切れちゃってたでしょ？ ……うん、  
大好きな人に携帯も俺も充電させてもらったから大丈夫だよ」

俺もって何……？！  
それってシたって言ってるんじゃない……？！

「今ここはね……彩さん、ここの住所は？」  
「はい……？！」

「迎えが来るんだけど住所が分らないんだよね」

「新宿区下落合 - -」

「だって。じゃ、待ってるね」

だって、って何？

私の声聞こえてるって事？！

「彩さん、相当パニックってる？」

私の顔を見ながら男がクスクスと笑う。

「今までで最悪の朝だわ……」

30年間で最悪の朝。

「俺は最高の朝だけだなあ」

男は携帯をカウンターに乗せると私を後ろから抱きしめた。

「ちよつ……！」

「彩さん……大好き」

私の髪に顔を埋めながら男が囁く。

最近こういう事がなかった私には刺激が強過ぎるんだってば……！！

「か……からかわないでっ」

「からかってなんかないよ。俺は彩さんだから抱いたんだ。他の女なら家にも行かなかったし抱きもしない。それどころか助けだって求めなかったよ」

よくスラスラと言葉が出てくるわね。  
やっぱり天性のプレイボーイだわ。

「さっさとシャワー浴びて帰る用意しなさい」  
嫌だ」

嫌だと言われても困る。

「彩さん、もう1回抱きたい」  
嫌」

そうでなくても久々の行為で節々が痛いのだ。

「言ったでしょ、いい加減に仕事をする男は嫌いよ」  
「……わかった。ちゃんと仕事する、だから今晚も抱かせて？」

ソレしか頭にないのか？！

男の唇が項うなじに触れる。

「あ……っ」

与えられる甘美な刺激に声が漏れた。

「彩さんの声……エッチ」

男がからかうようにクスクスと笑う。

「いい加減にしなさい……っ！」

私は男の足を踏みつけた。

「痛……っ！」

「さっさとシャワー行け！」

力が抜けた瞬間、男の腕から抜け出してキッチンに逃げ込む。

「彩さん可愛い」

「早く行きなさいっ！」

私は布巾を男に投げつけながら再び怒鳴る。  
浴室に向う男の笑い声に腹が立った。

朝から何考えてんのよ……。  
流されそうになった自分が情けない。

取り敢えず朝食を2人分作って、男と入れ違いでシャワーを浴びた。

身体の何箇所にも内出血……所謂キスマークが付けられている。  
こんなものを付けられるのも久しぶりだ。  
妙に恥ずかしい。

何とか会社に行くには問題ない場所ではあるけれど……。  
でも、コレはアレをしたって証拠なわけで……。

私は真っ赤な顔で鏡に映る自分の姿を見つめていた。

相手は成人しているとはいっても22歳。



それもある人。

やバイ……どおしよう。

とんでもない奴食っちゃった……。

私は罪悪感と後悔に苛まれていた。

## 10・2(後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

「俺はもつと前から彩さんを知ってるよ?」  
海君……君はいつから彩ちゃんを知ってるの?

ああ、食っちゃったよ……。  
彩ちゃん……どうしましょう?

それではまた明日

10・3 (前書き)

ヤバイ人種の男を食ってしまった彩。

海……仕事はどうした？

お迎えは来るのか？

来てもいいのか？

浴室から出てくると、男はお預けを食らっている犬のような状態でローテーブルの前に座っていた。

「先に食べればよかったのに」

「彩さんと食べたかったから」

可愛い事言ってくれるじゃない。

私は笑いたいのを我慢してキッチンに向かった。

シャワーに行く前にセットした珈琲はいい香りを部屋中に充満させている。

「珈琲飲む？」

「うん、ミルク入れて」

「自分でやんなさいよ」

何様よ？

………つて、天下の望月 海様よね。

だからって甘やかしたりしないんだから。

「彩さん冷たい………昨日あんな事したのに………」

あんな事って……。

「馬っ鹿じゃないの？ 1回寝たくらいで調子に乗らないで」

そうよ、酔った勢いよ、そうに決まってる。

そうじゃなきゃ困る。

そうしといて。

でもってここを出て行ったらすぐに記憶から抹消して欲しい。

私はカップとミルクを男の前に置いてカウンターの椅子に腰を下ろした。

「何でそんなに離れてんのさ？」

「近寄りたくないから」

カップを口に運びながら答える。

朝のニュースを見ながら会話もなく食事しているとインターホンが鳴った。

お迎えかな……？

しかし、部屋番号を教えた記憶はない。

「これ、知り合い？」

男に尋ねた。

「うん、柴田さん。マネージャーだよ」

「何で私の部屋番号知ってるの？」

「彼女、勘がいいんだ」

そんなわけないでしょ。

コイツに訊いた私が馬鹿だった……。

「今開けますね」

私はエントランスのロックを解除した。

程無くして玄関のインターホンが鳴る。

玄関を開けると間違いない怒っている顔があった。

「海……いますよね？」

「はい。さっさと撤去して下さい」

私はそう言っただけでリビングに戻った。

女性が後ろから付いてくる。

柴田さんという女性は私よりも年上だと思う。

多分40くらいだろう。

バッチリと化粧を施していて、スーツ姿もキマっている。

綺麗に後ろで纏め上げている長い髪は清潔感と几帳面さを感じさせる。

仕事できます！ という感じのキャリアウーマン。

「海、あんた何考えてるの?!」

勝手に上がり込んできた柴田さんは男を怒鳴りつけた。

挨拶よりも怒る方が優先するとは、昨日……もしくは今朝、相当困ったのだろう。

そして、焦ったに違いない。

「彩さん……なんで入れちゃうのさ？」

「さっさと出て行って欲しいから」

柴田さんが不思議そうに私を見る。

「あなたが五十嵐……彩さん？ 同居人さんとかじゃなくて？」

名乗った覚えもないのになんで私の名前知ってんのよ？

この男は私の名前まで伝えていなかったはず。

この2人、本当に気味が悪い。

「……そう、ですけど？ それに私は1人暮らしです。ルームシェアはしてません」

柴田さんが男に視線を戻す。

「あんた……」

彼女が飲み込んだ言葉が凄く気になる。

まあ、どうせロクな事ではないだろうけれど。

そんな言葉を気にするよりも何よりも早く出て行って欲しい。

「お迎えも来たんだし、さっさと帰りなさい。さようなら」

私は男の荷物を纏めて柴田さんに手渡した。

「この子の荷物はこれで全部です」

「彩さん……」

「情けない声出さない！　そういう男は嫌われるわよ」

男の背中を押しながら玄関に向かう。

「ご迷惑をお掛けしました」

「2度と目を離さないようにお願いします」

柴田さんは苦笑しながら私に頭を下げて出て行った。

玄関を閉めた私は、鍵を掛けてその場にしゃがみ込んだ。

「何だっただろ……」

夢か現実か分らない朝だった。

月曜日。

いつもの電車で会社に向う私は、これまたいつものように早朝から開いている店で朝食を摂っていた。

いつもの電車。

いつもの店。

いつもの朝食。

これがいつもの私の朝。

2日前の事など忘れそうになっていた。

違和感の残った身体とそこら中に付けられたキスマークさえなければ、ただ、ただ、ただ。



食事を終えて珈琲を飲んでいると携帯が鳴った。  
背面ディスプレイにメールのアイコンと “望月 海” の文字。

あいつに教えた覚えはない。

登録した記憶もない。

決して酔っていたわけではない。

……あの男、勝手に触ったわね？

私がシャワーを浴びている間しかないだろう。

携帯を開き受信ボックスを開く。

『おはよう彩さん。今日も仕事頑張ったね。俺も頑張るから  
晩行ってもいい？』  
今

この文章は何なんだろう……？

どう見ても “今晚 ” の前の文章はおまけだ。

「馬っ鹿じゃないの？」

私は携帯を眺めながら微笑んだ。

そして男に返信した。

『二度と来るな』

定時を1時間ほど過ぎた頃、同僚が私の傍にやって来た。丁度キリのいいところだったのでグットタイミングだ。

「彩ちゃん、そろそろ行かない？」

「行く！」

あの男の事を考えたくなかった。

昼休みやちよつとした空き時間に思い出してしまうあの男の顔。ただの遊びだと分かっているつもりで見ってしまう受信箱のメール。

らしくないわよ、五十嵐 彩！

仕事を終え、着替えを済ませた私は同僚達とエントランスで待ち合わせて新橋のいつもの店へと向かう。

「あ、彩ちゃん今日のプレゼンありがとね。俺、英語苦手でさあ…」

海外との取引の多い会社で英語が苦手ってどうなんだろう？よく入社できたなあ……。

「大丈夫、クレインさんとは面識もあったし」

「やっぱ彩ちゃんだよなあ。俺と付き合おう」

どんな理屈よ？

「今日のは決まりでしょ？ 彩ちゃん、付き合ったら俺とにしようよ」

ああ……やっぱり。

「1週間以内に契約確定だね。彩ちゃん駄目だよ、付き合っなら俺だよね？」

また始まった……。

なんでこつも毎日堂々と言つてこれるのだろう。  
男つてこついう生き物なのかしら……？

「彩様々だね。じゃ、俺も立候補」

全員却下！

……というよりも、それ以前に絶対皆本気じゃないし。

入社以来、挨拶のようなものだ。  
おそらく彼らも日に最低1度は言わないと気が済まないのだろう。  
取り敢えず毎度の部分は聞き流す。

「じゃ、感謝の証に奢つてもらおうかな？」

私はそう言つて笑つた。

同僚達も楽しそうに笑う。

この会社に入つて既に8年。

同期入社の女の子達は結婚して次々と辞めていった。  
所詮行き遅れ。

大きな溜め息が漏れる。

「彩ちゃん……元氣ないね？」

「そんな事ないわよ、パソコンと睨めっこし過ぎて目が疲れちゃっただけ」

私は慌てて否定した。

行き先はいつもの店。

同僚達もこの店がお気に入りだ。

私同様、店の雰囲気と店員さんが好きなようだ。

疲れていても店に入ると元気が沸いてくる。

笑顔で迎えられてほっとして。

豊富な話題で私達の話盛り上げてくれて。

時々新しいメニューの試食をさせてもらったり。

待つのが当たり前の店なのに、必ずいつもの席をキープしてくれていて。

色々な意味でお世話になっている店である。

「こんばんは」

顔馴染みの店員さんに挨拶すると、いつも座る席に案内された。

テーブルの上には“予約席”のプレートが置かれている。

店員さんはそれを外しながら椅子を引いて私を座らせてくれた。

いつものように中生と簡単なおつまみを注文して他愛無い話をする。

この店でのそんな時間が楽しくて、いつだって時間を忘れてしまふ。

店長さんが声を掛けてくれなければ閉店時間まで居座ってしまいそうで怖い。

「そういえば彩ちゃん、海外研修の話どうした？」

「ああ……まだ保留。今忙しい時期だし……ってもう締め切りよね、ちゃんと返事しなきゃね」

「彩ちゃんがいなくなったら俺ら仕事できないよ。寂し過ぎて」

「大袈裟よ」

2カ月ほど前に上司に呼ばれて告げられた海外研修の話。

締め切りはまだ先だと思っていたけれど……噓、忙しさで忘れていただけけれど。

回答期限は迫っていた。

黙っていればおそらく強制参加になるとは思っけれど、やはり自分の意思是きちんと伝えるべきだろう。

行っただころでたかが2週間だ。

「伊集院君だって行くんでしょ？」

「彩ちゃんが行かないなら考えるよ」

「駄目じゃん」

毎年何人かが参加する海外研修。

去年は飲み仲間である榊君が参加していた。

今年は私と伊集院君。

同じ部から2名の選出は珍しいが、同期が多い年なので仕方ないのかもしれない。

私達が話をしていると妙な視線を感じた。

さり気なく振り返ると、カウンターに……いた。

あの男が。

帽子を被って俯いてるけれど間違いなくあいつだ。

ストーカー……？

さすがにちょっと恐い。

私は気付かないフリをして飲んで騒いで2時間後、店を出たところで皆と別れた。

大体9時から10時には帰路に着くようにしている。

お肌対策。

今更かもしれないけれど。

駅に向かおうとして振り返ると目の前に長身の男が立っていた。

「……何してんのよ？」

「彩さん、海外行くの？」

「は？」

何言ってるの？

「さつき男達と話してたでしょ？」

「ああ……海外研修の話？ ……っていうか何で聞いてんのよ？」

この男危険じゃない？

「どうせ今日は飲みに行くんじゃないかなって思って先回りしてた」

何で分かるの？

恐い。

不気味。

やっぱストーカー……？

実は望月 海のそっくりさんとかってオチ？

「柴田さんは？」

「そこにいる」

男の視線の先に黒いフィルムを張った車が止まっていた。  
車種は分からないけれど。

「送るよ」

「ちょっと待ちなさいよ。私は一人で大丈夫だから放して」

男は私の話など聞きもしない。

私は手を掴まれ、強制的に車に連れ込まれた。  
警察の人が見ていたら職務質問に来そうなくらいの強引さである。

「どういう事なんでしょうかねえ？」

私は運転席と後部座席を区切っているカーテンの隙間からハンドルを握る柴田さんを睨み付けた。

「すみません、躑がなくなって」

「もう少しちゃんとしたトレーナーに預けてでも調教した方がいい  
と思いますよ」

私は厭味たつぷりに言い返す。

「彩さん、肩貸して。眠い」

男は私の肩に頭を乗せて瞳を閉じた。

「ちよつと……っ?!」

「甘えさせてあげてくれない？ 土曜日からずっと仕事で、移動中の仮眠程度しか出来てないのよ」

柴田さんは苦笑していた。

結構……というよりも、かなりハードらしい。  
やっぱり人気があるんだなあ……。

「海？」

柴田さんの声に男は反応しなかった。

既に夢の中らしい。

一瞬で寝れるこの男をある意味尊敬してしまう。

「寝たみたいね。私、貴女と話がしたかったのよ。先日はご挨拶も出来ずにごめんなさいね」

柴田さんは信号で停車している間に、後部座席との間にあるカーテンを少しだけ開けた。

「なんで私を知ってるんですか？」

私は彼女の質問の前に尋ねた。

「海が……いつも貴女の話をしているから」

いつも？

「面識もなかったのに何を話すんですか？」



柴田さんは苦笑した。

「海……あの店の店長さんと仲良しで、時々お忍びで出掛けてて貴女を見つけたみたい。もう1〜2年くらい前だったかしら？」

それ、聞いた気がする。

1〜2年前つてのは知らなかったけれど。

「行く度に貴女がいて、いつも皆と笑ってて本当に楽しそうだって。貴女がいなくても誰も貴女の悪口言わないし貴女の話で美味しい酒が飲めるほど好かれてるんだ、自分もそんな輪の中に入りたいって羨ましそうに話してたわ」

私は彼女の話の話を黙って聞いていた。

「貴女の部屋にいるって聞いて正直驚いたけど、あの日から海……凄く真面目に仕事をこなすし、楽しそうだったの。貴女には迷惑かも知れないけど……少しだけ海に付き合っやってくれないかしら？」

あの日のあの会話だけで相手が私だと分かった事の方が凄く思う。う。

“大好きな人の部屋にいる” としか言っていなかったと思うけれど……。

「今まで本当に手を焼いてしまう困ったちゃんだったのよね、この子」

たった1回しか会ってないかったけれど分かる気はする……いや、不思議とよく分かる。

「この子が誰かに興味を持ったり気を許したりするのは初めてなの」  
随分女の扱いには慣れているみたいけど？

「こんなおばさん相手に何考えてんだか……」  
「あら、海は同じ位の年齢だって言ってたけど？」

本気で言ってたのか……。  
信じられない。  
コイツは視力が悪いに違いない。

私は苦笑した。

「私は30です。この子よりも8歳も年上。この子にはもっと年相応の相手がいるんじゃないですか？ 住んでる世界も違い過ぎるし」

何だか自分に言い聞かせてるみたいだ。  
住んでる世界が違うし年下だ、深入りするな……と。

「海は貴女に本気よ？ 年齢だって関係ないじゃない。芸能界は年齢差なんてあって当然だわ」

芸能界はそうでしょうとも。  
でも一般社会、庶民はそうもいかないのです。  
世間の目は冷たいのです。  
女が年上の場合特に。

「ああ……頭痛い……」

暫くして、車が私のマンションの前に停まった。

「ありがとうございます。コレは持って帰って下さいね」  
「え……？」

柴田さんが驚いたように私に振り返る。  
それこそ “え？” でしょ。

「失礼します」

私は車のドアを閉めてマンションのエントランスへと向った。  
ポストを確認してからロックを解除してエレベーターのボタンを  
押すと、背後から抱きしめられた。

「彩さん……」

誰なのかは愚問だ。

「柴田さんに持って帰れって言ったのに……」  
「俺…… やっと仕事から解放されたんだよ？ 彩さんに会いたかつた」

「金曜日に会ったでしょ？」

「駄目…… 彩さんパワーが切れちゃって仕事にならない」

何故ここまで気に入られたのだろうか？

私の中で疑問が膨らんでいく。

なのに、こんな我が道を行く男が気になり始めているという事実  
を否定する事は出来なかった。



### 10・3（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

武村：海君…… ストーカー？

チヨイ恐いよ、行動とか…… って言うか仕事してんの？ スケジュール空き空き？

海：違つよ、飲み屋の店長である友人情報だもん。

仕事はちゃんとやってるよ。柴田さんが体調管理に煩いから何日かに1回は早めに終わらせてくれる。

武村：柴田さん甘過ぎ……。

海：柴田さん優しいから

武村：携帯、勝手に触っちゃダメじゃん

海：だって訊いても彩さん絶対に教えてくれないと思ったから

彩ちゃんパニックってるみたいです。  
そりゃそうだ。

ではまた明日お会いしましょう

## 10-4 (前書き)

再びやって来た男をお預かりする事になった彩。

海&amp;m p・柴田さんに振り回されてる気がしますけど……。

マンション前に停まっていた車は既になく、私はこの男を預かる破目になってしまったようだ。

その辺に捨ててしまいたい……。

しかし、そんな事出来るわけがない。

コイツは一般人ではない、取り敢えず芸能人なのだ。  
何かあったら私の責任になってしまう。

それは勘弁。

「迷惑なんだけど？」

「そう言わないでよ……」

情けない顔……。

無表情が多いテレビとは全く違う一面を見て私は微笑んだ。

「あ、彩さん笑った」

男が私の顔を見て爽やかな笑顔を見せる。

「そりゃ笑う事もあるし怒る事だってあるわよ。人間だもの」

リビングに行き、ソファベッドに鞆を投げてキッチンに向かう。

「何飲むの？ ビール？ 珈琲？」

「彩さんと一緒」

「じゃ、珈琲ね」

「えっ、ビールにしようよ」

「私と一緒に言ったじゃない」

男は拗ねたような顔をしている。

テレビでは無表情の二枚目役が多い。

シリアスなドラマが多いせいかもしれないけれど。

クールで無口な印象だったんだけど、実際はこんなに表情が変わる男だなんて意外……。

予想以上にガキだし。

私は冷蔵庫からビールを2本取り出し、1本を男に手渡した。

「やっぱり彩さん優しいね」

こんな笑顔を独り占めできたら幸せなんだろうなあ……。

「ねえ、普通芸能人って恋愛は事務所が許さないんじゃないの？」

あくまで噂の話だけれど。

「普通はね。でも俺の場合はオツケーなの」

「なんでよ？」

「だって今までたくさん迷惑掛けてるから。社長が真面目な人間と恋愛して、仕事をちゃんとやってくれるならいいよって言うてく



れてるし」

それで私……？  
ありえない。

「彩さん、好きだよ」

さわやかな笑顔を向けるなよお……。  
なんかどうでも良くなっちゃうじゃない。  
それじゃ困るんだってば。

「で？ 彩さん。さっきの話んだけど、海外に行くってどういう事？」

思い出したように男が訊いてきた。

「海外に研修に行かないかって上司に言われてるの」  
「ずっと？ 永住？」

そんな捨て犬みたいな目で見ないでよ……。  
だいたい研修で永住ってありえないから。

「2週間くらいの予定」

「嫌だ、駄目」

「いつから彼氏になったのよ？ 束縛する男は嫌いよ？」

男は悔しそうに言葉を飲み込む。

「……彩さんは仕事好き？」  
「好きよ？ 楽しいもの」

それは本当。

やり甲斐もあるし、プレゼンが上手くいって契約……なんて事になつたらもう最高！

大口顧客で成約すれば表彰され金一封が部に舞い込む。

そのお金でタダ酒を飲めた日にはまた頑張っちゃおうなんて思えちゃうしね。

「そつか……彩さんは仕事好きなんだ……」

「あんたはどうなのよ？」

「分かんない。中学の時スカウトされて、モデルやって……5年前からはドラマとか出てるけど、何か流されてるって感じで。正直好きとか嫌いとか考えた事ない」

初めて見る、おそらく本当の困った顔。

「でも、撮影終わった時とか充実感みたいなのない？」

「多少はあるよ」

「大事なのはそういう気持ちじゃない？ 頑張って成果を得ると気持ちいいと思うし、また頑張ろうって気にならない？」

「何となくは……」

何となく……か。

「好き嫌いを考える暇もないくらい忙しいのね」

「まあね……ここ半年1日丸々オフなんてないし……」

そりや大変だ……。

男が私を抱きしめる。

「彩さん……」

駄目……流されちゃいそう……。

「放して。ほら、飲めないじゃない」

「彩さん珈琲の匂いがする、俺にもその匂い分けて……?」

唇が重なり、私は男を拒絶できなくなってしまった。

男のキスは今までの男達と比べて、誰よりも優しく情熱的だった。

翌朝、目を覚ますと隣にイケメン俳優。

私をじつと見つめている。

どうやらこの非現実的な出来事は現実のようだ。

「彩さん……好きだよ」

いつから眺めていたのだろうか？

間抜けな寝顔をどれほどの時間見られていたのだろうか？  
すっごく恥ずかしいんだけど……。

男が私を抱き寄せた。

お互い素肌で体温を直に感じる。

男の胸に頭を預けると心地よい鼓動が聞こえた。

やっぱり、この男の腕の中は居心地がいい。

「今日仕事は？」

「あるよ、10時から撮影で28時まで」

「28時って何……？」

1日24時間なんだけど……？

「ああ……翌日の朝4時までって事」

ありえない……。

芸能界って労働基準法とか関係ないんだっけ？  
それにしても過酷よね。

「私仕事行かなきゃならないんだけど？」

同情よりも何よりも、さっさと迎えに来てもらわないと仕事に行けない。

「鍵ちょうだい。掛けて行くから」

……今、サラッと厚かましい台詞を吐かなかった？

「はい？」

「鍵ちょうだい。掛けて行くから」

「鍵渡したら出入り自由になっちゃうじゃない」

「駄目……？」

またその目？

ズルイなあ……。

怪しすぎる男なのに。

なんでこんなに流されてるんだろ、私……。

「彩さん……俺、本気だよ？ 彩さんが好きだ」

重ねられる唇に私は抗う事も出来ない。

「……俺ずっと前から彩さんを見てたんだ。彩さんしか見えなかった。彩さんの笑顔を見て頑張ってたんだ。らしくもなく片想いしちやってさ」

男が若干顔を赤らめながら私の額に口付ける。

「大袈裟」

「本当だよ。だから、彩さん抱いてるなんて夢みたいだ」

それは私も同じだ。

テレビで眺めてた男が目の前にいる。

それもお互い真っ裸。

さらに……2度も、厳密に言えばもっただけれど……食ってしま  
った。

「彩さん？」

私は眼鏡を掛けてベッドから抜け出し、浴室に向かった。  
あの男にのめり込む前に何とかしなければと考えた。

年齢も住む世界も違い過ぎる……。  
きっと私には手に負えない。

だから……研修に参加する事を決めた。

「研修、行きます」

朝一番に部長に告げた。

部長は満面の笑み。

「そうか、彩ちゃん行ってくれるのか。分かった。じゃ、あとで詳細話すから」

「はい」

私は自分のデスクに戻って仕事を始めた。  
何もなかったかのように、いつも通りに。

「断るかと思ったのにどうしたの？」

昼休み、同僚の伊集院君に訊かれた。

一緒に近所のお弁当屋さんに出掛けた時の事だ。

「昨日話してて、ちゃんと決めなきゃなあって思ったの。せっかくのチャンスだし」

私はいつものように笑顔で答えた。

「そっかぁ……じゃ、俺も申し込んどこう」  
「なんで？」

「そりゃ、彩ちゃんが行くなら一緒に行って飲み歩きたいじゃん」  
「飲む事しか考えてないの？」

「彩ちゃん独占できる以外の楽しみって言ったらそのくらいだよ」

その後は馬鹿な話で盛り上がって昼休みが終わった。

夕方、部長から会議室で日程等の細かい説明を受けてから帰路に着いた。

仮初の恋はこれで終わる。

それでいい。

よく知らないうちに別れてしまえば傷は浅くて済む。

お互いに。

研修は来週から。

この会社は数年に1度、社員旅行で海外に連れて行ってくれる。  
パスポートの有効期限は会社も把握していて、有効期限の3か月前になると更新するように通達が来るのだ。

まあ社員旅行とはいっても希望者だけで、代金はほとんどが毎月積み立ててる自分のお金なのだが。

会社側は予算オーバーした分を出してくれるのだ。

そのお蔭でパスポートの期限を心配する必要もなく、研修の締め切りもギリギリの10日前までだった。

多分、繰り上げで研修に行く人間まで決まっていたのだろう。そうでなければおかしい。

キャンセル代も馬鹿にならないし。

部屋に帰ると、あいつのいた痕跡が至る所に残っていた。

そりゃそうだ。

私の方が先に部屋を出たのだから。

私は男のいた痕跡を消すように掃除を始めた。

ベッドカバーも取り替える。

あいつの残り香を消すために。

私はムキになっていたのだと思う。

その理由は……分かってはいたけれど認めたくなかった。

全部の部屋を掃除して除菌消臭スプレーまで撒いてクリーンな空間を作り上げた。

3時間半の大掃除。

最後に、全部の部屋をチェックしてから冷蔵庫を開けてビールを取り出す。

「一仕事終えた後のビールって最高よね」

1人呷き、プルトップを摘んで開けて缶を口に運ぶ。

何故かいつものように美味しくは感じなかった。

鞆の中で携帯が鳴る。

取り出すと、背面ディスプレイにメールのアイコンと “望月



海”の文字。

あいつはこまめにメールをしてくる。

『お疲れ様彩さん。俺はまだまだ仕事が終わりません。深夜ロケも続きます。でも、彩さんに充電してもらったから頑張るね!』

メールを読んだ私の目から涙が零れた。

着信拒否にしておもうとも考えたが手が動かなかった。

手が着信拒否にする事を拒んだ。

繋がっているものはコレしかない。

私はそれを切り捨てるほど大人ではなかった。

そんな勇気はなかった。

たった2回しか会っていないのに。

あいつに惹かれていた自分を認めたくなかったのに……。

テレビを点けると連ドラの時間だった。

テレビの中にあいつがいる。

この部屋では見せない仕事の顔。

やっぱり芸能人なのだと痛感させられる。

哀しい場面ではないのに涙が止まらなかった。

「海……」

決してあいつの前では呼ばないと決めていた。

綺麗な女優さんと抱き合い唇を重ねるあいつの姿を見て嫉妬する

私がいる。

もう手遅れなのかもしれない。

『彩さん』

あいつの私を呼ぶ声が耳から離れない。

いくら耳を塞いでもその声は頭の中に響いていた。

私は冷蔵庫の中のビールを全て飲み干して泣いた。  
その日こそ本当に最悪な夜だった。

# 10-4 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

海外研修決めちゃいました。

たかが2週間、されど2週間。

2人はどうなっちゃうんでしょうか？

それではまた明日

10・5(前書き)

海外研修に出発です。

彩ちゃん、どうするの？

海君、どうするの？

海外研修出発の日。

私は朝から忙しなく確認作業をしていた。

「ガスよし、給湯よし、留守電よし、戸締りよし、パスポートよし  
……っと」

確認を終え、大きなバッグを持って部屋を出る。

あの後、男と会う事はなかった。

深夜ロケがしばらく続くと言っていたし……。

あの男に詳しく研修の話はしていない。  
適当にはぐらかした。

昨晚久しぶりに、うちに来てもいいかとメールがきたが断った。

昨日は準備でそれどころではなかったし……もう会わない方がいい  
と思ったから。

どうせ2週間いなくてもあいつは気付かない。  
その程度のはず。

私達はまだお互いの事を何も知らない。

だから、もう会わない方がいい。

今ならお互いに傷は浅くて済む。

携帯電話も部屋に置いてきた。

2週間後にはきつと今までと同じ毎日が待っているはず。  
吹っ切れて帰って来られるはず……。  
そうであって欲しい。

私はそう願いながら日本を飛び立った。

海外研修は2週間。

フランス、イタリア、デンマークを回る。

展示会に行ったり、各メーカーを訪問したり、工場見学したり、  
実際に組み立てを体験してみたりと、結構中身も充実している。

でも、想像以上にハード。

精神的にも疲れる。

英語圏ではないので何を話しているのかさっぱり分からない。

質問も通訳を介さないと出来ない事が多く、もどかしいし訊きた  
い事の半分も訊けない。

英語が通じたらラクなのだが……現実はこのものだ。

研修の半分を終えた頃にはクタクタになっていた。

まだ1週間もあるのかと思うと哀しくなる。

日本語と日本食が妙に恋しくなってきた。

「彩ちゃん」

「あら、伊集院君」

フロントでキーを受け取っていると伊集院君が声を掛けてきた。

「今晚どう？」

酒を飲むジェスチャーで微笑む彼を見て私も笑顔を返す。

「行く！ 正直凹んでたのお」

「同じ、何言ってるのか分かんないしストレス溜まるよね」

「そうそう、パソコン開けば毎日部長からメール来てるしねえ……」

私達は同時に大きな溜め息を吐いた。

泊まっているホテルにはバーがあり、英語も通じると言われていたので私達はその店に向かい、暫くは他愛ない話をしていた。

研修の感想や見学先で訊けなかった疑問など、伊集院君と話しているうちに疑問がいくつか解決していく。

伊集院君の疑問もいくつかは解決したようだった。

「2週間ってあっという間だと思ったのが間違いだったわ……」

「本当、言葉が通じないだけで時間が4倍長く感じるね」

「まだ1週間も残ってるのかぁ……」

グラスを回してカラカラと氷のぶつかる音を聞く。

「彼だって寂しいんじゃない？」

伊集院君の言葉に私は肩を震わせた。

「別に……そんな事、ない……って言うかいらないしっ」

頭に浮かんだあいつの顔を打ち消すように否定した。  
あいつは彼じゃない。

絶対に違う。

「喧嘩でもしたの？」

伊集院君が心配そうに私の顔を覗き込む。

「だっ……だからいないってば……!!」

「そんな顔で“いない”なんて言っても誰も信じないよ」

どんな顔よ？

「でも……もし、本当にいないなら俺と付き合わない？」

伊集院君はどこにいても伊集院君なんだなあ……。

でも、いつもみたいに笑い飛ばせないのはどうして……？

2人きりだから？

私はいつになく真面目な顔をした伊集院君を見て、どうしたんだ  
ろうと首を傾げる。

「……？」

「だから、俺と付き合わない？」

「付き合わせない」

私じゃない声が伊集院君の言葉を断った。



偶然にしてはあまりにもタイミングが良すぎる。

声の方向に振り返った私達はその人物を見て固まった。

「俺のだから口説かないでくれる？」

男が立っていた。

禁断症状でも出てきたのかと思って内心焦った。

「なっ……何してんのよ？」

「CM撮影」

「柴田さんは？」

「いるよ、仕事だって言っただでしょ？」

男の顔はドラマの時と同じくらい無表情。

「望月……海？」

伊集院君が信じられないというような顔で男を見ていた。

「伊集院君……あの、これは誤解……っ！」

「何が誤解？ 黙ってこんなとに来て俺が心配しなかったとも思ってるの？ なんて何も言わなかったのさ？ ちゃんと答えてよね、彩さん」

呆然とする伊集院君を放置し、男は私の腕を掴んでバーを出た。

「ちよっ………何でここにいるの？！」

変装も何もしてないし………！

バレバレじゃないっ！

どうやら男もこのホテルに滞在しているらしい。

ホテルの一室に連れ込まれた私は腕を掴まれたまま壁に押さえつけられた。

男の目があまりにも真剣で、テレビのように静かな口調で……恐かった。

「なんで黙ってたのさ？」

男は怒りを含んだような目で私を見下ろす。

「仕事なもの……」

私は俯いたまま答える。

決して嘘ではない。

「研修は日程だって決まってたでしょ？　なんで教えてくれなかったのさ？」

「なんで教えなきゃならないのよ？　これは仕事なの、あんたこそ何やってんのよ？」

「俺も仕事だよ」

「海外口ケなんて聞いてない」

いや、予定になかったはず……。

「急遽そうしたから」

どういう意味よ？

「彩さんズルイよ、俺の予定は把握してくせに彩さんは教えてく

れない。なんでさ？」

そんなの……決まってるじゃない。

大体、勝手に予定を話したのはあんたで、私が訊いたわけではない。

コイツは何も分かっていない。

せっかく覚悟して研修に来たのに……なんで来ちゃうのよ？  
これじゃ……。

私は男の手を乱暴に振り払った。

「彼氏面して仕事の邪魔をしないで……！」

「彩さん……?!」

私は男の顔を見る事なく部屋を飛び出し、エレベーターに乗って自分の部屋に帰った。

「何で、ここにいるのよ……？ 会いたくなかったのに……」

嘘……会いたかった。

会いたかったけれど、会ってはいけない男……。  
諦めようとしたのに。

2週間の研修で自分の中からあの男の存在を消したかった。  
無駄な事なのは分かってたはずなのに……。

扉に寄り掛かりながらズルズルと床に座り込んだ。  
俯く私の眼鏡の内側に水滴が溜まっていく。

「もう……嫌っ」

私は暫くその場から立ち上がる事が出来なかった。

翌朝、伊集院君と顔を合わせるのが嫌だった。

とはいえ、同じホテルに宿泊していて食事する場所も決まっているのを避けられはしないが。

「おはよう彩ちゃん」

「お……はよ」

マトモに顔を見られない。

「昨日は驚いたよ。まさか彩ちゃんの彼が望月 海だとはね……」  
「ち……違うのっ、彼なんかじゃないの！ 本当につ」

伊集院君が驚いたような顔で私を見る。

「そりゃ、公には出来ないだろうけど……そこまで否定されると傷付くんじゃない？」

私は拳を握り締めた。

「それとも年の差とか特殊な職業とか気にしてんの？ そんなの関係ないと思うけどね」

伊集院君の言葉に私は俯いた。  
凶星を突かれて何も言い返せない。

どうして皆そう言うのだろうか？

どうして私の決心を鈍らせるのだろうか？  
頑張っている自分が馬鹿みたいだ。

「同じ人間でしょ、変な事気にして大切なもの失ったら辛いよ？  
素直になったら？」

顔を上げると目の前にはいつもの伊集院君がいた。

「1回、ちゃんと向き合ってごらん。それでも駄目だったら俺がいるからさ」

私の頭の上に乗せられた大きな手はとても優しくかった。  
いつものリップサービスだと分かっているけど、その言葉が有難かった。

彼の言葉と優しい手で少しだけ立ち直った自分がいた。

結局、研修中あいつに会ったのはあの日だけ。

翌日、私達がデンマークに移動した事もあったのだが。

日本に帰国した私は真っ直ぐマンションに帰った。  
恋しい恋しい我が家である。

鍵を開けて部屋に入ると出て行った時とは少しだけ違う気がした。  
あの男が来たのかもしれない。

靴を開けてお土産や洗濯物を引っ張り出す。

「まずは洗濯機を稼働させるか……」

私は洗濯物を抱えて洗面所に向かい、洗剤や柔軟剤を入れてボタンを押す。

その後、キッチンで珈琲メーカーのスイッチを入れて、部屋中の掃除をした。

洗濯物もまだ昼だからとベランダに干した。  
身体を動かしていると気がラクだった。

一通り掃除を終えた私はシャワーを浴びて、リビングで珈琲を淹れてテレビを点けた。

日本語が流れている。  
当然の事なのに凄く嬉しい。

ソファに横になつてしていると睡魔に襲われ、私はあっという間に眠りに就いた。

目を覚ますとテレビの音が聞こえていた。

点けっ放しで寝ちゃったんだ……。

1時間くらい寝ていたようだ。

買い物にも出掛けないと冷蔵庫の中には何もない。

しかし、その気になれないのは長旅の疲れからだろう。

デリバリーでも頼めばいいか……。

「もう一眠りしよ……」

私は1人呟いてベッドに向かった。

柔軟剤の馨りが心地いい。

だけど、微かにあの男を感じる。

同じ匂いがして当然なのだ。

あの男はうちでシャワーを浴びたし、服も私が洗濯したのだから、2回しか会っていないのに、あいつの服は何故か我が家に置いてある。

始めて会った日、男は大きなボストンバッグを持っていて、その中には着替えも充分なほど入っていたのだ。

風呂上りにそのまま放置された服は私が洗濯をしてクローゼットの中に片付けた。

捨てる勇氣はなかった。

着信拒否する勇氣がなかったのと同じだ。

自分の匂いなのに……我が家の匂いなのに、あいつを思い出して泣きそうになった。

私は布団に包まり再度眠りに就いた。  
思った以上に疲れていたらしい。

再び目を覚ましたのは夜。  
真っ暗な部屋。  
リビングから声が聞こえる。

ああ……テレビ点けっ放しだったかも。

寝室の扉を開けると廊下の電気が点いていた。  
点けた覚えはない。

「あ、起きた？ 洗濯物取り込んだわよ」

私以外、誰もいないはずなのに聞き覚えのある声がして。  
見覚えのある顔がキッチンから出てきた。

あの男のマネージャー、柴田さんだ。

「……何、してんですか？」

ここ、私の部屋なんですけど？

「貴女に会いたくて来ちゃった」

さすがあの男のマネージャー……。



どうやら彼女1人らしい。

残念なようなほっとしたような……複雑な気分。

「日本食が恋しかったんじゃない？」

「ええ……まあ」

彼女が私と話したいなんて、あの男の事以外ない。

日本食オンパレードの夕食を突きながら柴田さんはようやく口を開いた。

「彩さん……海の事なんだけど……」

ほらね……。

「何ですか？」

「あの子……貴女が研修に出掛けた事知らなくて、貴女が帰って来ないってすつごく心配してたの。だから、私が会社に電話をして行き先や日程を訊き出したの。本当に仕事にならないくらい動揺してたのよ？」

あの男に甘過ぎるんじゃない？

それ以前に、なんで会社知ってんのよ？

「そしたら……撮影をイタリアでやりたいって急に言い出して」

「あ、CMの？」

そんな事言ってたな……。

「で、行ったわけなんだけど……」

けど？

っていうか普通行く？

そんな我が儘が罷り通るの？

「その後からえらく落ち込んだじゃって使い物にならないのよね」

私のせい……？

いや、それは自惚れというやつだ。

ありえない。

「元々クールな役ばかりだからドラマは困らないんだけど、他の仕事で、ねえ……」

「……何が仰りたいんですか？」

苛々する。

「貴女……年齢とかあの子の仕事とかすごく気にしてない？ そのせいであの子を遠ざけてない？」

「……だったら何ですか？」

「あの子も仕事が終われば普通の男の子だって分かってる？」

そりゃ……そうでしょうとも。

「あの子を信じてあげる事は出来ない？」

信じるって……何？

「貴女だってあの子の事嫌ってないでしょ？ 寧ろ好きなんじゃない？」

「なっ……」

「あの子は貴女の周りにいるその他大勢の男達と同じなの。普通の男だし普通の人間なの。変な線引きをしてあの子を拒絶しないであげて欲しいの」

何でこんな事言われなきゃならないの……？

「貴女に何が分かるんですか？ 私の事何も知らないくせに……！」  
「分かるわよ、少しなら」

柴田さんは苦笑した。

「私の夫も芸能人だから」

……はい？

「多分貴女と同じ事考えてたわ。ま、相手が15も年上だから年齢は気にしなかったけど……でも、やっぱり住んでる世界が違い過ぎるって思ってた。だから何度も別れようって思ったし、身を引こうって思った……確かに相当な覚悟は必要かもしれないけど、今は後悔なんてしてないわ」

柴田さんの旦那さんが芸能人？

「柴田さんの旦那さんって……？」

誰……？

「猪俣 いのまた 達郎 たつお」

それって……超有名なハリウッド俳優じゃない？  
でも、あの人は独身じゃ……？

私は柴田さんの顔を疑うように見た。

「バレてないだけよ」

彼女はにっこりと微笑む。

「仕事とか……何も言われないんですか？」

「お互い忙しいからねえ……特に私はあの坊やに振り回されてるし……でも、だからこそ久しぶりに会うといつも新鮮な気持ちでいれるのかもね」

私は彼女の話の黙って聞いていた。

「ドラマで他の女優と絡んでるの見て嫉妬したりして心狭いなあなんて思ったりしたし、あれは仕事で浮気じゃないんだ、って思ってもなかなか納得出来なかったけどね」

この人もそんな風感じてたんだ……。

「写真誌に撮られたらそれを疑って喧嘩ばかり。嘘なのか本当なのかも分からなかった」

柴田さんは昔を思い出すように遠い目をしながら苦笑した。

「今だって100%信用できてるわけじゃないんだけどね」

柴田さんも不安なんだ……。

私だけではないのだ……。

「それでも、もう離れるなんて考えられないの。そのくらい大きな存在なのよね、悔しいけど」

同じかもしれない。

私の中でもあの男の存在が大きくなってしまっている。  
もう駄目なのかもしれない。

彼女の言葉が私の作っていた頑固な壁を叩き割り始めた。

「あの子の居場所を作ってあげて欲しいの。あの子は貴女が傍にいてくれればそれ以外を望んだりしないわ。前にも言っただと思うけど、あの子が誰かに興味を持つのは初めてなの。あんなに甘えたり笑ったりした事なかったの。貴女だからだと思ってる」

貴女だから……。

そう言われて私の目から涙が零れ落ちた。

「同じ立場の先輩としていくらでも相談に乗るから……あの子をお願いできない？」

私は黙って頷いた。

恐いけれど……きちんと向き合ってみようと思ったから。

その日食べた久しぶりの日本食は涙の味がした。

10・5（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

武村：海ってやっぱりバイんじゃない？

急遽海外口ケってありえないし。

柴田さんかなり苦労したんじゃない？

っていうか本当に人気あんの？

柴田：あの子に振り回されるのは慣れましたよ。

急遽海外口ケってのはさすがに初めてで調整に苦労しました。

休みにしてやろうとした日に予定入れちゃいましたよ。

当然でしょう？

でも、帰国後使いものにならないのよ。

選択間違っちゃったかしら……？

人気はあるのよ、本当に。

でも、仕事させるからには健康だけは気を付けなきゃでしょ？

殺人的なスケジュールは組まない事にしてます。

ただでさえ扱いの難しい子だし。

ガキだし、我が儘だし、仕事選ぶし、彩さんっ子だし、甘え

上手だし、床上手だし。

武村：……そうだね。

……っていうか柴田さん、海と寝た事あんの？

柴田：あるわけないでしょ。

武村：だって……床上手って。

柴田：今まで海の女管理もやってきたから。  
皆口揃えて上手って言ってたわよ。  
あ、彩さんには内緒ね

武村：柴田さん……？

ちなみに床上手というのは女性に使う言葉で男性には使いません。

柴田：煩いわよ、そこ。

武村：すみません……。

それではまた明日

## 10・6（前書き）

海外研修から帰って来て11日目。  
彩の様子がおかしい事に同僚達も気付いてるようです。



柴田さんがうちに来てから既に2週間以上。

男からの連絡はない。

こちらから連絡する気はなかった。

どちらかといえば連絡が来ない方がいいと思っていた。

向き合おうと決めたはずなのに、心のどこかでそれを恐れている。  
なのに気が付けば携帯を確認していて。  
そんな自分が理解できなくて苛々した。

海外研修中に送られてきたメールは2通。

『会いに行ってもいい?』

『彩さん、今どこにいるの?』

多分2通目はこの部屋から送られたのだろう。  
いくら待っても帰って来ない私にメールをしたのではないか、と  
思う。

出発から3日後のメール。

「彩ちゃん」

仕事を終えて片付けをしていると伊集院君が声を掛けてきた。

「そろそろ行く？」

「行く」

即答した私の顔を見て伊集院君が苦笑する。

「喧嘩でもしたの？」

「会ってもいないし連絡もないわよ。さすがに愛想尽かされたんじゃない？」

それならそれでいい。

拒絶したのは私だもの……。

会いに来てくれるなんて期待はできない。

それどころかさつさと次のお相手くらい見つけているかもしれない……。

そう思つと胸に刃物が刺さつたような痛みが奔つた。

「ま、今日は皆で楽しんで忘れよ？」

「うん」

伊集院君は優しい。

詳しく訊き出そうとはしない。

聞かれたところで私もどう答えていいのか分からないのだが。

会社の入口で待ち合わせて全員が揃つたところで駅の方向に歩き出す。

向かうのはやはりいつもの店。

あいつがいるかもしれない……そんな小さな期待と、いたらどうしよう……という不安。

いつものように席に案内され、ビールとおつまみを注文して話を出す。

「彩ちゃん、最近ボーっとしてない？」

「そんな事ないけど……何かミスあった？ 何かやつちゃった？」

「ミスとかじゃないよ、ただ気になっただけ」

「最初は時差ぼけかなって思ったけど、研修後くらいからなんか沈んでる気がするんだけど？」

皆の眼が私に向けられている。

周囲に気付かれてしまうほど落ち込んでいるとは思っていなかった。なので正直焦る。

「ああ……時差ぼけは辛かったなあ。ね、伊集院君？」

思わず伊集院君に助けを求めた。

「休み明けの会社は辛かったよね」

伊集院君は話を合わせるように言葉を返してくれた。

「でも、彩ちゃんが帰ってくると部署が明るくなったよ。いない間最悪だったんだよ？ 部長も機嫌悪くて課長に当たるから俺等までとばっちり食うし」

「なんで……？」

「心配だったんじゃないの？」

「部長、彩ちゃんを可愛がってるからねえ」

確かに……それは認めよう。

「ま、研修がエロ課長じゃなくて伊集院とだったから部長も多少は安心だったとは思っけど」

課長とは嫌だなあ……。

もし課長とだったら行かなかったかも。

「でも伊集院も部長からしたら敵だからなあ……」

確かに。

部長はいつも伊集院君を威嚇してる気がする……。

「あ、ごめん。ちよつと失礼」

この話題を引っ張られるのが嫌で私は立ち上がった。

「行つてらっしゃい」

伊集院君は察してくれたらしく私に笑顔を向ける。

私は逃げるように店の奥にあるお手洗いに向かった。

「彩ちゃん大丈夫か？ 伊集院、お前本当に何も知らないのか？」

背後から声が聞こえた。

「彩ちゃんも疲れてんじゃないか？ 男の俺だつてしんどかったから。英語も通じないからストレス溜まるし、部長から毎日メールきてたし」

伊集院君はあの男の話をしなかった。  
凄く有難かった。

水道の蛇口を捻って手を洗い、ハンドペーパーで拭いて、その冷えた手を顔に当てた。

ひんやりとして気持ちいい。  
動揺した心が少しずつ落ち着きを取り戻していく。

「よしっ」

意味も分からない気合を入れて、私はお手洗いのドアを開けた。  
すると、目の前に背の高い“ヤツ”が立っていた。

「……何？」

心臓に悪い。

毎度毎度、突然現れないで欲しい……。

せっかく平常心を取り戻したのに、この男はトコトン私を振り回す。

……何から話していいのかも分からない。

「久しぶり」

男が俯きがちに一言だけ言葉を発した。

「そうね」

顔色はあまり良くない。  
若干痩せた気がする。

仕事が忙し過ぎるのかもしれない。

「あんまり遅いと皆が心配するの、何か話があるなら後で聞くわ」

男を直視できずに通り過ぎようとした瞬間、腕を掴まれて抱きしめられた。

「なっ……?!」

「彩さん……会いたかった」

さすがに場所を考えて欲しい。

フロアからは見えないように配慮された壁があるけれど、いつ誰が来るか分からない。

この男が店にいる事もだが、女と抱き合っているところなど見られたら大騒ぎになるに違いない。

男にとって友人の営むこの店は唯一安らげる場所のように思えた。だからこそ余計にマズイ。

大事な場所を失ったら、この男はきつと壊れてしまう。

「後で話し聞くから。今はやめて、放して。人が来て困るのはあんたよ?」

私は平静を装って男の背中を軽く叩いた。

渋々と私を解放した男は軽くキスを落としてフロアに消えた。

期待なんかしちゃ駄目……。

私は自分にそう言い聞かせて同僚達の許に戻った。

伊集院君が何か言いたげな顔をしている。

あの男に気付いたのかもしれない。

それでも、“誰か”と違って場を弁えている彼が私に訊いてくる事はなかった。

飲んで笑って2時間後、私は同僚達と別れて駅に向って歩いていった。

車のクラクションが聞こえて、何となく音の方向を向くと柴田さんの乗った車が停まっていた。

気付かないふりをして帰ろうかとも思ったが、柴田さんと目が合ってしまったので仕方なく車に向かう。

「こんばんは。送るから乗って」

「いえ、結構です」

「彩さん」

柴田さんの申し出を断った瞬間、不機嫌な男の声が聞こえた。

「話、聞いてくれるんでしょ？」

ああ……そんな事言ったような言わなかったような……。

逃げたくて適当な事を言っただけなので覚えてはいない。

「彩さん乗って」

困惑している私に柴田さんが再度促す。  
断れる雰囲気ではなかった。

私は仕方なく助手席に乗り込んだ。

「何で後ろに乗らないかなあ……」

ばやく男の言葉を無視して私は柴田さんを見た。  
彼女は微笑むだけで何も語ろうとはしなかった。

すごく……気まづかった。

マンションに到着した車から私が降りると当然のように男も降りた。

「明日6時に迎えに来るわね」

柴田さんはそう言い残して車を発進させた。

私は男を無視するようにエントランスのロックを解除して中に入る。

男は慌てて後を追って来た。

エレベーターに乗り込むと同時に大きな身体が私の身体を優しく包み込む。

「彩さん、ごめん……仕事の邪魔とかするつもりなかったんだ。ただ……あのおっさんが彩さん口説き始めたからつい……」



ああ、研修の時の話が……。

「まだ、怒ってる……?」

「怒ってる」

自分が芸能人であるという自覚がない事に。

我が儘を言つて周囲の人に迷惑を掛けた事に。

「それと、伊集院君がおっさんなら私はおばさんよ。彼は同級生<sup>タメ</sup>なの」

男が情けない顔で私を見下ろす。

「ごめん……そんなつもりで言つたんじゃない」

どんなつもりで言つたのよ?

エレベーターが部屋のある4階で止まった。

「ほら、離れなさい。歩けないじゃない」

私は男の胸を押し離して部屋に向かう。

部屋に入るとローテーブルの上に綺麗にラッピングされた箱が置かれていた。

勿論私が置いたわけではない。

「お詫びの印」

男が私を背後から抱きしめ、後頭部に触れた柔らかな男の唇が動

く。

「物で釣る気？」

「釣られてくれるの？」

そうきたか……。

「あんた次第じゃない？」

私は男に見えないように俯いて微笑んだ。  
もう既に釣られているなんて絶対に教えてやらない。

「可能性はあるの？」

随分と自信ないのね。

「ゼロではないと思うけど？」

男の唇が首筋に触れた。

「あっ……ちよっ……！」

「彩さん……大好き」

大好き……か。

「鬱陶しい……離れて。シャワー行きたい」

私は男の腕から離れてキッチンに向かい、珈琲メーカーをセットしてスイッチを入れた。

「彩さんって珈琲好きだよね」

「好きよ、1日中飲んでる」

「胃悪くするよ?」

「そこまで軟弱じゃないわ」

「鍛えようがない箇所だと思うけど……」

確かにね……。

「冷蔵庫にお茶もビールも入ってるから勝手に飲んでなさい」

私はそう言っただけで浴室に向かった。

私は決して長風呂ではない。

長風呂ではないのだが……シャワーを浴びて部屋に戻ると男はソファベッドで寝息を立てていた。

やっぱり、仕事がハードなのかしら?

男の綺麗な寝顔を見ながら私は微笑んだ。

「幸せそうな顔して寝るのねえ……」

安心してきつた顔。

どこか幼ささえ感じる。

私は寝室から毛布を持ってきて男に掛けた。

ピクリともしない。  
かなり疲れてるようだ。

「疲れてるなら真っ直ぐ帰ればいいのに……」

男の顔に掛かる髪をそつと掻き上げ、その寝顔を眺めながら就寝前の珈琲を堪能した。

こんな顔を眺めながら珈琲飲むなんて贅沢だわ……。

“可能性はあるの？”

「好きでもない男と何度も寝るわけじゃない……馬鹿……」

私は1時間ほど飽きもせず男の寝顔を眺めてから寝る準備を整え寝室に向かった。

夜中、急に身体に重いものを乗せられたような感じがして目を覚ました。

「……重っ」

「何で起こしてくれなかったのさ？」

目の前に男がいた。

それもかなり至近距離だ。

それよりも、なんで私に跨ってんのよ？

「気持ち良さそうに寝てたから」

私は欠伸をしながら答える。

「彩さんといられる貴重な時間なんだよ？ 分かってる？」  
「分かってない。おやすみ」

布団に包まって男に背を向けると、男がベッドに潜り込んできた。

「あつちで寝なさい」

「嫌だ。彩さん、パワーちょうだい？」

それは……させると同意語じゃ……？

「嫌。眠いの」

断ったところで無駄なのは承知している。

男の手は既に私のパジャマの下から進入してきた。

「いい子に寝なさ……あつ……！」

結局私は男の腕の中で翻弄され寝不足の朝を迎える事になった。

早朝4時。

私が目を覚ますと隣でイケメン俳優が気持ち良さそうに眠っていた。

昨日まであんなにグズグズめそめそしていたのにすっかりとした気分。

理由は簡単。

この男がここにいるから……。

今更拒絶などではしない。

でも、この男への対応を変える事もできない。

この男はこんな私でもいいのだろうか？

こんな天邪鬼な私で……。

暫く男の寝顔を眺めて私は浴室に向かった。

軽くシャワーを浴びて朝食の準備に取り掛かる。

柴田さんが迎えに来るのが6時。

あまり時間がない。

トーストと珈琲とスクランブルエッグにベーコンにサラダ。

朝食としては充分だろう。

ローテーブルの上に乗っかっている大きな箱を持ち上げ、カウンターに移動させる。

……が、妙に軽い。

片手掌に載せて軽々運べてしまうほどの重さだ。

しかし、今はそんなものに構っている時間はない。

柴田さんが来てしまうのだ。

私はリビングのローテーブルの上に皿を置き、寝室で寝ている男を起こしに向かった。

「起きなさい、柴田さん6時に来るんでしょ？ 朝ごはん作ったから食べて行きなさいよ」

男は妙に目覚めが良かった。

「おはよ、彩さん……ってなんでそんなに離れてんのさ？」

私は寝室の入口横の壁に寄り掛かっていた。

「さっさと準備しなさい」

そう言い残してリビングに引き返す。

「彩さぁん……お目覚めのキスはあ？」

何甘えてんのよ……。

私はその言葉を見殺してローテーブルの前に腰を下ろし、ソファに背中を預けて珈琲を口に運ぶ。

ボクサーブリーフにシャツを羽織った姿で男はリビングにやって来た。

鍛えられた身体は腹筋が割れている。

俳優でモデルの男なのだから脱ぐ事も少くないし、鍛えなければならぬのだろうが……。

見る！ とばかりに晒される肌に苛立つものを感じる。

しかし、体脂肪の少なそうな綺麗な身体に見とれてしまうのも事実。

苛立ちも忘れてついつい凝視。

「そんなにじつと見ないでよ……」

男が恥ずかしそうにほんのりと顔を赤らめる。  
だからといって隠さないところが妙にムカつくけれど。

「何言ってるの？ 見せ慣れてるでしょ？」

男は私の隣に腰を下ろし私の肩を抱き寄せた。

「コラ」

「彩さんの匂いだ……」

どんな匂いよ？

「さっさと食べてシャワー浴びなさい」

「嫌だ。彩さんの匂い洗い流したくない」

「馬鹿言わないの。仕事に行くんだからちゃんとしなさい」

男は拗ねた顔で私を見ている。

可愛い……。

母性本能を撥られる。

「じゃあシャワー浴びたらキスしていい？」



どういつ交換条件よ？

そうは思うがグズグズされると困る。

「はいはい、どうぞ」

私は適当に答えて食事を開始した。

既に5時。

お迎えの時間が迫っている。

拗ねられても面倒だし、適当にあしらっておいた方がいい。

男は携帯でスケジュールを確認しながらパンを齧る。

行儀が悪いとは思っけれど変に口出しをすると面倒なので今日は無視する事にした。

「彩さん」

「ん？」

「俺……来週から海外ロケ」

「行つてらっしゃい」

「……週末来てもいい？」

「どういう理屈よ？」

「充電させて？」

それまた……させると同意語じゃない？

「週末云々よりもさっさと食べて行く用意なさい」

こんなやり取りにさえ幸せを感じる自分がある。

ああ……私は望月 海という底なし沼に足を踏み入れてしまったらしい。

抜け出せそうもない。

このままこの男に溺れていく……そんな気がする。

……っていうか既に溺れてそう。

## 10 - 6 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

鍛えられた男のボクサーブリーフ姿……。  
個人的に好きです。

完全に趣味と妄想の世界です。  
結構、言って欲しい台詞とか喋らせてます。

海からのプレゼント。

中身はなんだろう？

それは明日のお楽しみで……。

箱の大きさも書いてないあたり微妙な気がします。

それではまた。明日までお待ち下さい

10・7 (前書き)

海からのプレゼント・・・。  
期待できない箱の中身は・・・？

テレビが午前6時を知らせた瞬間にインターホンが鳴った。  
下で待機してたのではないかと、思うほど時間に正確。

エントランスのカメラには柴田さんの姿が映っている。  
私は黙ってエントランスのロックを解除した。

「柴田さん来たわよ」

洗面所にいる男に声を掛けて玄関の鍵を開ける。

柴田さんは黙って上がってくるだろうし、出迎えの必要はないと  
思う。

何よりものんびりしている時間がないのは私も同じなのだ。  
今日は休日ではない、平日なのだから。

「彩さん、約束は？」

「何か約束した？」

「風呂上りのキス。まだしてもらってないんだけど？」

「記憶にないわ」

私はキッチンで食器を洗い始めた。

「おはようございます」

やはり柴田さんはインターホンを押す事なく部屋に上がり込んできた。

この人達の非常識さに一々怒ってたらキリがないので敢えてツツコミは入れない。

「預かり物は洗面所にありますよ」

私の言葉に柴田さんは苦笑した。

「吹っ切れた？」

「……多少」

「それでいいんじゃない？ 無理せず貴女のペースで」

柴田さんはそう言って洗面所に向かった。

無理せずに私のペースで、か。

「海。早くしなさい、時間ないわよ」

「分かってる、焦らせないでよ」

「早く早く早く早く！」

「柴田さあん?!」

2人のやり取りを聞きながら私はキッチンでクスクスと笑っていた。

「おはよ、彩ちゃん」

少し早めに会社に着くと、既に伊集院君が自分の席に座っていた。

「おはよ」

伊集院君は私の真正面の席。

「仲直りできた？ 昨日店にいたでしょ？」

「やっぱり気付いてたんだ？」

「まあね」

伊集院君はそう言ってパソコンに視線を移した。

「そういえばこの間のプレゼン成功だったみたいだよ」

この間のプレゼンって……。

「うちで決まりだってメールがきてる」

伊集院君が私に微笑んだ。

「本当?!」

海外研修前から水面下で進行していた企画。

内容は伊集院君や矢島君と一緒に考えたが、プレゼンを担当したのは私だった。

「いい顔してる」

伊集院君はそう言って私の頭に手を乗せた。

「伊集院！ 彩ちゃんを口説くな！ 触るな！ 半径3m以内に近付くな！」

部長が大きな足音をたてながら近付いて来て伊集院君の手を叩き落とす。

「彩ちゃん気を付けなきゃ……こんなの餌食になっちゃ駄目だよ、勿体ない。彩ちゃんにはちゃんとした、いい男が見つかるはずだから。こんな男で妥協したら一生後悔するんだぞ？」

もう苦笑するしかないだろう。

さすがに最近の部長を見ていたら将来が不安になってきた。

あの男の存在を知られたら大変な事になりそうだ。

徐々に独身の男性陣全員を威嚇するようになってきたし。

私の売れ残りの原因って部長も関係してたりして……？  
いやいや……他人様ひとさまのせいにしちゃいけない。  
原因は私にあるに決まっている。

「立候補はしてるんですけどね、強敵がいますから」

伊集院君の言葉に私は肩を震わせた。

「強敵って誰だ……？！」  
「部長」

伊集院君は意地悪な笑みを浮かべていた。



木曜日は飲みに行かない。

いつの間にか、飲みに行くのは月・水・金と決まっていた。そんな日はのんびり買い物をしつつ部屋に帰るだけ。

自宅に帰った私は風呂を済ませて寛ぎながら、ある物体を睨んでいた。

カウンターの上に乗せてある箱だ。

あの男からのプレゼントである。

開けようかやめようか……。

でも、このまま放置するのもなあ……。

結局、いつまでもこの状態で放置しておくのも目障りなので解体する事にした。

私はリボンに手を掛けてラッピングを解いていく。贈り主がああ男だけに不安が過ぎる。

あの男、常識ないからなあ……。

すっごい変な物が入ってそう。

取り敢えず動いている気配はないので生き物ではないだろう。

大体、この中途半端な大きさの箱は何？

横40cm x 縦60cm x 高さ30cm位の箱。

箱の中では何やらビニールの音。

そして……妙に軽い。

多分、女性が喜ぶものとは無縁だろう。  
包装紙を排除して、私は蓋を開けた……。

「……」

言葉が出なかった。

中に入っていたのは……先日からオンエアになった、あの男が出演しているCMの商品やその製菓会社の商品オンパレード。

私は思わず嘔き出した。

1人きりの部屋で馬鹿みたいに笑い転げた。

やっぱりあの男は馬鹿だ。

これで私を釣ろうとしたのか？

ありえない。

私は箱の中から煎餅を取り出し早速封を開けた。

「あゝ笑った。暫くつまみには不自由しないわね」

買って来たビールを開けて煎餅を摘みながら私の夕飯は終わった。  
独身で頻繁にやってくる彼もいなくて特別自炊に拘るわけではない女の日常とはこんなものだ。

金曜日の夜、私はいつもの店にいた。

伊集院君と2人きりなんて研修以来である。

他の3人は外に出ているので遅れて合流するのだと伊集院君は言っていた。

「彼とは会ってるの?」

「ん? 帰国後は1回だけ」

「それでも仲直りが出来てよかったじゃん」

伊集院君は優しく微笑む。

「でもねえ……聞いてくれる?」

私は男からのプレゼントの話をした。

笑わせようなどと思ってはいないので、脚色もせずありのままそのまます。

「確かに期待なんて全くしてなかったんだけど……予想できないっていつか、普通に予想しない物だと思わない? ありえないでしょ?」

伊集院君は大爆笑。

気持ちは分かるけど……。

私もかなり昨日笑ったし。

「面白過ぎ……普通そんなもんあげないし、そんなもんにラッピングするかな?」

「でしょ? おつまみには不自由しないけど……素直に喜べないの

よね」

「そりゃそうだ。でも意外だね、そんな天然馬鹿だとは思わなかった」

伊集院君は尚も笑い続ける。

さすがに笑い過ぎじゃ……？

「特製春巻きと麻婆豆腐お待たせしました」

やって来たのは店長の大久保さん。

私が軽く会釈すると大久保さんは私に微笑んだ。

「あつちで2人を呼んでる奴がいるんだけど」

大久保さんが小声で告げる。

呼んでる奴……？

私と伊集院君は顔を見合わせた。

「この席はそのままにしておくから行ってやってくれませんか？」

私達は鞆だけ持って大久保さんの後に付いて行った。

「彩さん、何で2人で飲んでんのさ？」

そこには機嫌の悪い男がいた。

「嫉妬か坊や？」

伊集院君が企んだような笑みを浮かべながら私の肩を抱く。

「彩さんに触らないでよ」

「羨ましいだろ？」

なんで挑発するかな……。

「何で2人つきりなのさ？」

「デートだから」

「伊集院君」

私は伊集院君の手を退けて彼を軽く睨んだ。

「まったく……皆遅れて来るだけよ」

私は溜め息を吐いた。

なんでそんな事で呼ぶのよ？

他のお客さんが気付いたらどうする気？

「結構余裕ないんだな、お菓子野郎」

お菓子野郎って……確かにそうんだけど、でもちょっと……。

伊集院君は思い出したように笑い出した。

「彩さん、この人イカレてるの？」

いや、イカレてるのはあんただし。

「普通ありえないでしょ、お菓子の詰め合わせなんて」  
「なんで知ってんのさ？」

男が不機嫌に伊集院君を睨む。

「彩ちゃんから聞いたからに決まってるだろ？」

伊集院君は笑い出すとなかなか止まらないらしい。  
お腹を押さえながら目尻を拭っている。

泣くまで笑わなくても……。

「彩ちゃん、席戻ろっ。春巻き冷えちゃうよ、温かいのが美味しいのに」  
「あ、うん」

私は笑いが治まらない伊集院君に手を掴まれて席に戻った。  
直後にメールが届く。

『部屋で待ってるから』

あの男にしては上出来だ。

伊集院君の前で言わなかっただけでも進歩だろう。

私がメールを見ながら微笑むと、伊集院君が苦笑した。

「彼から？」

「え？ あっ……いや……」

「結構シヨックだったりして」

「え？」

「そんな顔されると凹むよ」

「何で？」

「俺マジだから」

意味が分からない。

再び携帯が鳴った。

今度は電話のようだ。

「もしもし？」

『何口説かれてんのさ？』

「は？」

『鈍いよ彩さん、鈍過ぎ。その目の前の男に代わって』

私が顔を上げると伊集院君が不思議そうに私を見ていた。

「代わって……」

「俺？ もしもし？」

伊集院君は私から携帯を受け取り平然と話し出した。

「は？ ……ああ聞こえてたの？ ……そういう環境の方が燃えるよ。実際、会社にも君以上の強敵がいるからね。……さあ？」

伊集院君は楽しそうに話している。

きつと、座敷にいる男は不機嫌だろう。

伊集院君の顔を見ているとそうとしか思えない。

「でも、結局は彼女次第でしょ？」

伊集院君はいつものようにフフツツと笑い電話を切った。

そして、身乗り出して私の掌に携帯電話を載せながら小さな声で囁く。

「嫉妬されちゃったみたいだね」

「嫉妬？」

「愛されてるんだね彩ちゃん」

自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

愛されてるって……私が……？！

あ……ありえない。

「あの男、相当彩ちゃんに惚れてるよ。自信持ちなよ」

持てるわけないでしょ……。

「伊集院、彩ちゃん口説いてるのか？ 抜け駆けはズルイぞ」

遅れて来た同僚達が店内に入って来て苦笑している。

「気を利かしてあと1時間位遅れてくれたら落とせたかもな」

「「無理無理」「」」

とんでもない事をサラツと言う伊集院君に同僚達は笑いながら手や首を振って否定する。

私も無理だと思うけれど、仲間内だから言える台詞。

奥の席から殺気を感じるのは気のせいではないだろう……。



私は奥から発せられる冷たい視線に大きな溜め息を吐いた。

10・7（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

海からの贈り物。

お菓子の詰め合わせでした。

撮影後に貰ったんでしょうね。

やっぱり分からない男です。

何か考えがあったのかなかったのか……。

やっぱり続編（海視点）書かなきゃ……。

いや、超書きたい……！！

海の気持ちも分かってもらいたい！！

また明日お会いしましょう

10・8 (前書き)

『部屋で待つてるから』という海からのメール。  
初めて飲み屋で彼の背中を見送った彩。

私は重い足取りで部屋に向かっていた。

あの後、男は小銭をわざと落として、拾いながら伊集院君に何かを言ってから帰って行ったのだ。

一体何を言ったか全く予想も出来ない。

そういえば、あの男が店から出て行くのを初めて見た気がする…

…。

今までどうやって中に入って帰っていたのだろうか？

鍵を開けて部屋に入ると珈琲の匂いが漂っていた。

「お帰り、彩さん」

予想に反して穏やかな男の顔。

不機嫌だとはかり思っていた私は無駄な心配で済んでよかったと安堵の息を漏らした。

でも、何があったのだろうか……？

「ただ……いま」

何か薄気味悪いんだけど？

「今、珈琲淹れるよ」

「何よ？ 急にどうしたの？」

男は鼻歌を歌いながら珈琲をカップに注いでいる。

「彩さんさ、柴田さんと何か話した？」

柴田さんと話すって……何を？

私が柴田さんとする話って言ったらあんたの事しかないじゃない、  
って……え？！

「な……なんで？」

動揺を誤魔化す事が出来ない。

柴田さん……この男に何か話したんですか……？！

ま……まさか……。

「柴田さんが2人つきりで話をしたって言ったから……違うの？」

内容は……聞いてない、の？

男は不思議そうに私を見ている。

その様子は飼い主の機嫌を伺う犬のよう。

「違う……ないけど、あんたには絶対に言わない。関係ないし」

男があからさまに頬を膨らませて拗ねた。  
聞いていたらこんな反応なわけがない。

私は内心ほつとした。

「あんたこそ伊集院君に何言っただのよ？」

あの後、伊集院君は妙にご機嫌だったけれど……この男が伊集院君を喜ばせるような言葉を掛けるとは思えない。

「彩さんは俺のだから口説かないでよって言った。帰りは、これ以上口説くなら彩さんに会社辞めてもらうからって」

「誰がそこまでの権限をあげたのよ？」

「あいつにも、君にそこまでの権限はないんじゃない？ って笑われた。彩さんが悪いんだよ、あんな奴に口説かれてるから……」

伊集院君が私を口説く……？

何言ってるの？

「いつものリップサービスよ。真に受けなくてもいいのに……」

「それ、本気で言ってるんの彩さん？」

「へ？」

本気も何も……日課だし。

「彩さん、イタリアで口説かれてたの忘れてない？」

イタリアで……？

私は首を傾げる。

「彩さんが口説かれてるから俺口挟んだんだけど？」

ああ、あの時か……って、あれって口説かれてた……？  
いつもの調子だったけど？

あ、この男は初めて見たからそう思っちゃったのかも。

「彩さん……天然もそこまでいくと犯罪だよ？」

犯罪？

一体何罪になるってのよ？

「部の人達って皆あんな感じだけど？」

男の顔が曇る。

「彩さんって……どんな職場にいのさ？」

「どんなって？ 普通の職場じゃない？ まあ、女性が少ないとは思うけど」

特別な職場ではないと思う。

他の職場など知らないけれど。

「あの男が言ってた強敵って誰？」

「強敵……？」

何なのよ、この事情聴取みたいな質問攻めは？

まあ、事情聴取なんて受けた事ないけれど。

「彩さん、俺の他にも男いるの？」

「あんたいつの間に関の男になつたのよ？」

「やっぱモテるんじゃない？」

「何それ、厭味？ 喧嘩売ってんの？」

ああ鬱陶しい。

そう思った時、朝の部長と伊集院君の会話が頭を掠めた。

そういえば伊集院君が言ってたっけ。

私は“強敵”を思い出して笑みを漏らした。

強敵、ね……そっかそっか。

「何？ その笑いは何？ 何なのさ？」

男がローテーブルにカップを置いて私の隣に腰を下ろした。

「強敵って……多分、部長の事よ。私の事凄く可愛がってくれてるお父さんみたいな上司」

「お……父さん？」

「そう。今……いくつだろ？ 56とか7じゃないかしら？」

男の顔が幾分和らぐ。

「何で強敵なのさ？」

「ん……いつも周囲を威嚇してるから？」

特に伊集院君を。

なんで気に入られているのかは分からないけれど、部長には可愛がってもらっている。

ま、嫌われるよりも好かれる方がいい。

仕事もしやすいし。



「彩さんって名刺持ってる？」

名刺……？

「あるけど？」

事務員なので本来は必要などないが、プレゼンをやる時に配るように言われて作らされたのだ。

社内でも珍しいケースだろう。

私以外に名刺を持っている事務員さんなどいないのではないだろうか。

「頂戴」

「何ですよ？」

「欲しいから」

なんで名刺なんか欲しいんだろ？

変なコレクションでもしてんのかしら？

私は鞄から名刺を取り出して男に手渡した。

「絶対職場には掛けてこないですよ？」

男が一瞬驚いたように見えた。

そして、じつと名刺の裏表を見つめた後、嬉しそうな顔をしてセカンドバッグに仕舞う。

その様子に違和感を感じたけれど追求はしなかった。

その後はまったりと珈琲を飲んで、私がシャワーを浴びて出てく

ると……男はやっぱりソファで寝ていたのだった。

毎度毎度……。

「疲れてるなら帰って寝ればいいのに」

私は苦笑しながら寝室の毛布を持って来て男に掛け、背の高いフロアスタンドの電気だけを残して寝室に向かった。

「彩さん」

ベッドに潜り込んだ瞬間男の声がした。  
振り返ると寝室の扉の入口に男が立っている。

「起こしちゃった？」

「俺が彩さんと一緒にいる時間を大切にしたいって思ってるの分かってるでしょ？　なんで起こさないのさ？」

「疲れてるみたいだから」

それ以外に何があるのよ？

「彩さんは分かってない。俺は1秒だって彩さんと離れたくない」

男はそう言っただけで私のベッドに潜り込んで来た。  
その腕は迷う事なく私を掴まえる。

「彩さんのぬくもりが欲しい」

それは……やっぱり、させると同意語じゃ……？

男は私を組み敷いて微笑んだ。  
嫌な予感……。

「明日、彩さんも休みでしょ？」

「そりゃ……土日は休みだけど……？」

「寝かせないから」

男はそう言っ て私に口付けた。

「勘弁して……んっ……！」

そして男に翻弄させられながら何度も身体を重ねた。

薄っすらと空が明るくなり始めた頃、男が呟いた。

「また3週間も会えないんだよ？」

「へえ、3週間も海外？ いいなあ……」

「ドラマロケと写真集の撮影なんだけどね」

「そっかぁ……3週間、か。」

「ちょっと寂しいかも……」。

「寂しい？」

男が私の顔を覗き込んでくる。  
凶星なだけに悔しい。

「ほっとしてる」

ああ……私って素直じゃないなあ。

「なんで？」

「絶対にあんたが来ないって分かったから」

私は男の鼻先を指で弾いた。

「はうつ……！」

鼻を押さえて男が上を向く。

「彩さん……引っ越す気ない？」

男が急に真剣な顔で訊いてきた。

少し赤みを帯びた鼻が笑いを誘うけれど。

相変わらず何もかもが唐突だ。

少し前の私なら、おかしな声を出して問い返していたに違いない。  
しかし、この男や柴田さんと関わるようになってこの程度では驚かなくなつたようだ。

慣れって恐いわね……。

「なんで？」

「ここ……セキュリティ万全じゃないし……良かったら俺の住んでるマンションに越して来ないかなって思ってた」

この男の住んでいる場所もマンションも私は知らない。

「俺並びの部屋全部買い占めてるから安心して引っ越してこれるよ？ 家賃も必要ないし」

家賃なしってのは魅力的なんだけど……タダより高いものはないって言うし。

「週刊誌に彩さんを撮られたくない。彩さんを守るにもその方がいいと思うんだ。俺は彩さんを手放したくない」

大人の男みたいな事言っちゃって……。

その言葉に喜んでいる事を認めたくない私がいる。

「俺が海外ロケから帰って来るまでに考えておいて？」

男はそう言って私を抱きしめた。

私もこのぬくもりを手放したくない。

なのに、まだまだ覚悟は出来ていなかった。

男の言葉に即答できない自分が情けない。

少し前なら即座に断ったと思うんだけどなあ。

断れない時点でかなりこの男に惹かれてるって事よね……。

ああ……どおしよう。

最悪の罠に嵌トラップってしまった気がする。

それよりも並びの部屋買い占めてるって言わなかった……？

それってとんでもない事なんじゃ……？

私はウトウトする男の顔を覗き込む。

確かに売れっ子かもしれないけれど……この子の金銭感覚って大丈夫なのかしら？

「俺に見惚れてるの？」

「あんた……並びの部屋買占めたって言った？」

「うん、だって他の人に会いたくないから。近所付き合いつて面倒そうだし」

そういう奴なのよね、あんたって……。

人見知りだつてのは分っているけれど、大金使つてまで避けなきゃいけない事なのかしら？

「でも、結構芸能人が多く住んでるから社宅みたいだよ？」

だからセキュリティがしっかりしてるのか？

……いや、逆ね。

セキュリティがしっかりしてるから芸能人が多いのだろう。

「各フロアにちゃんと警備員が常駐してるから変な奴は入って来れないし、安心できると思うんだよね。だから彩さんにも住んでもらいたい」

「知り合つてそんなに経つてないのによく言えるわね？」

「彩さんにしか言わないし、他の人に言つた事もないよ。俺は彩さんしか見えないつて言つたでしょ？俺はずっと彩さんだけを見てきたんだよ？」

言われた気はするけれど……。

それを信じると？

テレビドラマで歯の浮くような台詞を吐いている男の言葉を？

そりゃ無理つてもんでしょ。

冗談と嘘と本気の境界線なんか分かりやしない。

私は言葉を返すこともなく苦笑した。

土曜日。

私は昼まで寝ていた。

こんなに熟睡したのは久しぶりかもしれない。

隣に男の姿はない。

目を覚まして男の顔を眺めるのが楽しみだった私はちよっぴり残念。

帰ったのかな？

仕事は休みだって言っていた気がするけれど。

まあ、いつか。

私は再び布団に包まって瞳を閉じる。

その直後、扉が開き足音が近付いてきた。

「彩さん」

あれ……いたんだ？

私は男の方に振り返った。

「おはよ、彩さん」

男はシャワーを浴びていたらしい。  
髪が濡れている。

「髪……濡れてるわよ。乾かしなさい、風邪引くから」

私は手を伸ばし男の頭にそつと触れた。

「俺……女に頭触られるの嫌いだけど、彩さんに触られると嬉しい」

男はさわやかな笑顔を私に向けた。  
その手が伸びてきて私の頬を撫でる。

「彩さん……一緒に暮らそうよ」

朝からその話……？  
って、もう昼だけど。

男の顔が近付いてきた。  
そして唇が優しく触れる。  
唇も耳も首筋も……。  
唇が触れた場所が熱を持つ。

「くら……もう駄目っ……」



「なんで？ 3週間も会えないのに……」

このガキ……。

「私の身体がもたないのっ……あんたみたく若くないのよっ……」

どれだけシタと思ってんのよ……？！

既に身体が痛い……。

大体今シャワー浴びて来たんでしょ？！

「仕方ないなあ……じゃ、ちょっと休憩」

ちよつと休憩……ってまだする気？！

もういいでしょ、勘弁して……。

本当に身体が辛い……。

「シャワー行ってくる」

私は男の腕をすり抜け、腰を擦りながら寝室を出た。  
廊下には珈琲の香りが漂っている。

私が寝ている間にスイッチを入れてくれたようだ。

ちよつと嬉しい。

緩む頬を押さえながら私は浴室に向かった。  
こんな顔、絶対にあの男に見られたくない。

だって……悔しいじゃない？

## 10 - 8 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

続編決定しました。

なので、謎な部分をそのままいくつか残したまま彩編を終了させる事になりそうです。

っていうか、彩視点では解決できないんですよ。

海編と……あともう一つくらい何か書きたいです。

どこが短い話なんだ……？

ってあんまり言われない長さには収めたいですけどね……。

見捨てないで明日も読んでください

10・9（前書き）

友人の井守澄香がやって来る事になった。  
この来訪は吉と出るのか凶と出るのか？

シャワーから出てくると男の声が聞こえた。

楽しそうに話をしている。

友達からでも電話が掛かってきてるのかもしれない。

私がリビングに戻ると男の手には何故か私の携帯が握られていた。

「ちよっ……！」

誰と話してんのよ？！

「あ、彩さんが来たから代わるね。彩さん、井守さんだって」

井守 いもり 澄香 すみか……？！

それは人生の半分付き合っている友人の名。

「勝手に電話に出ないでよ！ 何考えてんの？！」

「1回目は出なかったんだけど、2回目が鳴ったから急用かなと思  
つて」

「だからって……！」

「早く出てあげなよ」

差し出された携帯を受け取りながら私は男を睨み付けた。

「彩さん、怒ってる？」

「怒ってる」

携帯電話を耳に当てると笑い声が聞こえた。

「……もしもし？」

『久しぶりい。あんた面白いのと付き合ってるのね』

面白いつて？

「何話してたのよ？」

『海君って言うんだねえ』

私<sup>ひと</sup>の話を聞け！

『年下でしょ？』

「そうよ」

8歳もね……。

『えらい猛烈アタックだったんだって？』

はい？

『ずっと片想いしてて、偶然話す機会があったから勢いで家まで押しかけて襲っちゃいました、って言ってたよ？』

私は男を睨んだ。

芸能人だとはバレていないようだけど……男のくせにペラペラ喋ってんじゃないわよ！

「彩さん怒らないでよお……」

男が私の腰に手を回してきた。  
唇が私の頭に優しく触れる。

『あははっ、なんか可愛い男じゃない。今度会わせなさいよ、彼は都合が合えばいいって言ってたよ？』

「はあ？！　ちよつとあんた勝手に会う約束したの？！」

私を無視して勝手にそんな約束しないでよ！

思わず2人に対して怒鳴ってしまった。

「だって彩さんの友達に会ってみたいから……駄目？」

「駄目っていうか……自分の立場分かってんの？！」

「彩さんの友達なら安心でしょ？　それとも信用できないような友達？」

そうじゃないけど……。

『何？　あんたの彼氏ってそんなにヤバイ人なの？』

「ある種ヤバイ人種なのは否定しないわ……で？　用事って何だったの？」

私はこれ以上訊かれない様に話題を変えた。

『今晚暇かなって思ってた電話したのよ』

「今晚？　なんでよ？」

『私が暇だったから』

そついう奴よねあんなって……。

どうやら私は非常識な人間に好かれる体質らしい。  
よく考えると澄香も私に対しては全く遠慮がない。  
学生時代から振り回されっぱなしだ。

私は溜め息を吐いた。

「今日帰るんでしょ？」

男を見上げると首を傾げられた。

なんでよ？

仕事があるなら帰りなさいよ。

今夜も昨日みたいに盛られたら私の身体が持たないし。

「なんで？　帰らないよ？」

「準備は？」

「柴田さんがやってくれるから」

私は顔を顰めた。

がっかりした事よりも、柴田さんに準備させるこの男に呆れたし  
腹が立ったのだ。

「あんなって本当にお子様ね。自分の用意くらい自分でしなさいよ」

「柴田さんがセンスないって言って服とか選ばせてくれないんだから仕方ないでしょ？」

まったく……柴田さん甘やかし過ぎ……！

「彼女来るの？」

嬉しそうに男が私を見下ろす。

『何？ 行ってもいいの？』

男の声が聞こえたらしく、電話の向こうからもご機嫌な声が返ってくる。

確かにこの男を外には出せない。

それに、この男は彼氏というわけでもないから会わせるのはちょっと考えてしまう。

「澄香……今日は……」

『酒買つて行くから！ 時間は未定、早いかもしれないし遅いかもしれない……って事でこれ以上エッチはしないでね！』

「だから今日は……っ！」

『じゃ、後でね！』

一方的に電話を切られた。  
いつもの事だけれど。

「あんたが勝手な事言うから来る事になっちゃったじゃない！」  
「駄目だった？ 俺は知らない彩さんをもっと知りたいんだけど？」



そ……その台詞はズルイと思う。  
私にはあんたを知る術はない。  
大久保さんに訊く勇気もない。

私は大きな溜め息を吐いた。

午後3時過ぎ、私達は遅い昼食を済ませて部屋で寛いでいた。

「彩さぁん、いい加減機嫌直してよぉ……」

男は情けない声と顔を私に向けている。

「嫌」

常識はないし遠慮はないし芸能人だし。

私は男に背を向け、テレビを見つつ珈琲を飲んでいた。

「彩さん、ごめん。でも、俺もつと彩さんの事知りたいんだ」

男が後ろから私を包み込む。

同じシャンプーの香り。

「珈琲が零れるから放しなさい」

「嫌だ、彩さんが許してくれるまで放さない」

だったらずっと許すのやめようかしら……。  
一瞬そんな事を考えた自分が情けない。

「あ、望月 海……」

テレビ画面にクールな男の姿が映し出されていた。

このCM、凄く好きだったりする。

このCMは、男が女性に引つ叩かれるところから始まる。

日めくりカレンダーが何枚も捲れ、落ち込んだ男と背中を震わせ  
て泣いている女性の後姿が交互に映る。

そして、この部屋では見せない仕事の顔をした男が、ビデオカメ  
ラを固定してその前に立ち、髪を整えたり咳払いして長い沈黙の後  
カメラ目線で一言 『愛してる』 と恥ずかしそうに言う。

その映像を彼女に送って仲直り、というプチドラマのようなデジ  
タルビデオカメラのCM。

CM中の台詞は男の “愛してる” だけなのだ。  
相手女性の顔は1度も映らないし、声も出さない。  
その他の場面では切ないプロエの曲が流れるだけ。

「本物がここにいるんだけど？」

「こっちの方がいい」

「彩さんひどい……」

男の唇が耳に触れた。

「あっ……」

「彩さん……好きだよ、本当に大好き。彩さんも俺だけを見て？」

男が私の手からカップを抜き取りテーブルに置いた。  
そして後ろから私の顔を覗き込むようにキスをする。

「彩さん……」

キスを繰り返しているうちに私は男に組み敷かれていた。

「彩さん、目の前の俺だけを見て……？」

男が私の眼鏡を外した。

眼鏡を外される前にみた男の目が寂しそうに見えた。  
何故なのかは分からないけれど。

そして唇が、私の脣や鼻先、頬から首筋、鎖骨へと滑るように触れる。

「もう……駄目っ……」

流されそう……。

流されてもいいかも……という雰囲気になってきた時、インターホンが鳴った。

カメラに映っているのはおそらく澄香だろう。  
見えないけれど。

「放してっ……澄香が……」

私は男の胸を押し離し、眼鏡を掛けてエントランスのロックを解除した。

「もう1時間位遅かったらよかったのに……」

なにが？

なんで？

私は真っ赤な顔で男を睨み付けた。

「残念……」

本当に残念そうな顔しないでよ……。

「あんた……本当に会うの？」

「うん、会いたい」

確かに口の軽い子ではないし、信用は出来るけれど……。

「彩さん、好きだよ」

なんでそんな話の逸らし方するの？

男の指が私の髪を滑り、項に固定されると唇を重ねた。

「こんなに愛しいと思った女<sup>ひと</sup>今までいなかった」

男はいつになく真面目な顔でそう言って私の頬を撫でる。

信じてしまいそうだ……。

「信じて……こんな気持ち、俺も初めてなんだ」

男に抱きしめられ私は男の背中に手を回した。

男の背中に手を回したのは……多分、ベッドの上以外では初めて。

「信じて？　俺には彩さんだけだから……彩さん大好きだよ」

“彩さん大好きだよ”

男の言葉が魔法のように私の中で何度も繰り返される。

「ずっと俺の傍にいてよ」

男はそう言っで私の顔を見下した。

玄関のインターホンが鳴った。

私は慌てて男から身を離し、玄関に向う。

「あ、玄関から見えないところにいなさいよ？」

「ん、分かった」

男から小さな溜め息が漏れたような気がした。

「やつほーっ」

玄関を少し開けると、えらくテンションが高い親友が勢いよく扉を開け放つ。

「あんた元気ね……」

見てるほうが疲れるくらい、無駄に元気がいい。



澄香は真っ赤な顔で男に釘付けになっている。

澄香が俳優の望月 海が好きだというのは知っていたが、特殊な相手だけに変な相談も出来ないし、ついつい話しそびれていた。

私達の関係も凄く曖昧だし、上手く説明出来ないからというものがある。

「挨拶しなさい、あんた会いたかったんでしょ？」

私が男に視線を移すと、男はさわやかな笑顔を澄香に向けた。明らかに営業スマイル。

と、いつてもテレビで笑ってる姿などほとんど見ないけれど。

「初めまして、望月 海です」

男は壁際のチェストに軽くお尻を乗せたようなポーズで会釈した。

カッコつけちゃって……。

澄香も1時間後には幻滅しているだろう。テレビとは全く違うこのオコサマな男に。

澄香に近付くと、彼女の手が思いつきり私の背中をバシバシと叩いた。

興奮度MAXらしい。

「い……痛いつ……！」

痛みに顔を歪めせると男が私の手を引っ張って抱きしめた。

「彩さんを苛めないでくれませんか？」

男は笑顔のまま澄香を諫める<sup>いさ</sup>。

「あつ……ごつごめん！ ちょっとつていうか、かなり動揺しちゃつて……っ！」

澄香が真っ赤な顔で手をブンブンと振ると空気が唸る。

だから、ソレが凶器なんだってば……。

元バレー部主将で、当時は全国大会にも出てたからそれなりに強かったのだろう。

今でも母校のコーチやつてるから馬鹿力は健在だし、スパイカーだっただけに叩かれると相当痛い。

特に興奮している時は加減など忘れているのだから尚更だ。

「ちょっと……離して。動けないでしょ？」

男は渋々と私を解放して床に腰を下ろした。

「澄香、あんたも挨拶位しなさいよ」

私は澄香の傍に転がる酒を拾い集め、買い物袋に入れてキッチンに向かった。

もう1つの袋には大量のおつまみ。

どれだけ飲む気で来たのだろう……？

「い……井守澄香です。彩とは高校からの付き合いでもう15年友



達やってます……」

「高校から？　15年も？」

男の顔が俳優の仮面を外して子供のようなものに変化する。  
好奇心丸出しだ。

私はそんな男の顔を見て苦笑した。

「高校生の彩さんってどんな感じだったの？」

「え？　彩は……今と大差ないかもね」

「じゃ、昔から人気者だったの？」

「人気者ねえ……うーん、まあそうかも。彩の周りにはいつつもたくさん人がいたからなあ……」

懐かしむように澄香が答える。

私は2人の会話を聞きながら酒を冷蔵庫に入れ、つまみを皿に乗せていた。

「彩さんモテた？」

「何度か告白はされてたみたいだけど……どうかな……？」

確かに微妙。

澄香のほうがモテていたし。

私と違って澄香は、スリムで長身でボーイッシュな容姿だけれど女らしいし素直さがある。

男の人に素直に甘えられるのは羨ましい。

私はつまみとビールをテーブルに運んで腰を下ろした。

澄香は嬉しそうに男と会話を楽しんでいる。

私の代わりにたくさん質問をしてくれたので、知らなかった男の過去を少しだけ知る事が出来た。

そういう意味では感謝だわ。

気が付けば陽はどつぷりと暮れ、時計は午後9時を指していた。

「あんた明日仕事でしょ？ さっさとお風呂行って寝なさい。肌荒れるわよ？」

私は男に視線を移した。

結構飲んでるのに男は素面と思えるほどに変化がない。

一方澄香は……真っ赤な顔をして呂律も回っていない。かなり危険……。完全な酔っ払いである。

「澄香、あんたもそろそろ帰りなさい。また来ていいから」

私が澄香の肩を叩くと彼女に睨まれた。酒癖の悪い女って最悪……。

「海よ？ もちつきかいっ（望月海）！ なんれ（なんで）海があんまり惚れらのろ（あんたに惚れたのよ）？！」  
「それ……私も疑問だし……」

未だ理解できない。

だから、私に訊かれても困る。  
何よりも私がソレを知りたい。

「彩さんだからだよ。つい何でも話しちゃうし、時々無性に会いたくなるし、見てるだけで安心しちゃう……彩さんの代わりなんて誰も出来ない。澄香さんだってそう思うでしょ？」

男は穏やかな顔で私を見ていた。

「海君はあ、彩にろっこんらろれ」（ぞっこんなのねえ）  
「そうだよ、俺の基準は全て彩さんだから」

妙に大人びた男の顔に私は視線を逸らした。  
恥ずかしかった。

そして……嬉しかった。

10・9（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

澄香の前で堂々と好きと言える海って凄いと思います。  
本気だからこそ言えるんでしょうね。

海も不安だったんですね。

海のがきの空気が消えたのは酒のせいなのかなあ??  
頑張っても大人の男になりきれないところが海なんですよね

明日は『彩編』最終日です

10-10 (前書き)

海が海外ロケに出掛けました。  
彩は……悩んでいます。

私は酔っ払った澄香をタクシーで送り届けてマンションに帰って来た。

「ただいま」

「お帰り」

部屋の中には珈琲の香りが充満していた。

「ご苦労様」

男が珈琲の入ったカップを私に差し出す。

「ありがとう」

思わず素直に礼を言ってしまった……。

「いい友達だね」

男が私に微笑む。

「そうね」

それ以外の言葉が見つからない。  
いい友達と言われると素直に嬉しい。  
澄香は親友だから。

「俺を見ても写メも撮らなかったし、サインも強請<sup>ねだ</sup>らなかった」  
「そうね。でも、澄香はあんたのファンだから後日こっそり頼まれるとは思う」

私はクスクスと笑った。

澄香が興奮して忘れただけだとは言わない方がいいだろう。

「彩さんも楽しそうだった」

「あんたも楽しそうだったじゃない」

「楽しかったよ。澄香さんに会えたし、彩さんの話たくさん聞けたし」

私はカップに口に運びながら恥ずかしくて視線を逸らした。  
テーブルの上は綺麗に片付いていた。

「片付けて……くれたの？」

「彩さん彼女送って行ったからその間にね」  
「ありがとう……」

やってくれた事なかったのに……調子狂うなあ。

この男……もしかして酔うところなるのかしら……？

「もしかして酔ってる？」

「全然。俺酔わないみたい」

男は私の顔をじっと見つめていた。

「そんなにじつと見ないで、凄く恥ずかしいんだけど?」

「3週間も会えないんだもん、今夜はずっと見てたい」

「駄目、寝なさい。あ、その前にお風呂入ってきなさいよ?」

私は男の視線から逃げるようにキッチンに入った。

洗い物もなくなっている。

男が洗ってくれたらしい。

「彩さん、訊いてもいい?」

「何……?」

私は振り向かないで問い返した。

男が傍に歩み寄ってくる。

「少しは……俺の事好きになってくれた?」

はい……?

男の手が私の横髪をそつと掻き上げる。

シンクにカップを置くと、男が私の両肩を掴んだ。

「な……何?」

驚いている間に冷蔵庫に身体を押し付けられた。

「俺の勢いに負けてるだけ? 俺の事嫌い?」

何でそうなるの……?



「俺は愛してるよ、彩さんを愛してる」

男は真剣な眼をしていた。

“愛してる”なんて言葉、初めて言われた……。腰抜かしそう……。

「彩さんは……？ 俺、不安なんだ。俺の勢いに流されてるだけみたいで……名前も呼んでくれないし、素っ気ないし……俺、嫌われてるの？」

確かに……目の前で名前を呼んだ事はない。呼ばないと決めている。

素っ気無いのも分かってる。

だけど、今更どうする事も出来ない。

「答えて彩さん、俺……迷惑？」

今にも泣きそうな声だった。

「そんな事……ない……」

好きよ……。

その言葉を口にするのを私は躊躇った。

「流されてるわけじゃ、ない……」

そう言った瞬間男に抱きすくめられた。

「彩さん……俺が素の望月 海になれるのは柴田さん以外では彩さ

んだけなんだよ？」

柴田さんもそう言ってたっけ……。

この男は澄香に躊躇いもなく会ったのだ。

多分、私が彼氏だと紹介しても笑顔で挨拶したに違いない。

私はこの男を信じてみようと思った。

多分……この男は私に嘘は吐かない。

確証なんて何もないけれど……そんな気がした。

私を抱きしめる腕に力が籠る。

「彩さん、愛してる……俺を見てよ……」

震える小さな声で男が言った。

もう駄目だ……しっかりと捕らえられてしまっている……。

もう逃げる事なんて出来ない……。

男が海外ロケに出た翌週の週末、澄香に呼び出された私は池袋の  
ハンス前に立っていた。

「彩」

澄香が私の後頭部を何かで叩いた。

「海君載ってるから買って来た」

差し出されたのは丸められた雑誌だった。  
写真込みで4ページというのが多いのか少ないのか私には分からないけれど。

私達は近くの喫茶店に入って珈琲を飲みながら雑誌を捲った。  
雑誌記者との対談だった。

記者： 女性を見る際に最初にどこを見ますか？

望月： 空気……ですかね？

記者： 空気？

望月： 女性の周囲の空気です。女性自身はあまり見てないかも。

記者： 空気を見てどう思うんですか？

望月： 人に好かれるタイプだとかそうじゃないとか？

記者： 人に好かれる方がお好きなんですか？

望月： そうですね、意図的じゃなくて……自然と人を集めちゃうような人が好きです。

記者： じゃあ、好みの女性は？

望月： 優しく、甘えさせてくれて、周囲を楽しませてくれて、男女問わず好かれてる人ですかね。

記者： 意外ですね、甘えるんですか？

望月： 俺、甘えますよ。相手が引いちゃうくらい。（笑）

記者： 想像出来ません。

望月：俺だつて人間ですからね、素の望月 海で休みたいじゃないですか。そんな時に何も訊かないで甘えさせてくれる人って素敵だなんて思います。

記者：綺麗な人と可愛い人ってどっちがお好きですか？

望月：外見は気にしません。重要なのは中身ですから……勿論、<sup>ハート</sup>心って意味ですよ？（笑）

記者：年上が好きとか年下が好きとかってありますか？

望月：特にないです。年齢なんて気にした事ありませんから。

記者：気にした事ないんですか？

望月：ないですね。生きてる女性全員が対象です。

記者：ストライクゾーン広いですね。

望月：そうでもないですよ。男女問わず好かれる人って少ないですから。

記者：女性の好きな仕草は？

望月：仕草だけで惹かれる事はないですけど、好きな人だったらどんな仕草も愛おしいと思いますよ。

記者：好きな女性と行きたい場所なんてありますか？

望月：特にないです。好きな女性と一緒にならどこだって最高の場所じゃないですか？

記者：どこでも？

望月：ええ、近所のラーメン屋さんも高級レストランと同じ位素敵な場所に思えますよ。好きな女性といるってそのくらい幸せな事なんだと思いますけど？

記者： 女性を好きになったら御自身は変わります？

望月： 貪欲になりますね。小さな事にも嫉妬しますし……元々大きくないけど、それ以上に器の小さな男になります。（笑）

等など、恋愛に関するインタビューだった。

「愛されてるねえ、彩。普通に素で話してんじゃん……って言うか思いつきり公の場で告ってる」

澄香の攻撃力の強いデコピンが私の額に飛んできた。  
軽く星が飛ぶ。

「気のせいよ」

私は真っ赤な顔を俯いて隠した。

「でも……これ読んで納得できる人間いないだろうね、イメージ違い過ぎ」

「いても困るわよ」

納得できる人物は男が甘える人物だけだもの。

男が私以外に甘える……？

そんなの……嫌。

うわっ……今更だけど、私って心狭っ……！

「まだ帰って来ないんでしょう？」

「3週間って言ってたけど……延びそうだった」

私は男の写真を眺めながら呟いた。

「そっか……帰って来たらまた遊びに行ってもいい？」

「駄目って言っても来るでしょ？」

「まあね」

澄香には結局、引越しの話をする事は出来なかった。

誰かの意見ではなくて、私が……私自身が決めなければいけない事だと思ったから。

きちんと考えて答えを出して、男に伝えてから話そう。

そう思ったのだ。

会えない間、私はただ男の事だけを考えていた。

3週間は長い。

1週間も過ぎると寂しくなっていた。

ただあの男が来ないだけなのに。

そんなに会っていないのに……来ない事がこんなに落ち着かないとは思わなかった。

出会って2ヶ月足らず。

なのに、こんなに惹かれている。

一緒に住むって本気？

知り合って間もないじゃない。

こんな何の取り柄もないつまらない女に本気で言ってるの？

8つも年上のおばさんよ？

来月には31になるのよ？

自分でも分かっているくらい重症な天邪鬼なのよ？

傍にはもつと美人で年齢も近い、素敵な女の子達がたくさんいるじゃない……。

何で私……？

いくら考えても答えなど見つからない。  
知っているのはあいつだけ……。

なんで俳優なんだろう？

どうして俳優なのだろう？

お蔭で嘘か本当かも分からない。  
信じていいのかも分からない。

でも……信じたい。

私はあの男が好き。

それだけは否定できない事実なのだ。

男が帰国したのは約4週間後。

男が海外ロケに出てから捲ったカレンダーも半分以上が過ぎ去っていた。

飲んでいる最中にメールが来たので、私は怪しまれない程度で帰

って来た。

男は鍵を持ったままだから勝手に入れるけれど、部屋で待っていたかった。

少しでも早く……会いたかった。

「ただいま、彩さん」

玄関を開けた男の肌は、陽に焼けて男らしさを倍増させていた。心なしか心拍数が上がる。

「随分焼けたのね」

「脱ぐと情けないんだよ、ブリーフ焼けで」

男の言葉を素直に想像して私は噴き出した。

「笑わないでよ……」

男が拗ねたように私を見下ろす。

「お帰り」

多分、私はこの男に初めて“お帰り”と言う言葉を発しただろう。気付いてないだろうけれど。

帰国したその足でここに帰って来てくれた事が嬉しかった。

何だかんだ言っても、会えない時間が長くて、不安で……寂しかった。

やっぱり夢だったのではないかと何度も考えた。

そんな事、口が裂けたとも言わないけれど。



久々に男に抱きしめられて心が満たされていくのを感じた。

ああ……こんなに惚れちゃったんだなあ。

今更ながらそう思った。

お風呂に入った後、久しぶりに一緒に食事をしてビールを飲んで同じベッドに潜り込む。

「彩さんの体温を感じさせて」

やっぱそれって……させろって事よね？  
毎回毎回よく考えてくるなあ……。  
こついう事にだけ頭を使っているのかしら？

「彩さん、俺の事だけ考えて……？」

男の唇が優しく私に触れる。

この1ヶ月あんたの事ばかり考えてたわよ。  
あんたの事しか考えてなかったわよ。

口に出さずに心の中で呟く。

悔しいくらいあんたに惚れちゃってる。  
これだからかわれただけなんて事になったら、間違いなく男性不審に陥るわ。

私達は1度身体を重ねた後、会えなかった1ヶ月間の話をした。

「そういえば……考えてくれた？」

「何を？」

わざと気付かないフリを試してみる。

「引越しの話」

分かっているけれど……。

悩み続けた1ヶ月。

いつまでも逃げてちゃ駄目……。

私は自分にそう言い聞かせて覚悟を決めた。

「……まだ、嫌」

意外そうな表情で男は腕の中の私に視線を移す。

「1年経っても私を想ってくれてたら……その時は一緒に住む」

私の言葉に男は破顔一笑した。

「なんだ……そんな事か。じゃ、来年の今日は引越決定だね」

男は自信満々だ。

どうしてそんなに自信があるのよ？

気持ちなんていつ離れていくか分からないじゃない。

「俺は彩さんしか見えないから。彩さんが俺の気持ちを試したいなら試せばいい。それで彩さんの不安がなくなるならいくらでも試さ

れるよ」

男の声は優しく、私は小さく頷いた。

「俺には彩さんしかない。傍に居るのは彩さんじゃなきゃ駄目なんだ。誰にも代われない、彩さんが待てって言うなら5年だって10年だって待つよ」

10年も待たせたら私40越えちゃうし……。

目立つた長所も特技も自慢もない私は生もの同然。

10年経ったら……綺麗で生き生きした人達とは違って、平々凡々な私の賞味期限は確実に切れている。

「2年半も彩さんだけを見てきたんだから今更焦ったりしないよ」

「に……2年半……?!」

「そつだよ、言わなかったっけ？」

聞いてない。

柴田さんだって1〜2年と言っていた気がする。

「2年半の間ずっと彩さんだけを見てたよ」

そのわりに週刊誌を賑わせていた気がするんだけど……気のせいかしら？

「彩さんだけをずっと愛してる」

男が私を抱きしめる。

「私も……海が好きよ」

私は海の腕の中で小さく告げた。  
静かな部屋の中にはその声を遮るものなどなくて。  
だから、しっかり聞き取れたらしい。

海は身体を硬直させた。

「い……今、海って言った？ す……好きって言った?!」

薄明かりの中でも分かるほどに海は真っ赤な顔をしていた。  
何故かオイル不足のロボットのように動きがぎこちない。

「言った」

真っ赤な顔で動揺する海を見ながら私は暫く笑った。

特別な日だから少しだけ素直になろうと思った。

今日、6月22日は海の23回目の誕生日なのだ。

澄香がそう言っていた。

「すっごく嬉しいんだけど……寝不足にしている?」

「嫌」

「せっかく海って呼んでくれたのに」

「どついう理屈よ?」

「好きって言うてくれたのに?」

うつ……。

「現実だって感じさせて?」

誕生日おめでとう……大好きよ。

海に抱かれながら私は心の中で呟いた。

絶対に口には出さないけれど。

素直になれない今の私にはこれが精一杯。

これからの１年は、私が海を知っていく時間。

大久保さんにも訊いてみよう、知らない海を。

勿論、柴田さんにも。

来年の今頃はきっと……もっと海を好きになってる。  
そんな気がする。

そして私達は何度も愛し合い、寝不足な朝を迎える。  
同じように訪れる朝……なのに気持ちを伝えた今朝は、世界が少しだけ違って見えた。

F  
i  
n

## 10 - 10 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

「彩編」でした。

天邪鬼な彩が海に「好き」と告げるまでのお話でした。

次は「海編」です。

海が彩を初めて見掛けた日から彩に「好き」と言わせるまでのお話。

そして最後は……。

再び「彩編」で2人のその後をちょこつと書きたいな、と。

更新時期はあらずじでお知らせしたいなと思っております。  
よろしかったら読んでやって下さい。

番外編：伊集院視点（前書き）

伊集院の視点からちょっとだけ書いてみました。  
会社での彩の様子が少しでも見える気がします。



## 番外編：伊集院視点

俺の名は伊集院いじゅういん 昂すばる。

大手と言われるような会社でつまらないサラリーマンをやっている。

正直、あまり乗り気ではなかった会社だ。  
だが、俺が配属された部には彼女がいた。

五十嵐いがらし 彩あや。

俺と同じ年だった。

彼女は短大卒、俺は専門卒。

彼女と最初に話したのは配属された部署での自己紹介だった。

「伊集院君って昂って名前なのね、11月生まれだったりする？」

「よく分かったね、11月28日だよ」

「昂って秋から冬の星だもの。だからそんな気がしたの、当たるとは思わなかったけど」

彼女は眼鏡を両手で抑えながら微笑んだ。

あの瞬間から彼女が俺の中に巣くったんだ。

特別美人というわけではない彼女が何故か気になる。

他の部署奴等も何故か彼女の周りに集まる。

性別も部署も上司も部下も関係なく好かれていて眩しい存在だ。

彼女は素直で明るくて裏表もない。

席は俺の正面。

社内の同期、それ以上の人間は皆彼女を苗字ではなく “彩ちゃん” と名前で呼ぶ。

「伊集院、必要以上に彩ちゃんに近付くな。お前が傍に寄ると彩ちゃん<sup>けが</sup>が汚れる」

部長も彼女がお気に入りだ。

俺の顔の前にキングファイルを立てて彼女との間に壁を作った。

俺は確かに女癖は悪かったかもしれない。

それを自慢げに話してたし、部長が俺に警戒するのも分かる。でも、彼女に対する気持ちは真面目だ。

彼女は仕事も出来るし、英語も堪能。

人の顔を覚えるのも得意らしく、1回会えば彼女の頭に顔と名前がインプットされる。

好みや考え方なども把握するのが早いので、頻繁にプレゼンに駆り出されている。

落としてどこを知っているから成功率が高い。

彼女のプレゼンは “五十嵐マジック” と言われていて社内でも評価は高い。

社長も知ってるくらい有名なのだ。

“五十嵐マジック” はプレゼンだけじゃないんだけど。

言っておくが、彼女は決して営業じゃない。

なのに、営業の仕事をしているのだ。

彼女は他の奴の成績になるというのにプレゼンを担当して、成功すれば素直に喜んでしまえるお人好し。

俺と彼女と同じ部署の矢島と他の部署の榊・遠山は入社当時の飲み仲間で、月・水・金に飲むのが暗黙の了解になっていた。

行く店も毎回同じ。

店内の装飾や店内の雰囲気がいいのだ。

若いイケメン店長のセンスと人柄もいい。

俺達は開店当時から既に3年通う常連で、店長がわざわざ席を取っておいでくれる。

元モデルでイケメンの店長が居るあの店はいつも混雑している。顔馴染みの従業員も多く、時々おまけや試食品を貰う事もある。

これも “五十嵐マジック” なのだろうか……？

「海外研修に行ってみる気はないか？」

部長にそう言われてから2週間が過ぎた。

定時を1時間ほど過ぎ、彼女の机の上が片付いてきた頃に榊がやって来た。

「彩ちゃん、そろそろ行かない？ 上司抜きで」  
「そうね」

彼女は嬉しそうに笑った。

エロ課長が居ると彼女はいつも触られている。

彼女がトイレに立った瞬間に誰かが課長の隣に行ってお酌をする事で彼女を逃がす。

情けないけどそれが俺達の精一杯。

暗黙のルールだった。

俺達は会社を出て新橋の店へと向かう。

「あ、彩ちゃん今日のプレゼンありがとうね。俺、英語苦手であ  
……」

矢島が苦笑した。

英語が苦手……？

お前確か帰国子女で英語ペラペラじゃなかったか？

「大丈夫、クレインさんとは面識もあったし」

「やっぱ彩ちゃんだよなあ。俺と付き合おう」

おいおい……。

「今日のは決まりでしょ？ 彩ちゃん、付き合ったら俺とにしよう  
よ」

まったく……。

「1週間以内に契約確定だね。彩ちゃん駄目だよ、付き合ったら俺  
だよね！」

どいつもこいつも……。

「彩様様だね。じゃ、俺も立候補」

……とか思いつつしつかり俺も便乗。

「じゃ、感謝の証に奢ってもらおうかな？」

彼女はそう言って笑った。

いつも俺達の本当か嘘か分からない告白はスルーされる。  
これが俺達の日常会話。

会話が途切れた時、彼女が溜め息を吐いた。

「彩ちゃん……元気ないね？」

「そんな事ないわよ、パソコンと睨めっこし過ぎて目が疲れちゃっただけ」

嘘だ。

10年間見てる俺の眼は誤魔化されない。

「こんばんわ」

顔馴染みの店員に挨拶して、いつも座る席に向かい、いつものように適当に注文をする。

「そういえば彩ちゃん、海外研修の話どうした？」

昼間、部長に明日が最終締め切りだと言われた。

「ああ……まだ保留。今忙しい時期だし……っってもう締め切りよね、

ちゃんと返事しなきゃね」

「彩ちゃんが居なくなったら俺ら仕事できないよ。寂し過ぎて」

榊が情けない顔で呟く。

強ち嘘じゃないと思う。

「大袈裟よ」

たかが2週間、されど2週間。

彩ちゃんが居ない職場での2週間は2ヶ月にも2年にも感じるだろう。

「伊集院君だつて行くんでしょ？」

彼女が俺に話を振ってきた。

「彩ちゃんが行かないなら考えるよ」

「駄目じゃん」

妙な視線を感じたのは気のせいだろうか？

誰も何も言わないので俺もその後、気にする事はなかった。

「次、カラオケ行くか？」

矢島が嬉しそうに振り返る。

「私は帰るわ」

彼女は必ず9時か遅くても10時には帰路につく。

「じゃ、また明日」

俺達は彼女と店の前で別れカラオケに向かう。  
途中振り返ると彼女が長身の男と話していた。

知り合いか……？

「伊集院！」

遠山が俺を呼んだ。

「悪い悪い、今行く」

気になりながらも俺は同僚の後を追った。

翌朝、彼女は部長が来るなり研修参加を申し出た。

それを見て俺も申し込んだが……彼女の様子がおかしいのが気になる。

昨日、やっぱり何かあったんだろうか？

研修は予想以上にハードだった。

会社から開放されると思ったのが間違いだった。

言葉の壁、スケジュールの細かさ、食生活の違い。

それだけでも充分に疲れるのに、毎日部長からメールは来るし報告書も書かなければならなかった。

半分が終わった頃にはうんざりしていた。

だから、彼女を飲みに誘ってみた。

彼女も相当疲れているだろうと思ったのだ。

案の定凹んでいた。

「彼だって寂しいんじゃない？」

酒を飲みながらそんな事を訊いてみた。

「別に……そんな事、ない……って言うかいらないしっ」

彼女は何故か動揺しながら否定した。

「喧嘩でもしたの？」

何だかムキになってる気がして彼女の顔を覗き込んだ。

「だ……だからいないってば……！」

「そんな顔で “いない” なんて言っても全員が嘘だって言うよ」

泣きそうな顔していないなんて……さ。

「でも……もし、本当にいないなら俺と付き合わない？」

彼女は首を傾げた。

こういう時、自分の日頃の行いを後悔せずにいられない。  
本気にされてない気がする。

「だから、俺と付き合わない？」



「付き合わせない」

背後から男の声がした。

間違いなく俺と彼女の会話に口を挟んだ。  
声の方向に顔を向けて俺は固まった。

「俺のだから口説かないでくれる？」

テレビでよく見る顔がそこにあつた。

「な……何してんのよ？」

「CM撮影」

彼女の知り合いらしい。

「柴田さんは？」

「いるよ、仕事だつて言つたでしょ？」

男の顔はテレビ同様無表情だった。

「望月……海……？」

人気俳優だ。

「伊集院君……あの、これは誤解……！」

「何が誤解？ 黙つてこんなとに来て俺が心配しなかつたとしても  
思つてるの？ 何で何も言わなかつたの？ ちゃんと答えてよね、  
彩さん」

望月 海が彼女の彼氏……？！

手を掴まれ強引に連れて行かれる彼女の背中を見つめながら俺は暫く呆然としていた。

あんな奴が相手なら俺が敵う訳がない。

恐るべし “五十嵐マジック” …… 芸能人にまで有効だったとは……。

彼女が他の男に靡かないわけだ。

その晩の酒は最高に…… 不味かった。

いつの間にか彼女の相談相手というポジションになってしまったようだ。

それでも彼女の笑顔が見れるならと、俺は彼女の相談に乗ってみたいりする。

「彼とは会ってるの？」

「ん？ 帰国後は1回だけ」

「それでも仲直りが出来てよかったじゃん」

俺的には面白くないけど。

「でもねえ…… 聞いてくれる？」

彼女は男からのプレゼントの話をした。

「確かに期待なんて全くしてなかったんだけど……予想できないって言うか予想しない物だと思わない？　ありえないでしょ？」

俺は大爆笑。

理解不能な男だ。

「面白過ぎ……普通そんなもんあげないし、そんなもんにラッピングするか？」

ありえない。

「でしょう？　おつまみには不自由しないけど……素直に喜べないのよね」

「そりゃそうだ。でも意外だね、そんな天然馬鹿だとは思わなかった」

笑いが止まらない。

それも彼女への初めてのプレゼントだって言っただから話にならない。

「特製春巻きと麻婆豆腐お待たせしました」

店長が自ら運んで来るのは珍しい。

年齢は……微妙だけど俺らよりも若干年上と言ったところだろうか。

相変わらず綺麗な顔をしている。

「あつちで2人を呼んでる奴が居るんだけど」

呼んでる奴……？

俺は彼女と顔を見合わせた。

「この席はそのままにしておくんで行つてやつてくれませんか？」

鞆だけ持つて俺達は店長の後について行つた。

「彩さん、何で2人で飲んでんのさ？」

機嫌の悪い “ お菓子野郎 ” が居た。

「嫉妬か坊や？」

その存在がムカつく。

俺は挑発するように彼女の肩を抱いた。

「彩さんに触らないでよ」

「羨ましいだろ？」

お前には出来ないだろう？

芸能人は不便だな。

俺はそう思いながら勝ち誇つたように微笑む。

「何で2人つきりなのさ？」

「デートだから」

「伊集院君」

さすがに彼女に睨まれて肩に回した手を叩かれた。

「まったく……皆遅れて来るだけよ」

溜め息を吐きながら彼女が答える。

「結構余裕ないんだな、お菓子野郎」

彼女に相当惚れ込んでるらしい。

俺はお菓子の話を思い出し再び笑い出した。

「彩さん、この人イカレてるの？」

イカレてるのは貴様だ。

「普通ありえないでしょ、お菓子の詰め合わせなんて」

「何で知ってんのさ？」

奴に睨まれたが、そんな事くらいでビビるわけないだろ。

「彩ちゃんから聞いたからに決まってるだろ？」

相当ガキだな。

テレビとのギャップに更に笑いが込み上げる。

「彩ちゃん、席戻ろう。春巻き冷えちゃうよ」

「あ、うん」

俺は彼女の手を掴んで席に戻った。

その直後に彼女の携帯が鳴った。

彼女が携帯を見ながら嬉しそうに微笑む。

苦笑するしかない。

「彼から？」

「え？ あっ……いや……」

「凶星かよ……」。

「結構ショックだったりして」

「え？」

「そんな顔されると凹むよ」

「何で？」

「俺マジだから」

「信じてくれないだろうなあ……」。

再び携帯が鳴った。

今度は電話のようだ。

「もしもし？ ……は？」

彼女が顔を上げて俺の顔を見た。

「何なんだ？」

「代われって……」

「俺？ もしもし？」

『あんた何考えてんのさ？ 彩さんは俺のだって言っただじゃん』  
「は？」

「やっぱり貴様が……」。

『口説かないでって言ってるの』  
「ああ聞こえてたの？」

まあ、聞こえるように口説いてただけ。

『あんた男がいる女が好きなの？』

「そういう環境の方が燃えるよ。実際、会社にも君以上の強敵が居るからね」

『強敵？ 強敵って誰さ？』  
「さあ？」

不安になっとけ、馬鹿。

『彩さんだけは譲らないよ』

「でも、結局彼女次第でしょ？」

俺は余裕もないくせに余裕の笑みを浮かべて電話を切った。

「嫉妬されちゃったみたいだね」  
「嫉妬？」

彼女は首を傾げる。

俺は身体を乗り出し、彼女の傍で囁くように告げた。

「愛されてるんだね彩ちゃん」

彼女の顔が真っ赤になった。  
口説いてると勘違いしとけ。

「あの男、相当彩ちゃんに惚れてるよ。自信持ちなよ」

ああ……何でこんな事教えてやっちゃうんだろ……。

「伊集院、彩ちゃん口説いてるのか？ 抜け駆けはズルイぞ」

遅れて来た同僚達が店内に入って来て苦笑した。

「気を利かしてあと1時間位遅れてくれたら落とせたかもな」

俺は同僚に微笑んだ。

奥の席から殺気を感じるのは気のせいではないだろう。

何でこんな奴を選んだんだ？

……母性本能か？

それならば勝ち目はない。

何故なら甘えるのは俺の苦手分野だからだ。

でも、そう簡単に諦められるものではない。

なんと言っても長い時間彼女の目の前に居るのは俺。

まだまだチャンスはある筈だ。

見てろよ、望月海！！



F  
i  
n

番外編：伊集院視点（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

伊集院編です。

彩に本気だったんですね。

彩の前でカッコつけてるけど、海相手に対抗意識を燃やしているあたり伊集院も大人気ない……。

そしていつも挨拶のように口説いてるから本気で言っても本気にされない……ま、自業自得ですよ。

海編「大好きな彼女」として別に載せようと思います。

今月中にUPしたかったのですが私事都合で書き上がりませんでした……。

すみません。

11月1日から上記タイトルで投稿開始します。

ご迷惑をお掛けしてすみません。

番外編：澄香＜前編＞（前書き）

彩の親友の「澄香編」です。

色々な彩を知ってる筈です。

少しくらい新発見・・・あるかな・・・？

番外編：澄香＜前編＞

私と彩は高校からの付き合い。

お互いに遠慮しないで何でも話せる親友だ。

「彩、暇してる？」

「暇」

「じゃ毎度おなじみ池袋ね。待ち合わせは……サンシャイン通りのゲーセンの馬の前」

「また変な場所指定する……」

「じゃあビックカメラの1階」

「はい？」

「パルコの本屋」

「澄香あ……？」

「池袋東武の“アクハウス”」

「何で分かりにくくするかな。待ち合わせって行きやすくて見つけやすい場所指定するものでしょ？」

彩は池袋東武の同じ出口から出て来れた事がない。

だから入るのを嫌ってるのを私は知っている。

「だから馬の前」

分かりやすいじゃない。

何か文句ある？

「……分かったわよ」

私達が学生だった頃から遊ぶのは必ず池袋。  
背伸びせずに遊べる安心感からだったんだと思う。

彩は渋谷や新宿で遊ぶのを嫌ってるし、私も池袋の方が安心するし。

そういう意味でも彩とは気が合うのかもしれない。

「彩あ！」

私が手を振ると彩は嫌そうな顔しながら近付いてきた。

「あんたって本当恥ずかしい奴ね。そんな大声で呼ばなくても気付いてるつてのに」

「取り敢えずバーーキング行こうか」

私は彩の言葉を聞き流して歩き出した。

「バーガー　ングって昔サンシャイン通りにあったわよね？」

「1回日本から撤退したんだよね、確か」

彩の交友関係はそんなに広くない。

彩の付き合い方は“狭く深く”　なんだと思う。

私は結構“広く浅く”　なんだけど、彩だけは例外。

不思議なんだけど時々無性に会いたくなるのよね。

ワッパーに噛み付きながら私は愚痴り出す。

いつも彩は聞いてくれる。

聞き流してるってのが正しいかもしれないけど、私と彩は誰かに聞いてもらえるだけでスツキリするのでそれでも充分なのだ。

お互いにそれが分かっているから彩は今現在、私が持っていた雑誌を捲りながら簡単に相槌を打っている。

そんな彩の手がピタツと止まる。

その視線は最近人気のある俳優のページで止まっていた。

「あ、望月 海。彩好きなの？」

何となく訊いただけなんだけど、彩は想像以上に動揺した。俳優の好き嫌いでここまで動揺する人っていないと思う。

「え……演技は上手いわよね」  
「22歳かあ……若いよなあ。クールでカッコいいよね、私凄く好き」

私が呟くと彩の顔が暗くなった。

「ねえ、何かあった？」

「べ……別に、何も……あ、あったと言えば海外研修に参加しないかって言われたかな」

海外研修？

「あんた事務じゃなかったっけ？」

「取り敢えずそういう職種のはずだけど？」

「事務ごときが海外研修なんて必要ないでしょうが？」

慰安旅行とかじゃないんでしょう？  
変な会社……。

「だから返事に悩んでるのよね。せつかくのチャンスって気もするし、でも事務員だしって気持ちもあって……ちよつと複雑」

仕事の話聞くのは初めてな気がする。

でも……悩んでるのはそんな事じゃない気がした。

勿論勘でしかないんだけど。

雑誌を見ている時のあんな切なそうな顔、久しぶりに見た。

あの顔は……男が絡んだときに見せる顔……。

「そついえば彩って彼氏いるの？」

「あんた喧嘩売ってる？」

彩が恐い目で睨んできた。

「いや、男が絡んで海外研修悩んでんのかなって思っただけ」

「んな訳ないでしょ？ 男ごときで自分の行動範囲を狭めたりしないわよ」

確かに。

あんたってそついう奴よね。

だから前の男と別れたんだしね。

「男なんていらない。男に振り回されるのはうんざり」

彩はそつ言いながら凄く悲しそうな顔をしていた。

そして数日後、私は彩から “海外研修に行つて来る” という

メールを受け取った。

海外研修から帰って来た彩が週末に土産を持って私の部屋にやって来た。

気のせいかもしれないけど、元気がない気がした。

「海外研修どうだった？」

「疲れた」

一言で終わらせるなよ……。

「そうじゃなくて、もっと感想ないわけ？」

「感想ねえ……」

彩はダイニングテーブルに頬杖をついて小さな溜め息を吐いた。

「いい男との出会いとか？」

「ないない」

「一夜だけの……」

「澄香。私がそういうの嫌いって分かってて言ってる？」

今日は冗談を控えた方がいいらしい。

「じゃあ、何でそんなに元気ないわけ？」

「時差ぼけ」

「うそつき」



「……自分でもどうしていいか分からないのよ、もう少しだけ待って。まだ、話せる状況でもないし……」

こんなに悩んでる彩を見るのは初めてだ。

勉強でも仕事でも男でもこんなに悩んだ事はなかったと思う。

そしてその溜め息の原因を知るのは約2週間後の事だった。

設計事務所に勤める私は土曜出勤も当たり前。

入社時に聞いた土日祝日休みつてのはどうやら勘違いだったらしい。

それでも月に1回くらいは何とか連休を取る努力だけはしている。

そして念願の2連休。

まあ、彼氏のいない私が2連休取ったところで予定なんかないんだけど。

よし、彩と遊びに出掛けて二日酔い覚悟で飲むか。

最近、彩の様子がおかしいのが気になってたし。

彩が動き出すのはいつも昼頃から。

私は昼になるのを待つて携帯に電話を掛けた。

呼び出し音が流れて暫くすると留守電に切り替わった。

……携帯に出ないなんて珍しい。

再び携帯を鳴らす。

ベランダにでも出てるのかな？

天気いいし、もしかしたら布団でも干してるのかも。

そう思いながら携帯を耳に当てていと呼び出し音が途切れた。

「もしもし、彩？」

『あ、ごめんね。彩さん今風呂に入ってて出れないんだ。2回も掛けてきたんだから急用だね？ 用件だけ聞いて伝えとくけど……？』

……？

「え？ あなた誰？ コレ彩の携帯よね？ 男いるなんて聞いてないんだけど？」

私は間違いなく彩の番号に掛けた。

この男……誰？

彩からここ最近男の話なんか聞いた事ないんだけど？  
この間男なんか要らないなんて言っただけ？

「あなた、何君？ 彩とはいつから付き合ってるの？」

もしかして彩が悩んだのはこの男の事？

『俺、海って言います。彩さんとは最近知り合っただけなんだから……？』

最近知り合ったばかり？  
じゃあ違うのかな……。

「ねえ、海君。そこどこ？ ラブホ？」

『彩さんの部屋だけど？』

彩の部屋？

人をあげたがらない彩が海君を部屋に入れてる……。  
それって何気に凄い事なんだけど？

「へえ……珍しい。彩ってそう簡単に男を部屋に入れないんだだけだなあ……彩から告白って感じじゃないわね。海君から告ったの？」

ちょっと面白いじゃない。

私は好奇心で海君に質問を投げつける。

『うん、そう。俺の方が惚れて猛アタックしてる』

「進行形？」

部屋にあがってて進行形って意味が分からないんだけど？

『うん。信じてくれないんだよね彩さん』

なるほどね。

「あの子カタイからねえ」

『ずっと片想いしてて、偶然話す機会があったから勢いで家まで押しかけて襲っちゃったんだ』

私は海君の言葉に嘖き出した。

「襲っちゃったんだ？」

襲われちゃったんだ彩？

『うん。好きな人が目の前に居たら抑えなんか利かないでしょ？』

やっぱりこの子が原因か……。

「海君は年下っぽいね？」

1、2歳って感じじゃないなあ。  
もっと下っぽい。

『そうだね、下だよ。でも関係ないでしょ？』

「海君は気にしてなくても多分彩は気にしてると思う。あの子そういう子だから」

20代前半って感じかな？

喋り方も凄く子供っぽいし。

さすがに10代じゃないだろう。

犯罪だし。

そりゃ悩むわな……。

「でも……安心した。海君は本気なんですよ？」

悩むって事はそれなりに好きだから悩むんだよね。

『勿論本気だよ。信じてもらえなくても……さ』

この子は彩に本気なんだ……。  
幸せ者だなあ彩って。

「海君、今度会おうよ。私海君に会ってみたい！」

彩を悩ませた年下君に会ってみたいと素直に思った。  
彩は歳の離れた恋人は嫌だと言っていた記憶があるだけに、興味が湧くのは当然の事。

『うん、いいよ。都合が合えばいくらでも』

「本当？ やった」

『オネエサンも彩さんの話たくさん聞かせてね』

「それが目的かあ」

すんなりOKしたのはそのためか。

まあ、自分の事をあまり語りたがらない彩を思うとそれも当然のような気がする。

『勿論。彩さんの友達に会ってみたいってのもあるけどね』

おまけのように海君が付け足す。

大人の扱いにも慣れているらしい。

「私達は大親友よ。彩の恥ずかしい話も何でも訊きたい事教えてあげる」

さて、どこから話してやろうか……。

私はこれから会うわけでもないのにウキウキしていた。

『本当？ 約束だよ？』

声や話し方だけでイメージすると子犬みたいな子かな？

『ちょ……！』

彩の声が聞こえた。

『あ、彩さんが来たから代わるね。彩さん、井守さんだって  
勝手に電話に出ないでよ！何考えてんの？！』

ああ怒ってる怒ってる……。

私は電話の向こうの話し声を聞きながら笑った。

『1回目は出なかったんだけど、2回目か鳴ったから急用かなと思  
つて』

『だからって……！』

『早く出てあげなよ』

『彩さん、怒ってる？』

『怒ってる』

まるで姉弟の会話だわね。

恋人同士って雰囲気じゃない。

それがおかしかった。

『……もしもし？』

「久しぶり〜あんた面白いのと付き合ってたのね」

まあ約2週間ぶりなんだけど。

『何話してたのよ?』

不機嫌そうに彩が口を開いた。

「海君って言うんだね、年下でしょ?」  
『そうよ』

溜め息混じりに彩が答える。

「えらい猛烈アタックだったんだって? ずっと片想いしてて、偶然話す機会があったから勢いで家まで押しかけて襲っちゃいました、って言ってたよ?」

彩の怒る顔が目につく。

『彩さん怒らないでよお……』

情けない男の声。

やっぱり睨まれたんだと思うと笑いが込み上げる。

「あははっ、何か可愛い男じゃない。今度会わせなさいよ、彼は都合が合えばいいって言ってたよ?」

『はあ?! ちょっとあんた勝手に会う約束したの?!』

それはどっちに向けた言葉なんだろう?

『だって彩さんの友達に会ってみたいから……駄目?』

答えたのは海君のほうだった。

『駄目っていうか……自分の立場分かってんの?!』

『彩さんの友達なら安心でしょ？ それとも信用できないような友達?』

自分の立場？

彩の友達なら安心って何？

「何？ あんたの彼氏ってそんなにヤバイ人なの？」

やくざさんとか？

『ある種ヤバイ人種なのは否定しないわ……で？ 用事って何だったの?』

ヤバイ人種って何よ？

納得いかないまま彩は話を打ち切った。

「今晚暇かなって思ってた電話したのよ」

本当は元気ない彩を励まそうと思ったんだけど……当然、予定変更。

海君の事じっくり聞かせてもらわなきゃね。

『今晚？ 何で?』

「私が暇だったから」

彩の溜め息が聞こえた。

『今日帰るんでしょ?』



『何で？ 帰らないよ？』

『準備は？』

『柴田さんがやってくれるから』

おいおい、何の話をしてるのかな？

私が電話してるって分かってるのか？

『あんたって本当にお子様ね。自分の用意くらい自分でしなさいよ』  
『柴田さんがセンスないって言って服とか選ばせてくれないんだから仕方ないでしょ？ 彼女来るの？』

チャンス！

「何？ 行ってもいいの？」

海君は迷惑そうではなかったし

『澄香……今日は……』

「酒買つて行くから！ 時間は未定、早いかもしれないし遅いかもしれない……って事でこれ以上エッチはしないでね！」

都合の悪い事は聞こえません

『だから今日は……！』

「じゃ、後でね！」

私は一方的に電話を切った。

ふふふっ、楽しみが出来たぞ  
さて、何着て行こうかな。

久しぶりに楽しい週末だわ

番外編：澄香＜前編＞（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

「バーガー ング」って本当に1回、日本から撤退したんです。  
2度めの日本上陸。

結構ファン多いんですよ

武村もその1人です。

本日は澄香が彩の悩みの種に気付く所まででした  
付き合いが長いと語らずとも悟られる事が多くなりますよね。  
武村の周りにも悟り野郎が多いです。

明日は＜後編＞載せちゃいます！！  
お楽しみに

番外編：澄香＜後編＞（前書き）

「澄香＞後編＜」です。

本編になかった部分を書いちゃいました。

番外編：澄香く後編＞

「やつほーっ」

玄関を開けた彩が呆れたように私を見ていた。

「あんた元気ね？」

そりゃそうでしょ。

「元気よ？ 可愛い彼氏に会えるんだもん、楽しみで楽しみで。手土産も大量に持ってきたから」

私は両手に抱えたレジ袋を見せて部屋にあがり込んだ。

年下君 年下君 どんなオトコノコかなあ？

リビングに入った私はそこに居る人物を見て、持っていたレジ袋を床に落とした。

「ええええええ？！」

も……望月 海？！

「彩！ こ……これっ望月海？！どういう事？！」

何でここに居るの？！  
本物？！

「見ての通りよ、言ったでしょ？ ある種ヤバイ人種だつて」

ヤバイなんてもんじゃないじゃない！

「挨拶しなさい、あんた会いたかつたんでしょ？」

彩の言葉に目の前の有名人がテレビでは見せないような笑顔を私に向けた。

は……鼻血出そう……。

ヤバイ……興奮度MAXだわ。

「初めまして、望月海です」

しゃ……喋った！

動いた！

会釈したっ！！

私は望月 海から視線を逸らす事も出来ずに彩の背中を叩いた。

「い……痛いっ……！」

彩の背中を叩いていた私の手が数発目で空振りした。

「彩さんを苛めないでくれませんか？」

彩は望月 海の腕の中にいた。

「あ……ごっごめん！ ちょっとつていうか、かなり動揺しちゃつて……！」

羨ましいぞ彩！

「ちょっと……離して。動けないでしょ？」

彩は鬱陶しそくに望月 海を見上げる。

贅沢な……。

私だったら一生その腕の中にいたっていい。

望月 海は渋々と彩から手を離し床に座った。

テレビでの印象とは随分違う。

もしかしてそっくりさん？

「澄香、あんたも挨拶位しなさいよ」

私は望月 海の目の前に腰を下ろした。

座っても見上げてしまう。

やっぱり大きいなあ……。

「い……井守澄香です。彩とは高校からの付き合いでもう15年友達やってます……」

何故か敬語。

「高校から？ 15年も？」

望月海が少年のように目を輝かせる。

「高校生の彩さんってどんな感じだったの？」

「え？ 彩は……今と大差ないかもね……」

ぶつちやけ、私達はあの頃から成長してないと思う。

「じゃ、昔から人気者だったの？」

「そうかも。彩の周りにはいつもたくさん人が居たなあ……昔から結構誰とでも付き合っただけど、実際にしょっちゅう連絡を取り合うのは2、3人よ」

「彩さんモテた？」

「何度か告白はされてたみたいだけど……どうかな……？」

こっ酷くフってるのとかも見た事あるけど……それは言わない方がいいよね……。

私はチラチラと彩の顔色を窺いながら話していた。

余計な事言っちゃったら後が怖いからね……。

もともと酒に強くない私はかなりハイになっていた。

「澄香、あんたもそろそろ帰りなさい。また来ていいから」

彩が私の肩を叩く。



帰れだつて？

私が帰ったらまた海とイチャつくんでしょ？！

こんなイイ男捕まえちゃって……羨ましすぎるぞ、彩っ！

「海よ？ もちつきかい（望月 海）！なんれ（何で）海があんらり惚れらのろ（惚れたのよ）？！」

詳しく聞かせろつての！

「それ……私も疑問だし……」

何で疑問なのよ？

「彩さんだからだよ。つい何でも話しちゃうし、時々無性に会いたくなるし、見るだけで安心しちゃう……彩さんの代わりなんて誰も出来ない。澄香さんだってそう思うでしょ？」

望月 海は愛おしそうに彩を見ていた。

「海君はあ、彩りろっこんらろれ」（彩にぞっこんなのねえ）

「そっだよ、俺の基準は全て彩さんだから」

「ご馳走様」

私はフラフラと立ち上がった。

「ちょっと待ってなさいよ、タクシーで送ってくから」

彩はそう言つて寝室に上着を取りに行った。

「海君、彩を泣かへらいれろれ（泣かせないでよね）」

それだけは言っておきたかった。

「うん、約束する」

海君は真剣な目をしている。

その目を見た瞬間、酒が私の体内から消えた。

この子は彩に本気なんだ……。  
改めてそう思った。

「本気なら何でも出来る事協力してあげる。コレ私の携帯番号とメルアドレス」

私は鞆から合コン用のお手製名刺を取り出して海君に手渡した。

「ありがと澄香サン」

海君の笑顔に私は顔を赤らめた。

いや、抜けたと思ったアルコールが私の中に舞い戻ってきたような感覚だ。

「こりらこられーらくらりかんありがと（こちらこそ贅沢な時間ありがと） まっられ（またね）」

私は千鳥足で玄関に向かいながら微笑んだ。

「澄香っ送っていくつてば！」

「らいりょうぶらゝあんらら海君とイチヤイチャしれらひゃい（大丈夫だゝあんたは海君とイチヤイチャしてなさい）」

「ちょっと澄香送ってくるから！」

彩は海君にそう呼び掛けてから私の腕を掴んで部屋を出た。

「あんた幸せ者ね、心配して損した」

海君の姿が見えなくなつて幾分落ち着いた私は、マンションの入口の階段に腰を下ろして彩を見上げた。

「な……何言つてんのよ？」

「海君本気じゃあん」

彩は背を向けたまま黙り込んだ。

「もしかして疑つてる？」

「現実つて受け止められないのよね……」

素直な言葉だつたと思う。

海君を信じないんじゃないかと、この状況が夢を見ているようで現実がないというのは私も同じだ。

「確かにね、でも信じてやらなきゃ海君も可哀相じゃない？」

「そ……そうなんだけど」

「じゃあ、彩はどうしたら海君を信じてあげられるわけ？」

羨ましいくらい愛おしそうにあんたの事見てるのに……。

「……分かんない」

「彩がずつとおかしかつたのは海君のせいでしょう？ 悩むほど好きなのに何で好きな人の事信じてあげないわけ？」

何で信じてあげられないの？

「俳優なんて……好きになるもんじゃないわね……」

彩は哀しそうに微笑んだ。

「テレビであんなに齒の浮くような台詞吐いてるのよ？　そう簡単に信じられるわけじゃないじゃない……」

「彩は……不安なんだ？」

堰を切ったようにあやの目から涙が溢れた。

「信じたいわよ……認めたくないけど……あの子が好きなの、だから信じたいの……でも駄目なの、あんな綺麗な人達に囲まれてる海が何で私なんかを好きになったのかも分からない」

自信がなさ過ぎるよ彩は。

「私も男だったら彩に惚れてるわよ。彩はさあ……いつも中身を見てくれるじゃない、上っ面じゃなくてさ。ちょーっと厳しいかもって思う事もあるけどお、正直に話してくれる。だから私は何でも彩に話せるしい。他人事なのに真剣に悩んでくれたり、自分が正しいと思えば周囲を納得させるように頑張るしい、絶対に損得勘定じや動かないでしょお？　私はそういう彩がすごく好きよ。きつと海君もそうなんだろうなあ。あの眼はぜったい芝居なんかじゃないわよお」

目の前の彩が凄く可愛らしく感じる。

彩をこんなふうにしたのは海君なんだよね。

男の事で泣くなんて。

「もし、万が一海君があんたを泣かしたら私がどんな手を使ってでも報復してあげる」

彩は涙を拭いながら私に微笑んだ。

「そうね……澄香のビンタでも食らわせてもらおうかな」  
「任せなさいっ」

そうそう、彩は笑ってなきや。  
すっかり酔いが冷めたところにタクシーがやって来た。

「ああ、私も彼氏欲しくなっちゃったな。また合コンでも行くかな」

「ろくなのいないって言ってなかった……？」

その通り……。

「何か、彩見てると彼氏欲しいなって思っただけよ。私も早く春が来ないかなあ」

1人の男の事で泣いて笑って悩んで怒って……。  
そんな男に私も早く会いたいな……。

……なんて、珍しくそんな事を考えた夜だった。

海君が海外ロケに出たと聞いて、私は彩を池袋のハンス前に呼び出した。

「彩」

珍しく私より早く来ていた彩の後頭部を雑誌で叩いた。

「海君載ってるから買って来た」

駅の本屋で買った雑誌にはどう考えても彩の事としか思えない内容の記事だったのだ。

私達は近くの喫茶店に入って雑誌を捲った。

さすがに気付いたらしく、彩が顔を赤らめる。

「愛されてるねえ、彩。普通に素で話してんじゃん……って言うか思いつきり公の場で告ってる」

羨ましいぞ、と私は彩の額にデコピンした。

「気のせいよ」

俯く彩の顔は耳まで真っ赤だった。

「でも……これ読んで納得できる人間いないだろうね、イメージ違い過ぎ」

「いても困るわよ」

彩の言葉に私は微笑んだ。

最近、私の前では妙に素直だ。

「まだ帰って来ないんでしょう？」

「3週間って言ってたけど……延びそうだった」

頻繁に連絡は取り合ってるらしい。

「そっか……帰って来たらまた遊びに行ってもいい？」

「駄目って言っても来るでしょ？」

「まあね」

当然でしょ。

眼福      眼福

「そういえば、6月22日って海君の誕生日なんだってよ？」

「へえ……」

あやの反応は薄かった。

もともとそう言う事をあまり気にしない子だ。

「知らなかった？」

「うん、興味ないし」

「好きな男の誕生日くらい覚えてあげようよ……」

彩の記念日嫌いは昔付き合った男のせいだ。

「おめでととかは彩の性格的に無理そうだし……さり気なく何かしてあげるとか言ったらあげるとか？」

「どうよ？」

あんたにも出来そうでしょ？

いいアイディアじゃない？

「海君の事名前で呼んだ事ないんでしょ？」

「それが何か？」

「呼んじゃえば？」

彩は心底嫌そうな顔をした。

好きな男の名前を呼ぶのを嫌がるって何考えてるんだか……。たまに彩って理解できないのよね。

「うん……でも、何か考えてみようかな」

雑誌の写真を眺めながら小さく呟いた彩はやっぱり可愛かった。素直じゃないけどね。

そして7月に入ってから会った2人はやっぱり仲睦まじくて……。

「海君、ちゃんと約束守ってるみたいだね」

キッチンに立つ彩を眺めながら私は海君に尋ねた。

「約束って……泣かすなってやつ？」

「うん、そう」

「守ってるよ。ベッドの上以外では泣かせてないはず」



そついう事をしれつと言つあたりが俳優なのかもしれない。

「はいはい、ご馳走様」

まったく……ベッドの上で泣かすつてどれだけ盛つてんのよ？

正直、最近望月 海という人間の見方が変わってきた。

どう見てもこっちの方が素だ。

会つのは2度目だけど、緊張はない。

この2人を見てると緊張するだけ馬鹿らしく思えたのだ。

「海、ちょっとテーブル空けて」

キッチンから彩が声を掛けた。

……海？

「はいはい」

海君は大人しくテーブルの上に広げていた台本を片付け始める。

そんなに頻繁に会つてゐる訳じゃない筈だけど……。

誕生日に会つたという話は聞いている。

結局……彩は私にも素直じゃなかったって事か。

まあ、10年以上の付き合いで分かつてはいたけどね。

私は彩を見ながら微笑んだ。

「何笑つてゐるのよ？」

彩が私の顔を見て眉間に皺を寄せる。

私は立ち上がってキッチンに向かい、彩の耳元で小さく呟いた。

「海」　ねえ？　誕生日には何をあげたのかなあ？」

彩の顔がボツという効果音が聞こえそうな勢いで真っ赤になった。

「すっ……澄香っ！」

「なあに？」

私は声を出して笑った。

リビングでは海君が怪訝そうに私達を見ている。

ああ……恋がしたいなあ。

ちよっとだけ彼氏という存在が欲しくなった。

感覚が麻痺するくらいに2人にアツアツぶりを見せ付けられちゃったからかもしれない。

まあ、どっちかって言うと海君が彩から離れないんだけど。

この2人の馬鹿っぷりを見て憧れちゃうあたり私もあまあまな恋愛に飢えてるのかもしれない。

……らしくないけどね。

ああ……私にも早く春が来ないかなあ……。

f  
i  
n

番外編：澄香＜後編＞（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

澄香は結構いいアドバイザーなのかも。  
彼女にも早く春が来るといいのになあ

続編・・・何とか執筆開始しました。

そんなに長くはしない予定です。

掲載時期はあらずじでお知らせさせていただきます。  
お楽しみに

その後の2人：1 / 10（前書き）

再びやって来ました。

10日間連続更新。

皆様10日間お付き合い下さい

本日第1話

その後の2人：1 / 10

海と知り合って1年になる。

私達の関係は相変わらずだ。

翌日の仕事が遅い時や休みの時に私の部屋にやって来る。

私も相変わらず同僚達との飲み会には参加しているし、大きく変わった事は何もない。

海と付き合うからといって自分の行動範囲を狭める気もない。

海もそれについて文句を言う事はない。

私達の関係は簡単に言ってしまうえば……曖昧だ。

仕事柄というのもあるとは思うが、イベントの日に会った事はない。

まあ、海の誕生日には会ったけれど……プレゼントと用意しなかったし。

クリスマスや大晦日や元旦も会わなかった。

バレンタインもあげなかったので当然ホワイトデーもない。

私から海にプレゼントをした事もない。

海からは……お菓子を貰ったわね。

妙に記念日を作りたがる男よりも気楽でいいけれど。

昔付き合った男にそういう面倒な奴がいた。

告白記念日、初デート記念日、初キス記念日、初エッチ記念日…

…何でも記念日にしてしまう鬱陶しい奴が。

毎月何かしらの記念日があつて…さすがにブチ切れた。

笑っていられるのは最初の数ヶ月間だけだ。

その後は鬱陶しくなつて一気に冷めていく。

半年も付き合つとんざりしていた。

だからこそ海とのこの関係がラクだと思える。

本音を言つてしまえば……ちよつと物足りない気はするけれど。

まあ、こつこつという世界の人間と付き合うという事は多少の覚悟が必要という事で文句は言えない。

海が時々やって来るだけでも贅沢なのだから……。

週末の朝。

洗濯物と布団をベランダに干して大きく身体を伸ばした。

今日は何をしよう？

1人きりの週末。

1人暮らしを始めてから今まで嫌というほど適当に過ごしてきたけれど……。

海と出会ってから少し悩むようになった。

2人でいても出掛ける事は出来ないし、単身の方が自由に動き回れるから何気に週末は1人のほうがありがたい。

せっかくの休みなのだから出掛けたいし、日頃出来ない買い物もゆつくりしたい。

しかし、海が来るのなら家で待っておきたい。

正直、このような事で頭を悩ませる日が来るなどとは……考えるどころか想像すらした事がなかったが、このような悩みを抱えるのが嫌ではないと思う自分にびつくりである。

昔の私からは考えられない。

私は軽くシャワーを浴び、化粧を施して鞆を持った。

目的もなくブラブラするのも結構楽しいものだ。

取り敢えず池袋。

渋谷は好きではない。

すぐに声を掛けてくる輩がいるし、マナーはなっていないし、人が多過ぎる。

以前お気に入りのバッグを歩き煙草の奴に焦がされてからは行く気もない。

それに比べて池袋は落ち着く。

その時点でおばさん？

でも、幼い頃から通い慣れているからかもしれない……なんて言い訳を試してみたりして。

地理も分かっているし気楽なのだ。

玄関を出て鍵を掛けると携帯が鳴った。



掛けてきたのは親友の澄香である。

「もしもし？」

『今何してる？』

「……いきなりそれ？」

「先ず名乗りなさいよ。」

「出掛けようと思って玄関の鍵閉めたところ」

『じゃ、暇なんだね。12時に池<sup>いけ</sup>鼻<sup>びく</sup>前<sup>まへ</sup>。じゃあね』

澄香の電話はあつという間に切れた。

澄香の頭の中では 私が外に出る「海がない」暇らしい。

確かに間違つてはいない。

本当に用事があつたら困るけれど……そんな事は滅多にないし。

本音をいえば週末と一緒に過ごす相手ができて、ちょっと嬉しかったりして。

私は携帯をバッグに突っ込んで駅に向かった。

約束の時間。

約束の場所に向かうと澄香が大きく手を振っていた。

「彩あ！」

そんなに大きく手を振らなくても分かるのに……。

私は苦笑した。

「何もこんなトコで待ち合わせしなくてもいいんじゃない？」

待ち合わせ場所は他にもたくさんあるのに何故ココなのだろう？

「たまにはいいでしょ」

楽しそうに澄香は笑った。

澄香の指定してくる待ち合わせ場所は毎回違う。

彼女にとっては待ち合わせも楽しみの1つのようだ。

「で？ 今日は何の用があつてここに呼んだのかしら？」

「ちょっと行きたい場所があつただけど1人だと行き難いから」

行きたい場所？

「何？ どこに行きたいのよ？ 変なトコは嫌よ？」

「大丈夫、変なところには行かないから」

イマイチ信用できない親友は笑顔で答えて私の手を引っ張る。

私は黙って彼女に引かれるまま付いて行く。

そして着いた場所は何故か宝石店。

……とはいえ、比較的リーズナブルな全国チェーン店なのが。

「ここ？」

「あ、別にこの店じゃなくてもいいんだけどね」

意味が分からない。

しかし、今の言葉はこの店に淒く失礼だと思う。

「先月彼氏が出来てさ、誕生日に指輪買ってくれてるって言うんだけどサイズ分らないから測ってもらおうと思って」

それで私を付き合わせるのか？

「その彼氏と来た方がいいんじゃないの？」

目の前で測って、合う物を買って貰った方が効率的だと思う。

「何言ってるのよ。サイズだけ伝えて、彼氏のセンスで買ってもらうから嬉しいんじゃない」

そんなものなのか？

私には分からない。

「そういえば彩って指輪とかしないよね？」

「だって邪魔なもの」

指輪をしてると淒く指が気になるし、仕事に集中できないのよね。石が付いたのは特に回転するし落ち着かない。

ネックレスもそう。

留め具が前にくるのが気になって仕事に集中できない。

学生時代も勉強に集中できなくて苛々して、それ以降は全く身に着けなくなってしまった。

「ついでだからこの子のサイズも測ってもらっていいですか？」

澄香は店員さんに微笑んだ。

店員さんも同じように微笑んで私の指にリングゲージというものを通していく。

指のサイズってこんなので測るんだあ……へえ。

私は自分の指のサイズよりもそちらに興味を示していた。

「え？ 私ってそんなに指太いんだ？」

澄香の声に私は振り返った。

「どうしたの？」

「10号だって……バレーボールなんかやらなきゃもっと細かったのかなあ？」

さあ？

バレーボールと指のサイズって関係あるの？

私は首を傾げた。

「彩は？」

「は？」

「サイズ」

「……さあ？」

聞いてなかった……。

「お客様のサイズは9号ですね」

店員さんがニツコリと微笑む。

先日他の部署の寿退社した女の子が7号と言っていた気がする。

「私も太いのかしら……？」

自分の指を眺めながら無意識に呟いたらしい。

「そんな事ないですよ。9号から13号くらいの方が多いですから」

店員さんはまたも笑顔で答えてくれた。

「へえ……平均か」

あの子が細かったただけなのか、店員さんのお世辞か……深く考えるのはやめておこう。

澄香は何故かピンクリングを眺めている。

「彩、コレ可愛いと思わない？」

「あんた小指測ってもらってたの？」

「え？ ついでだから中指と薬指と小指測って貰ったけど？」

ついででそんなに測ってもらうあんたの図太さが好きだわ。

それも両手。

澄香は予定にあったのかなかったのかピンクリングとピアスを購入して満足げに店を出た。

「私がいた意味ってあるの？」

素朴な疑問。

「1人じゃ入り難いじゃない、ああいう場所って」

そうかしら？

「じゃ、お昼食べに行こっか」

澄香ならば1人でも充分に行けたと思う。

私は首を傾げながら彼女の後を追った。

「……で？ 何でこうなるのかしら？」

自分の部屋に帰って来た1時間後。

布団や洗濯物を片付けて一息ついている私の目の前に澄香が再び現れた。

「暇そうだったから？」

何故に疑問形？

彼女は酒やつまみを大量に抱えていた。

「だって海君いないんでしょ？ 暇じゃない。飲も」

澄香は私を押し退けるようにあがり込むとキッチンの冷蔵庫を開けて酒を詰め始めた。

ここ私の部屋なんだけど……。

私の周りは何んでもこうも勝手な人間ばかりなのだろう……？

「彼氏は？」

「忙しいみたい」

土曜日に仕事？

「サービス業？」

「うん」

休みが合わないなら付き合うのも大変ね。

「じゃ、酒飲む場所を提供する代わりにあんたの彼氏の話聞かせなさいよ」

「何でも答えちゃうわよ 名前も年も趣味も馴れ初めも性癖も」

「……性癖はいい、遠慮しとく」

「遠慮すんなあ」

澄香に彼氏が出来たのは1年ぶりくらいだと思う。

こんなにご機嫌な澄香を見るのは久しぶりだ。

親友の喜ぶ顔を見られるのは素直に嬉しい。

しかし、彼の話を聞かせると言った私はすぐに後悔する事になった。

澄香のノロケ話を延々6時間も聞かされたのだ……。

澄香は飲むだけ飲んで、喋るだけ喋ったらソファで爆睡してしまった。

「まったく……ただ単にノロケたかっただけじゃない」

私は寝室から毛布を抱えて来て澄香に掛け、背凭れを倒してベッドにした。

「嬉しそうな顔して寝ちゃって……」

私が澄香の頬をツンツンと突くと顔を顰めながら反対側を向いた。こっやって幸せそうな澄香を見るのは私も嬉しい。

去年は励まされてばかりだったしね……。

私はテーブルの上を片付けながらカウンターのの上に置かれた携帯に視線を移した。

連絡もなく1週間。

「何してんだか……」

キッチンに皿や空き缶を運んで私は溜め息を吐いた。

「薄情者……」

小さく呟くと玄関の方から物音がした。

新聞が届くような時間ではない。

こんな時間に何だろう？



私は澄香に視線を移したが、彼女は爆睡していて目を覚ます気配さえない。

更には玄関が開く音がした。

私は恐る恐るキッチンから玄関を覗き見る。

「ただいま」

静かに入ってきた人物が私の顔を見て微笑んだ。

まさか来るとは思わなかった。

他に来る人間などいないけれど、連絡もなかったし……。

「なにがただいま、よ。あんたの部屋はここじゃないでしょ？」

1週間も連絡してこないで突然来るなんて何考えてんのよ？

澄香が寝てるので若干ボリュームを抑えながら言葉を返す。

「彩さん、怒らないでよお……」

海は情けない顔をしながらリビングにやって来るとソファベッドで眠る澄香を見つけて苦笑した。

「澄香サン来てたんだ？」

「そうよ、彼氏のノロケ話を6時間も聞かされたわ」

「ご苦労様」

海はそう言っで私を抱きしめた。

「やっぱり“ただいま”だよ彩さん。俺の帰る場所は彩さんの所し

かないもん。彩さんを抱きしめると安心する」

海の唇が私の耳に触れる。

「あっ……澄香がいるんだから駄目っ……」

「声出さなけりゃバレないよ」

そっという問題じゃなくて……っ！

海は悪戯な笑みを浮かべて私を抱き上げた。

「か……海、本気……？ 駄目だっ……っ」

「澄香サンがいたら俺の寝る場所は彩さんのベッドしかないでしょ？ 俺は同じベッドに寝て我慢なんか出来ないよ」

澄香がいなくてもベッドで寝るくせに……。

寝室の扉を開けて私を下ろすと、海は後ろ手に扉を閉めて私にキスをした。

「か……んっ」

角度を変えながら繰り返されるキスに私は抗えなかった。

翌朝目を覚ました私は、さっさと服を着てキッチンに向かった。澄香はぐっすりと眠っている。

随分飲んで酔っ払っていたし……昨日の……気付いてないわよね？

不安になりながら私は朝食の準備に取り掛かった。

キッチンで動き回る音が煩かったのか、暫くして澄香が目覚ま  
した。

「彩……頭痛が痛い……」

「日本語間違ってるから」

「そういつツツコミなし」。マジで辛いんだけどお……」

澄香がうつ伏せになったまま頭を抱えている。

「そりゃ酒弱いくせにあれだけ飲みゃ二日酔いにもなるでしょ」

甘くて飲み易いのは分かるけれど、酒に弱い人がカクテル  
ナーを5本も飲んだのだから。

「二日酔いな澄香サン？」

服を着た海が寝室から出て来た。

「久しぶりー海君。おかえりい。マジ冗談じゃなく二日酔いー。な  
んでこんなに飲んだんだろ……」

「彼氏のノロケ話6時間もしてよく言うわよ」

まったく……結局、出会いから始まって聞きたくないって言った  
性癖まで聞かせたくせに……。

「俺にも聞かせてよ」

海はニコニコと澄香に微笑む。

「何が聞きたい？ 名前？ 年？ 馴れ初め？ 性癖？ どれがいい？」

二日酔いはどこへやら。

澄香は嬉しそうに海に問い掛けている。

「個人的には性癖って興味あるよね。面白そうだったら試してみたいかも」

試してみたいって……それって……。

「海……！」

「冗談冗談」

「冗談って顔じゃないんだけどな。海君ってエッチ」

「男は皆そんなもんじゃないの？」

澄香が女に見えなくなってきた……。

まあ、澄香はもともとそういう話が好きだし、話し出したら止まらないのだが……。

「食事前にそういう会話やめなさいよ、食欲減退するから」

「性欲が増えてきちゃう？」

澄香が楽しそうに笑った。

私の反応を楽しんでいるのだろう。

悔しくなった私は携帯電話を持って澄香に近付き大音量で音楽を

聞かせてやった。

「彩っ！ そんな子に育てた覚えはないわよっ！」

「育てられた覚えはないわよっ」

私は耳を押さえる澄香に無理やり携帯を押し付ける。

「彩さんと澄香サンってホント仲良しだね」

海は楽しそうに私達を見ていた。

その後の2人：1 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

ようやく続編スタートできました。

彩たちが出会ってから1年。

つまり舞台は翌年の4月です。

キャラ達は相変わらず自由奔放に駄文の中で動き回っています。  
彩と澄香のおバカな第1話からスタートです。

それではまた明日お会いしましょう

その後の2人：2 / 1 0（前書き）

さて・・・あの日から丁度1年。

2人は覚えてるんでしょうか？

何を？

あの約束ですよ。

## その後の2人：2 / 10

出会ってから既に1年以上が経った。

6月の下旬、柴田さんが私を連れて来たのは海の住んでいるマンション。

このマンションは10階建て。

その10階、つまりは最上階に海の部屋はある。

本当に何とかと煙は高いところが好きらしい。

L字になったマンションで、10階フロアには部屋は7戸。海は並びの3戸を購入しているようだ。

都心だし、決して安くはないと思うのだが……。

そう思うと、やはり海の金銭感覚がおかしいのではないかと不安になる。

「柴田さんこちらは？」

中年の男性警備員がエレベーターを降りた瞬間に声を掛けてきた。どのフロアにも警備員さんがいるらしい。

無駄に人件費が掛かっているような気がするのは私だけなのだろう。



うか？

不審者が来る確率は頗る低いだろうし、面識のない人が出入りする可能性も低そうだ。

何もする事のない仕事ほど辛いものはない。

学生時代に短期で、大手デパートのエレベーター横で立つだけというアルバイトをした事があるが、ただ立ってお客の手元だけを見ておくアルバイトはしんどかった。

時給は良かったが再びやろうとは思えなかった。

この警備員さんの仕事もあのアルバイトに匹敵するくらい辛いはずだ。

人目もあるし給料が発生している以上、本を読んだり音楽を聴いたりというのは難しい。

本心からご苦労様と言ってあげたい。

「海の身内です」

柴田さんが警備員さんに笑顔で答える。

「ああ、そうですか」

え………信じたの？

そんなの信じちゃったわけ？

本当に警備は大丈夫なの？

警備はしっかりしてるって言ってなかった？

どこがしっかりしてんの？！

給料分きちんと働きなさいよ。

前言撤回、ご苦労様なんて絶対に言ってやらないんだから。

「彩さん、こつちよ」

柴田さんに呼ばれて私は慌てて彼女の後を追う。  
突き当たりの角部屋の鍵を開けて部屋に入ると、私の部屋とは比べものにならないほどの明るさと広さ。

「こつちとそつちが洋間で、ここがトイレ、そつちが浴室。で、LDKと和室」

柴田さんは簡単に指差しのための説明をした。

それくらい、見れば分かるんですけど……。

彼女がこの部屋に連れてきた理由を私はようやく理解した。

確かにそんな話をした記憶はあるし、丁度1年だ。  
決して忘れていたわけではない。

でも、まさか強制的に連れて来られるとは思わなかった。

一通り部屋を見てリビングにやって来た。  
そこにある壁際のクローゼットが妙に気になる。

……だつて、変だし。

「柴田さん、コレは作り付けなんですか？」

違和感があり過ぎるのだ。

真っ白な壁に中途半端な大きさの白いクローゼット。

壁一面というならば違和感もないのだろうが、この中途半端さは何なのだろう？

私ならば絶対にこんな図面は書かないと言い切れる。

高さは天井までなので構わないが、幅は……2000×2500位。

何故壁一面にしなかったのかしら？

確か、海は新築を買ったはず。

という事は……元々？

センスないなあ……。

「これは週刊誌対策よ」

柴田さんはクローゼットを指差しながら苦笑した。

意味不明。

部屋の中に週刊誌対策が出来るものがあるのかどうかさえ疑問である。

目の前にあるのは外からは絶対に見えないクローゼットだ。

自分の目で確認しようとクローゼットに手を伸ばすと、触れる前に内側から扉が開いた。

「うわっ！ 彩さん、もう来てたの?!」

海が姿を現した。

「……え？」

状況が理解できずに私はその場で固まった。

クローゼットに隠れてた……？

「玄関は別だけど部屋の中は海が我が儘言っつて繋げちゃったのよ」

柴田さんは溜め息を吐いた。

海の背中越しに扉と海の部屋と思われる景色が見える。

「どこ もドアみたいでしょ？」

海は子供みたいに微笑んだ。

「柴田さん、珈琲淹れてえ。喉渴いちゃった」

「はいはい、まったく……我が儘なんだから」

柴田さんはクローゼットの扉の向こうに消えていく。

案内されたこの部屋には家具が全くないので当然でよいえば当然である。

海は柴田さんの足音が遠退くのを確認してから口を開いた。

「彩さん、去年の6月22日の事覚えてる？」

忘れてなかったのね。

まあ、忘れる事はないだろう。

特別な日なのだから。

「あの日から今日で1年だよ」

海は私の手に部屋の鍵を乗せた。

「約束」

そして優しく私を抱き寄せて、海は耳元で囁く。

「愛してるよ、彩さん」

空っぽの真新しい部屋の中で私達は唇を重ねた。

海と柴田さんの行動は驚くほど早かった。

私は海から鍵を受け取った1週間後に引越しをした。

多分、私が断らないと分かっていたのだろう。

そして、柴田さんが業者さんの手配を済ませて、下見に立ち会ったのだろう。

そうでなければ、こんなに急な引越しが出来るはずがない。

つくづく海のためなら非常識な事を平気でやってしまう人なのだと思います。

まあ、常識なんてものがあの2人にあるのかさえ疑問なのだが、柴田さんが立会い、業者の人が作業してくれたお蔭(?)で、私は会社を休む事もなく週末に引越しをする事が出来た。

お任せパックというものがあるのだから便利なものだ。  
女2人で細かい指示を飛ばしながら簡単な作業をするだけ。

海のマネージメントは、その間事務所の人が代わってくれているけれど、ご機嫌斜めで手を焼いているだろう事は容易に想像できる。  
柴田さんにしか甘えないというのだからどうしようもない。

柴田さんに子供がいないのはもしかしたら海のせいなのでは……  
？ などと考えてしまうのは私だけなのだろうか……？

「「お疲れ様」」

荷物を片付け終わると、私は柴田さんと缶ビールで乾杯した。

「海がいない状態でこうやってゆっくりするのは2度目よね？」

確かに……。

「海をお願いね」

「こちらこそ……お世話になります」

柴田さんはいつになく真剣な顔で私を見ていた。

私の心を覗かれてるようで居心地が悪い。

「貴女は貴女のままでもいいの、今までの生活を変える必要もないわ  
ここに住んでくれるだけで海は満足なの。会いたい時に貴女に会え  
る、あの子はそれが嬉しいのよ」

子供みたい……。

私は苦笑した。

暫くしてリビングの壁際のクローゼットが開いた。

「彩さん！」

人懐っこい笑顔で海がやって来て私を抱きしめる。  
これで人見知りだということだから信じられない。

「コラ、人前で何してんのよ……！」

「柴田さんしかいないから大丈夫」

「柴田さんがいるんだから離れなさい」

私は溜め息を吐いた。

「邪魔者は消えるわね」

柴田さんは笑顔で部屋を出て行った。

「彩さん……会いたかった」

「大袈裟よ、1週間しか経ってないと思うけど？」

「これからは帰って来れば彩さんに会えるんだね、幸せだあ……」

海は私の髪に顔を埋めながら囁いた。

私も嬉しい……けれど、そんな事は口が裂けても言わない。

「彩さん、引越し祝いがあるんだ。貰ってくれる？」

海は身体を離し。ポケットから小さな箱を取り出した。

「好きな指に嵌めて？」

心なしに海の顔が紅潮している。

掌に置かれた箱を私は黙って見つめた。

これって、もしかして……まさか、ね？

「お……俺、風呂行って来るね……！」

海は逃げるように自分の部屋に帰って行った。

1人残されたりビングで、私はゆっくりと包みを開けた。  
箱の中ではダイヤの指輪が輝いている。

私は暫くの間、箱の中で輝く指輪を黙って見つめていた。  
その内側には K a i t o A y a と刻まれている。

「こういうもの渡して逃げるってどういう事よ……？」

思わず苦笑が漏れる。

これって……やっぱり、そういう意味……よね？

ソファに腰を下ろし“ある指”以外の指に嵌めてみたが、どの指にも合わない。

きつと……澄香だ。

あの子が海にサイズを教えたに違いない。



私はその指輪を左手の薬指にそっと嵌めてみる。  
やはり……ぴったりだった。

途端に涙が溢れる。

「好きな指って……ここにしか合わないじゃない……」

あの男は器用なのか不器用なのか分からない。

「彩さん……泣いてるの？」

私が顔を上げると風呂上りの海が立っていた。

「海のせいよ……馬鹿」

「分かってるけど……泣かせついでにもう1ついい？」

海は私の隣に腰を下ろすとジーンズの後ろのポケットから封筒を取り出した。

それは役所の名前が印字された茶封筒。

「俺と彩さんが離れないって契約書。俺の方は記入済みだから彩さんが記入したら出しに行こう？」

離れないって契約書、って……?!

私は勢いよく海を見上げた。

「すぐじゃなくていいからさ。彩さんがいいと思った時に書いてよ」

優しい眼をした海は封筒を私に差し出す。  
こんな展開、予測できるわけがない。

私にはまだ、自信もなければ何の覚悟もない。  
それなのに、こんな大事なものを受け取ってしまったていいのだからか？

「ついでなんだ……これ？」

「えっ、あ……いや、そうじゃないけど……分かってるくせに意地悪言わないでよ……」

茶化すように言葉を返すと、海は情けない顔をした。

だって……どうしたら良いのか私にも分らないんだもの、仕方がないじゃない。

「まだ……嫌」

「うん、待つよ」

「いつになるか分からないわよ？」

「いいよ」

「一生書かないかも……」

「ここにいてくれるならそれでも構わないよ。俺は一生彩さんしか見えないから」

その封筒を受け取ると、海は私を抱き寄せた。

「1年……待つて」

「彩さんって1年好きだよね」

「じゃ、10年……」

海が小さく笑った。

「彩さんに預けておくから、彩さんが書いたら俺に返して？ 俺は急かすつもりはないからさ」

こういう時だけ大人の男になるから負けちゃうんだわ……。  
なんでこんなに優しいのよ？

なんで私の言う事が分ってるのよ？

こんな男だから……こんな海だから、私の中で消し去れないほどに大きな存在になっちゃうのよ。

「仕事……辞めないわよ？」

「俺はそんな事望まないよ」

「飲みに行くのだってやめないから」

「うつ……彩さんが行きたいなら……我慢する」

「私……嫉妬深いのよ？」

「俺もだよ」

「仕事って分かってても怒るかもよ？」

「俺も」

「……8つもおばさ……」

「彩さん」

海は私の言葉を遮って微笑んだ。

「愛してるよ」

私の止まらない涙を指で拭って海は優しい優しいキスをくれた。

「最近ご機嫌だね」

仕事中、目の前に座る伊集院君が小声で話し掛けてきた。

「……気のせいよ」

「相変わらずうまくいつてるんだ？」

伊集院君は頬杖をつきながら苦笑した。

「……まあ、何とか」

それ以外に返す言葉もない。

「伊集院！ 仕事しろ、彩ちゃんを口説くな！」

フロアに戻って来た部長が伊集院君の頭を書類で叩いた。

「やだなあ部長、コミュニケーションですよ」

「煩い！ 仕事しろ、仕事！ あ、彩ちゃんちょっとお願いがあるんだけどいいかな？」

部長が私に微笑む。

「なんだろ……？」

「って仕事しかないけれど。」

私は立ち上がり、部長の席に向かった。

「コレ、頼んでもいいかな？」

差し出されたのは1通の書類。

またプレゼンか……。

「はい」

出来ないわけではないので断る事もない。

プレゼンをやるようになってから給料も上がったし、それなりの仕事をしないと給料泥棒になってしまう。

それだけは嫌だ。

「会議室、借りられますか？」

こういう時は余計な仕事をしたくない。

いい加減な気持ちではいいプレゼンは出来ないから。

やるなら集中して満足いくものを作り上げたいし、当然取りたい。

部長もそれは分ってくれているようで、事務の仕事を回してこなくなる。

おそらく他の部署の子に訊きながら片付けてくれているのだろう。

「第3会議室が空いてるよ」

部長は笑顔で答える。

もう押さえてあったとは……。

私が断らないと分かってる辺り嫌な人だ。

嫌いではないけど……悔しい。

私は書類を読みながら会議室に向かった。

既にテーブルの上には資料が用意されている。

この準備の周到さには毎度溜め息しか出てこない。

暫く1人でやっていると思えば扉がノックされて伊集院君が顔を覗かせた。

「お疲れ。スタバの珈琲なんかどう？」

いつの間にか昼になっていたようだ。

「ありがとう、いくら？」

「差し入れだから遠慮しないでどうぞ」

差し出された珈琲を受け取りながら私はまたか、と苦笑した。

「ご馳走様」

伊集院君はいつもそう。

私がお金を払おうとすると逃げたり断ったり……。だからたまに私も奢って返す事になっている。

「またプレゼン？」

「うん、望月建設の社長からのご指名だつて」

書類は私宛に送られてきていた。

ちなみに、望月建設は大手建設会社。

「望月社長って……あの70過ぎのロマンスグレー？」

「うん、そう」

「取らなきゃね」

「プレッシャー掛けないでよ」

望月建設はプレゼンを担当したのが始まりで、それ以降必ず私を指名してくるようになった会社の1つ。

初めてで緊張していた私をリラックスさせてくれて、更には励まして……アドバイスマでくれたのが望月建設の優しくてダンディな社長さんだったのだ。

それ以来、うちの会社に来た時には用がなくても必ず声を掛けに来て下さる。

話をしているだけでリラックス出来てしまうから不思議。

顔を見るだけで元気になれてやる気になれるのは、あの社長さんただ1人だと断言できる。

「彩ちゃんは皆に好かれてるからね」

「そんな事ないわよ」

入社当時から関わっている会社なので、確かに好みやイメージは簡単に把握できるけれど、これはビジネス。

好き嫌いで採用するような簡単な……甘いものではない。

いいプレゼンが出来なければ当然落とされる。

気に入ってもらっているからこそ下手なプレゼンはできない。

「彩ちゃん、また缶詰だつて？」

飲み仲間の矢島君と榊君と遠山君が雪崩れ込んできた。

「情報早いな」

伊集院君が苦笑する。

「お前、また抜け駆けか？」

「彩ちゃん差し入れ」

「一緒に食おう！」

会議室の隅にあった折り畳みテーブルを広げて遠山君が手招く。

賑やかな昼食が始まった。

こういうのも悪くない。

私は4人と情報交換をしながら視野を広げていった。



その後の2人：2 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

意味のないように意味のあった第1話。  
ただ慌しい第2話。

ようやく2人が一緒に（隣同士に？）暮らし始めました。  
このままラブラブ……だったら話は終わっちゃいますよね。

「好きな指に嵌めて」

これってやっぱプロポーズでしょうね。

言われてみたい　　なんて思いながら書いて（打って）ました（

／／／　／／／）

皆様はどんなプロポーズがお好みですか？

続きは明日までお待ち下さい

その後の2人：3 / 1 0（前書き）

一緒に（？）住み始めた2人。  
でも慣れないんですって。

その後の2人：3 / 10

「最近、帰り遅いんだね」

海が台本を閉じて私に視線を移した。

海は私が帰って来たのを確認してから台本片手にこの部屋にやって来る。

私がない時に、勝手に部屋に入って来たりもしない。  
意外と真面目らしい。

「うん、仕事がちょっと忙しくて」

私は遅い夕食を用意しながら簡単に答える。

「彩さんの仕事って事務じゃないの？」

「採用時は事務だったんだけど……今は微妙」

「何さ、それ？」

「色々やってるって事」

海に仕事の話をするのは初めてかもしれない。

訊かれた事もなかったし、自分から話そうとも思わなかったから。

「海だって俳優なのかモデルなのかはつきりしないじゃない、それ

と一緒よ」

なにか違う気がするけれど……まあ、いっか。

私はさっさと支度を整えて皿をダイニングテーブルに運んだ。

海と暮らすようになって2週間。

正直、まだこの生活に慣れない。

気が付けばまた1つ年を取ってしまっている。  
もう32か……。

小さな溜め息が漏れた。

「疲れてるの？」

海が私の顔を覗き込む。

「ちょっとね……」

「疲れてるなら飲みに行くのやめればいいのに」

海は何故か伊集院君に敵意を剥き出しにする。

「情報交換も大事なのよ。特に榊君と遠山君は部署が違うから」

「何で部署が違うのに仲良しなのさ？」

妙に引つ掛かる言い方だ。

「同期入社だからよ。海だって同期だと事務所が違ってても仲良くなったりするでしょ？」

海は首を捻る。

あ……海って人見知りだったっけ……。

「……いないね。っていうか俺友達少ないからさ」

そつえば海から友達の話聞いた事はない。

「芸能界にいないの？」

「彩さんに紹介できるような奴はいない……かな」

私に紹介できる友達って何？

逆に紹介できない奴ってどんな友達なの？

「普通に友達は？ 業界関係なく」

「祥平」

なんで1人だけ？

「あと由香さん」

「誰それ？」

女の人じゃない。

海が女性の名前を口に出すと腹が立つ。

認めたくはないけれど、間違いなく嫉妬だ。

「祥平の彼女……あ、もう入籍したんだっけ。だから奥さん？」

……え？

「祥平って……大久保さんでしょ？ 結婚なさってたの？」

知らなかった……。

「祥平もそういう事あんま話すタイプじゃないからね。式は由香さんが落ち着いたらとかって言ってたけど……もう半年経ったなあ。いつ挙げるんだろ？」

海はおかずを突きながら淡々と話す。

半年も前に結婚なさってたのか……。  
今更おめでとうございます、なんて言えないわよね……？

「美人さん？」

「うん、すっごく綺麗な人。あ、前に祥平がモデルやったの覚えてないかな？ 化粧品メーカーの」

「男性化粧品の？」

「そうそう、その女性部門のモデルさんが由香さん」

どんなモデルさんだったかな……？

大久保さんしか意識してなかったしなあ……。

私は箸の先を噛みながら考えた。

「彩さん、箸の先割れるよ」

海が私を見ながら小さく笑う。

「由香さんは現役モデルだからいくらでも見る機会あると思うよ」

現役モデルさん……か。

美男美女で羨ましいなあ。

それに対して、私と海って……。

「彩さん、変な事考えてない？」

不機嫌そうに海が私の額を人差し指で突いた。

「え……？ 変な事って何よ？」

凶星だったのを誤魔化すように聞き返すと海は微笑んだ。

「愛してるよ彩さん」

「ご飯中に何言ってるのよ？」

「じゃ、あとでベッドの中でたつくさん言ってあげる」

「遠慮しとく」

「何でさ？」

海は眉間に皺を寄せて私を睨む。

「明日も仕事だし」

「俺も仕事だよ。どうしよう、彩さんパワー切れちゃって仕事にならないかも……」

海はご馳走様と呟いて茶碗をシンクに持って行った。  
その背中が本当に寂しそうに見える。

いやいや……騙されてはいけない、相手は俳優だ。  
この1年間に何度騙された事か……。

私は海の存在を無視するように黙々と食事をして、会話を交わすことなく浴室へと向かった。

濡れた髪をタオルで拭きながらリビングに戻ると海はソファで眠っていた。

「まったく」

毎度毎度……。

私は寝室からタオルケットを持って来て海に掛けた。  
熟睡しているようで微動だにしない。

綺麗な顔……。

私はソファの前に座り込んで暫くの間、海の寝顔を眺めていた。

「ねえなんで？ どうして私なの……？ こんな……顔も性格も悪  
いただのおばさんじゃない」

傍にもつと素敵な人達がいるじゃない。  
海はそんな世界にいるじゃない……。

でも……海は疲れてるのにいつも私の事を起きて待っていてくれる。



いつだって私を抱きしめて“愛してる”と言ってくれる。

分かっているけれど……それでも想われている自信がない。自分に自信がないから想われている自信も持てない。

きつとすぐに飽きちゃうわよ。

こんなつまらない女なんか……。

なのに……私はこんなに好きになっている。  
私がどんなに海の事を好きなのか分かる？  
好きという気持ちが目に見えればいいのに。  
そうしたら素直に信じられるのに……。

「おやすみ……海」

私はリビングの間接照明だけを残して寝室に向かった。

ベッドに潜り込んでからも眠れなかった。

疲れているのに。

眠りたいのに……。

多分、この環境に慣れないせいだ。

こうして時々眠れない夜がある。

一緒に暮らすなどと言わなければよかった……。

今までのように、都合のいい時にふらりとやって来る方が気が楽だった。

私は枕に顔を押し付けた。  
思考を打ち切るために。

「寝れないの？ 彩さん」

いつの間にか海が寝室の中にいた。

「こ……これから寝ようとしてたのよ」

「何で嘔吐くのさ？ 随分長い時間そうしてたじゃないか」

いつから見てたのよ……？

海の表情は逆光で分からない。

それでも、声を聞けば機嫌がいいのか悪いのかくらい分かる。  
今のは間違いなく後者だ。

「彩さん、何があったのさ？ 何か不安でもあるの？」

海はベッドに腰掛けると私の頭を優しく撫でた。

何故か悲しい顔をしていた。

「何でも言つてよ。俺、彩さんを愛してるから……だから心配なんだ、1人で悩まないでよ」

私は身体を起こして海の首に腕を絡めた。  
私の精一杯の甘えだ。

「俺には彩さんだけだから……彩さんは俺の欲しいものを無意識にくれてるんだよ、だから俺にも手伝わせてよ……知ってた？俺、ずっと彩さんの言葉に励まされてきたんだよ。彩さんが俺に気付く前から」

気付く前って……？

「1人で悩まないでよ……俺の傍で笑って欲しいのに……俺は何もしてあげられないの？」

海は強い力で私を抱きしめてベッドに倒れ込んだ。

「彩さん……ずっと俺の傍で笑っててよ……」

私はされるがまま海を身体中で感じていた。

午前4時。

携帯が枕元で鳴って私は目を覚ました。  
背面ディスプレイには“柴田”の文字。

「もしもし……」

『おはよう彩さん。安眠妨害してごめんなさいね』

「……いえ、海ですよ。今起こして帰します」

『お願いね』

最近この電話を受ける事が日課になっている。

「海、柴田さん来てるわよ。起きなさい」

私が海の身体を揺ると、海は顰めっ面で私の腕を掴んだ。

「目覚ましのキスしてくれたら起きる……」

そう言いながら私をベッドに組み敷いて無理やり唇を塞ぐ。

「しっかり起きてるじゃない……馬鹿」

海は私に微笑んで再び長い深いキスをした。

「彩さん、愛してるよ」

海は起き上がるとすばやく衣服を身に着け寝室を出て行く。

私はゆっくりと起き上がってシャワーを浴びるために浴室へと向かった。

何故だかほんの少しだけ、心の中の雲が薄くなった気分だった。

“彩さんの言葉に励まされてきたんだ”

昨日聞いた海の言葉……。

私は芸能界という世界を知らない。  
知らないから適当な事も言えない。

何も言ってあげられないし、助けてあげる事も出来ない。

私は……一体何を言ったのだろうか？

どんな言葉が海を励ましたのだろう？

全く分らない。

それでも、私の言葉ごときで海が元気になれたのならそれいい。

私が役に立てたのならそれが嬉しい。

私は深く考えるのをやめて昨夜の汗を洗い流した。

8月1日。

今日はプレゼンの日だ。

私は1日の気力・体力・思考力を限られた時間に使い果たす勢いで臨み、確かな手ごたえを感じていた。

取れた……！

そう思えた。

「五十嵐さん」

プレゼンの後、自販機前で缶コーヒーを飲んでいると背後から声を掛けられた。

「相川常務……」

今日のプレゼンを聞きに来た望月建設の常務だ。

年は……おそらく50代。

斑に白髪が混じった髪をいつも綺麗にセットしている上品な空気を纏った紳士。

若い頃はきつと何かのスポーツをしていたのだろう。がっしりとした体格をしている。

勿論、脂肪ではない。

最近よく言われているメタボリックとは無縁そうだ。

「お疲れ様。今日も分かりやすくて的確なプレゼンをありがとう。ち……社長にも嬉しい報告が出来そうだ」

ち……？

何か違和感あったな、今……。

噛んだだけ……？

「恐れ入ります」

私は深く考えるのをやめて軽く頭を下げた。

「義兄さん、こんな所にいたんですか？ 下に車が……」

第三者の声に振り返るとそこには40代くらいの男性が立っていた。

常務の背後にいる私に気付くと軽く会釈して常務に向き直る。

「常務、社に戻りますよ。社長のように至る所で女性に声を掛けるのはやめて下さいね」

「彼女は社長お気に入りのお嬢さんだ。少し話をさせてもらって社長に報告すれば間違いなくご機嫌だぞ」

そういう事に私を使わないで下さい……。

当然言葉には出来ず、私はただ苦笑を返すしかなかった。

「言い訳は結構です」

「君の話をすると社長はともご機嫌なんだ。娘のような感覚なのかな？」

社長には娘さんがいないのかしら？

それよりも何故、孫ではないのでしょうか？

私の両親はまだ50代。

社長は70を越えていらつしやるし。

常務と私の両親の年齢はそう違わないはず。

だから“娘”という年齢ではないと思うのですが？

私は心の中でツツコミながら愛想笑いでその場を凌いだ。

「失礼ですよ常務……！」

男性は常務の腕を掴んで半ば強制的にこの場から連れ去った。身内にしかできない強引さだ。

「……っ……疲れたあゝ」

傍にあった椅子に腰を下ろして私は頭を垂れた。

もう、今日は仕事にならないかも、っと思うくらいの疲労感。まるでフルマラソンを完走した直後のよう。

走った事はないけれど。

「生きてる？」

伊集院君の声が上から降ってきた。

「かろうじて……」

「今、相川常務いなかった？」

「見てたんでしょ？」

「……偶然、ね」

嘔吐き……。

眼が泳いでるわよ。

私は苦笑しながら缶コーヒーを口に運んだ。

「もう1本いる？」

「いい……胃に穴が開きそう」

「今日……やめとく？」

何を？ とは訊くまでもない。

「帰りたいかも……」

さすがに今日は辛かった。

他人の代打ならばそれほど緊張しないけれど、指名されるとキツイ。

それも相手は大手。

年に数回だが、毎回凄いプレッシャーに苦しんでいたのは事実。今までに何度もあったけれど、運良くプレゼンは“飲みの日”ではなかっただけ。

「大久保さんに電話しとくよ」



「ごめん、お願い」

あの店開店以来、初めてキャンセルの電話をする事になった。前以て伝えていた海外研修を除けば、だが。

達成感と疲労感と安堵感が一気に身体中に広がっていく。

やっと終わった……。

後はなるようにしかない。

私はやるだけの事はやった。

悔いはない。

更衣室に向かった私は、部屋の片隅にある椅子に腰掛けてテーブルに突っ伏した。

そしていつの間にか意識を手放してしまった。

勤務中だというのに……。

その後の2人：3 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

彩の中に降り積もる不安とプレッシャー！。

やっとプレッシャーから開放されて、残されたのは不安だけ。  
でも、仕事中に寝ちやうのはマズイっしょ……。

その後の2人：4 - 10（前書き）

就業中寝ちやった彩ちゃん。  
怒られるのか？

その後の2人：4 - 10

「五十嵐さん」

私は背中を叩かれて目を覚ました。  
背中を叩いたのは他の部署の若い女の子だ。  
彼女の顔を見て社内で居眠りしていた事に気付いた。

「大丈夫ですか？ 部長さんが探してましたよ」

更衣室の壁時計を見て私は固まった。

「うつそお……?!」

プレゼンは朝10時から始まって終わったのがお昼前。  
そして、今の時間は……午後3時。

「ごめん、起こしてくれてありがとう!」

私は慌てて更衣室を飛び出した。  
廊下を走る私に色々な所から部長が探していたという言葉が飛んでくる。

「彩ちゃん……よかった、どこに行ってたんだ？ 探したよ」

部署に足を踏み入れると、部長が近付いてきた。  
心配そうな顔つきで。

「ごめんなさい部長……」。

「すみません、更衣室で休憩してる間に意識がなくなってしまいました……」

私は情けない顔をしていたのかもしれない。

部長が豪快に笑い出した。

「そうかそうか、そりゃ疲れるよなあ。」「ご苦労様」

怒られると思っていた私は拍子抜け。

「このところ無理してたもんなあ」

部長は私の肩をポンポンと叩いて席に戻っていった。  
伊集院君は声を殺して笑っている。

私は恥ずかしさで真っ赤だったに違いない。

「週末はゆっくりしなよ」

自分の席の椅子を引くと、伊集院君が笑いに堪え、顔を引き攣らせながら声を掛けてきた。

「そうね、じゃあゆっくり休むためにこの仕事お願い」

机に積まれた伊集院君の書類を私はそのまま彼の机に返してやった。

「彩ちゃんそりゃないよ、手伝つてよ」

「その前に先ずごめんなさいでしょ？」

「何で？ 俺何かした？」

「笑つたじゃない」

「……ごめん」

「よし、手伝つて進ぜよう」

「神様・仏様・彩マリア様！ やっぱ好きだ、俺の天使、俺と付き合わない？ 俺にしときなつて、超お買い得だから」

「伊集院！ でかい声で彩ちゃんを口説くな！」

私達のやり取りを見て周囲が笑い出す。

この会社つてやっぱり変なのかも……。  
今更だけど……。

その後は当然ながら真剣に仕事をこなし、上司や同僚に言われるまま珍しく定時退社した私は、7時前にマンションに辿り着いた。

「こんばんは彩さん、今日は早いですね」

エレベーターを降りると警備員さんに声を掛けられた。

ここに引っ越してくる際に柴田さんが、いつ苗字が変わってもいいようにと下の名前で呼ばせる事にしたと言っていた。

どうやら私の苗字を“望月”だと思っているようだ。

まあ、まだまだその気はないけれど。  
それ以前に変わるのどうかも怪しい。

一々面倒なので説明はしないけれど。

「こんばんは。たまには定時退社もいいかなって」  
「お疲れ様です」

私は苦笑交じりに挨拶をして部屋へと向かった。

玄関を開けてパンプスを脱ぎ捨てる。

いつものように揃える気力もない。  
部屋の電気を点けてリビングのソファに倒れるように身体を沈めた。

今日が金曜日で助かった……。

私は重い瞼を我慢する事なく眠りに就いた。

目を覚ますと窓の外は明るかった。

「うつそ……爆睡？」

私は驚きながら飛び起きた。

「おはよう彩さん」

いつの間にか私はベッドにいて、隣には運んでくれたと思われる海が横になっている。

気付かないなんて……どれだけ疲れていたのだろう……？

「随分疲れてたみたいだね」

海は苦笑した。

「ここんどこ仕事で気を張り詰めてたからその反動かなあ……」

こんなに爆睡したのも久しぶりだと思う。

最近はお酒を飲んでもなかなか眠れなかった。

「起こしてくればよかったのに」

「疲れてる彩さんを起こすなんて出来ないでしょ」

海の言葉に私は微笑んだ。

いつも私が海に言ってる言葉そのものだったからだ。

「何さ？」

「私と同じ事言ってる、と思って」

海は本当だと呟いて微笑んだ。

「そっか……彩さんもこんな気持ちだったんだね」

そう呟く海の顔はやけに嬉しそうだった。

一瞬不思議に思ったが、すぐに自分の言葉を思い出して……。

私が海を起こさない理由がバレってしまったのだと気付いた。

顔が熱を帯びていく。



少し……いや、かなり恥ずかしい。

「何笑ってんのよ？」

多分今の私の顔は真っ赤だろう。  
顔が火を噴きそうなくらい熱い。

「彩さん、愛してるよ」

海は私の腕を掴んで組み敷いた。

もしかして……まさか？

「昨日は我慢するの大変だったんだよ？ 今日がオフだったから我慢できたんだ」

海はそう言って私の首筋に唇を這わす。

「ちよっ……海っ?!」

「駄あ目、放さないよ」

私は朝一から海に襲われた……。

ぐったりした夕方。

私達はまだベッドの上にいた。

「ねえ彩さん、何で指輪してくれないのさ？」

海が私の指に触れながら尋ねる。

私の指に飾りは何一つとして付いていない。

マニキュアも塗らないし、爪は指からはみ出さない程度で切り揃えている。

実にシンプルな手なのだ。

爪が短いのは毎日パソコンを触るから。

爪が長いと、キーボードを叩いている時にカチャカチャと音がして気が散るのだ。

マニキュアは徐々に剥げてくるのがみっともない気がして好きになれない。

爪のお手入れはするけれど、自宅で出来る範囲。

決してお金を掛けたりはしない。

だけど、海が言いたいのとはそんな事ではない。  
分かっている。

「仕事に集中できないのよ、指ばっかり気になっちゃって」

引越してきた際に貰った指輪の事だ。

プラチナ台にダイヤが数個付いた、派手ではないけれど地味でもないちよっとお洒落な指輪。

決して安物ではないだろう。

ジュエリーに詳しくもなければ、それほど興味がない私には何力ラットなのかとか推定いくらなのかも分からないけれど。

きつと澄香ならばすぐに数字を当て嵌めてくれるだろうが、見せ

る気はない。

何よりも頂いたものの金額を探るような真似はしたくない。  
海の気持ちだけで充分なのだ、私は。

「じゃあ、飾りがなかったらしてくれる？」

海の左手が私の左手を優しく撫でる。

深い意味などないと思うけれど。

……まさか、ね？

「多分しない」

自分の自惚れた考えを打ち消すようにやや大きめな声で答えて私は身体を起こした。

節々が痛い。

まるで錆びたロボットのようにぎこちなくて滑稽な動作。  
シャキシャキと動く事が出来ない。

ああ……お腹空いた。

昨日の朝以降、何も食べていないのだから当然だろう。

「お腹空かない？ シャワー浴びたら何か作るわね」

私はベッドから出て浴室へと向かう。

昨日着ていたスーツはベッドの下で皺になっていた。

クリーニングに出さなきゃ……。

シャワーを浴びて出てくると珈琲の匂いがした。

「珈琲淹れたよ。ご飯お願いね、彩さん」

海は私に軽く口付けてキッチンを出て行く。

さて、何を作ろうか……。

私は冷蔵庫を覗きながらちよつと早い夕飯のメニューを考える。

キッチンで食材を刻み始めると携帯が鳴った。  
私の携帯だ。

簡単に手を洗ってカウンターの上にある携帯電話に手を伸ばす。  
掛けてきたのは伊集院君のようだ。

「もしもし？」

『あ、彩ちゃん？』

休みの日に何の用かしら？

「どうしたの？」

『昨日疲れてたから大丈夫かなあって思ってた』

「ああ、ありがとう。大丈夫よ、帰ってから朝まで記憶ないくらいよく寝たわ」

電話の向こうで伊集院君の笑う声が聞こえる。

『そっか、ならいいんだ』

「わざわざそれだけで電話してきたの？」

変なの……。

私が首を傾げると後ろから抱きしめられた。

勿論海にである。

首筋にわざとらしくチュッと音のするキスまで。

「誰から？」

私は心臓が飛び出そうなくらい驚いた。

もしかすると、海は電話の相手が誰なのか分かったのかもしれない。  
い。

だから、わざと音のするキスを……。

「あ、じゃあね。また月曜……」

海は伊集院君を良く思っていないので、さつさと切った方がいい  
だろう。

そう思っただけで電話を切ろうとした瞬間に携帯を奪われた。

当然、海に。

「もしもし、人の女に手を出さないでって言った筈だけど？」

やはり相手が誰なのか分かっていたようだ。

「海……！」

「月曜日も疲れてたらごめんねえ」

そう吐き捨てる。海は一方的に電話を切ってしまった。

「海？」

私は睨むように海を見上げる。

「だって……イタリア野郎嫌いなんだもん。大体休みの日に何の電話なのさ？ 彩さんを誘おうとか思ってたんじゃないの？」

いや……そんな言葉は全く出てこなかったわよ。

万が一出てきても断るに決まってるじゃない。

あんたの世話があるってのに。

大体、イタリア野郎って何？

「昨日の仕事の話よ」

「今までそんな電話掛かってきた事あった？」

……ない、けど。

「昨日はちよつと会社でもやらかしちゃったしね……」

私は昨日の失態を思い出して苦笑を漏らした。

子供の頃から授業中に怒られた事のなかった私の人生初の大失態である。

「何さ？」

「就業中に寝ちゃって……」

海が驚いたように目を見開いた直後、大きな声で笑い出した。

「笑わないでよっ、私だって初めてだったんだから……！」

海の胸に拳をぶつける私の顔は真っ赤だったに違いない。  
自分の恥を晒したのだから真っ赤にもなるだろう。

「そんなに頑張ってたんだ？ そりゃ家でも溜め息出るよね」

私の手を掴んで海が唇を重ねた。

「お疲れ様、彩さん」

優しい腕が私を包み込む。

こうして海に抱きしめられると疲れが消えていく気がする。

ねえ、海。

海が私のどんな言葉で励まされたのか分からないけれど……私は  
こうして海に抱きしめられたり“愛してるよ”って言われていつも  
癒されてるのよ。

分かってる……？

私はそっと海の背中に手を回して疲れた身体に少しだけ元気を貰  
った。

その後の2人：4 - 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

彩は怒らないんですね……。

通常力ミナリものだと思うんですけど……。

まあ、部長さんも無理してるのを見ていたから怒れなかったんでしようね。

彩は好かれてるんだなあ……。

疲れた彩を寝かせてあげちゃう海って優しい　なんて思ったら翌朝から盛ってるし……。

で、夕方まででしょ？

身体ツライだろうなあ。

お疲れ彩ちゃん。

相変わらずガキで盛りな海君です。

まあ1年如きでそんなに変わらないですよね。

また明日お会いしましょう



その後の2人：5 / 10（前書き）

今日も深夜に彩の携帯が鳴ってます。

それは目覚ましなだけで安眠妨害。

この人達に常識を望んでも無駄というものです。

その後の2人：5 / 10

深夜2時。

私はいつもの電話で目を覚ました。

「もしもし……」

『彩さん、毎回ごめんなさいね。お願いしてもいいかしら?』

「はい、すぐ帰します」

柴田さんの電話を切った私は、隣で気持ちよさそうに眠ってる海の唇にそっと口付けた。

何故こんな行動を起こしたのかは分からない。  
寝ぼけていたのかもしれない。

「もう1回……」

海は私の首の後ろに手を回して唇を重ねてくる。  
起きてるとは思わなかった私は激しく動揺した。  
その動揺のお蔭で一気に意識が覚醒していく。

「彩さんからのキスで起こされると嬉しい。時間があるならこのまま抱いちゃいたい」

「時間なんかないわよ。柴田さん待ってるんだから早く行きなさい」

海は私を開放すると起き上がって素早く着替えた。

正直、この行動の早さには出逢った頃から驚かされている。

「愛してるよ、彩さん」

“愛してる”の大安売りは今に始まった事ではない。

海はこの部屋を出る時、必ずそう言うってから部屋を出て行くのだ。

あまりにも大安売りで、嬉しいはずの言葉を聞き流すようになってしまった私に問題があるのだろうか？

海が部屋を出て行くと、何故か今日1番最初の仕事をこなしたように感じてしまう。

好きな気持ちは変わらないのに、信じる気持ちが薄らいでしまったのだろうか？

私は海が出て行ったのを確認してから再び瞳を閉じた。

心のどこかで冷たい風が吹く。

今はまだ暖かいけれど、ベッドに残る海のぬくもりはあつという間になくなってしまう。

なくなる前に眠ってしまおう。

そう思った瞬間……気付いた。

海のぬくもりがなくなってしまう事が寂しいのだと。

怖いのだと。

海を信じていないわけではない。

だけど……海との生活が、まだ現実なのだと思えない私がいる。

私は寂しさや怖さを誤魔化すように……そういった感情から逃げるように眠りに就いた。

日曜日。

海は仕事で夕方には帰って来る予定だ。  
出来る限り部屋で待っていてあげたい。  
いや……待っていたいのだ、私が。

夕方まで何をしよう……？

私は洗濯や掃除を終わらせてほっと一息吐いていた。  
現在午前11時半。

出掛けてしまうと夕方までに帰って来られないかもしれない……。あまりにも中途半端な時間である。

そこで、私は澄香に電話を掛けた。  
引越しをした事は簡単に話していたが、この1ヶ月間はプレゼントの事で頭がいっぱいで会ってもいない。

『もっしもっし』

澄香のテンションの高さに嫌な予感……。

「もっし……」

『ちよつとお……何、葬式みたいな声出してんのよ？』

「いや、あんたの声聞いたらどつと疲れが、ね……」  
『丁度良かった、電話してきたって事は暇なんですよ？ 今から行ってもいい？』

的中……。

「夕方には帰ってくるんだけど？」

それに疲れ気味だし、今日は勘弁して欲しい。

『あらあ 久しぶりに生海<sup>ナマかい</sup>が見れるのね』

生海ってやめて……なんか嫌。

「別に見なくていいし……」

『じゃ、今から行くから駅で待ってて！』

毎度の事ながら勝手に切られてしまった。

これで駅に向かう準備を始めてしまう自分がちょっと悲しい。

今日も彼のノロケ話を聞かされるのかしら……？

さすがに会う度に聞かされるとうんざりしてしまう。

同じ話をもう何度聞かされただろう？

出逢いから性癖に至るまで、多分私はありがたくもないが、澄香の台詞を記憶してしまっているだろう。

カンニングなしで彼氏の馴れ初めから日常まで語れる自信がある。

私は携帯を鞆に差し込んで溜め息を漏らした。

澄香には敵わないなあ……。

「へえ……ここが新居かあ」

部屋に上がり込んだ澄香は部屋中を探検して歩き、やっとリビン  
グに落ち着いた。

「新居ってやめてよ、別に結婚したわけじゃないんだから」  
「でも一緒に暮らすって事は期待してるんじゃないの？」

期待なんか出来るわけじゃないじゃない。  
それに厳密に言えば一緒に暮らしてるわけでもない。  
隣同士だ。

「……まだ、慣れないのよ」

私は小さく呟いた。

「まあ、分からなくはないけどね」

澄香はマンションに向かう途中に買い込んだお菓子を皿に出しな  
がら苦笑した。

「ちょっと……もう飲む気？」

「当然でしょ、海君が帰って来てから飲むとも思ってたの？」

思っていました。

「何のために冷えたヤツ買ったと思ってんのよ」

澄香は私に手招きをして床に座らせた。

私の部屋なのに……何故澄香がソファで私が床なのかしら？  
まあ、いいけれど。

「で？ 相変わらず不安なわけ？」

「そりゃ……ね」

珍しく彼のノロケ話ではない。

今日は聞き役になってくれるのかしら？

「あんなにあんたに惚れてるのに？」

あんなについてどんなによ？

「毎晩求められても？」

「なっ……?!」

確かにそうなんだけど……って、何で知ってんのよ?!

「真っ赤になっちゃって……やっぱそうなんだ？」

嵌められた……。

私は真っ赤になった顔を両手で押さえながら俯いた。

「海君若いから相手すんのも大変でしょ？ パワフルレンジャーだ

もんねえ」

ど……どう答えるってのよ？

大体“パワフルレンジャー”って何？！

「彩みたいなおいしそうな身体見てたら1回じゃ済まないわよねえ」

おいしそうな身体って何よ？

発言がオヤジだし。

「あんたもう酔っ払っちゃったの？」

返答に困った私は真つ赤な顔で澄香の脛を叩いた。

「んなわけないでしょ、素面よ。だいたい好きでもなきゃそんなに求めたりしないでしょ？ 女なら誰にでも盛るって子じゃないんだし」

「そりゃ……そうだろうけど……」

いつだって不安に決まってるじゃない。

「指輪、貰ったんでしょ？」

指輪……？

「あ、そうだ！ 澄香でしょ？ 海にサイズ教えたの」  
「うん」

澄香はあっさりと認めた。



「海君に聞かれたけどさすがに仲良くて指輪のサイズなんて知らないからね」

「もしかして……あの時のつて、嘘？」

「いつだったか指輪のサイズを測りに行った時の事を思い出しながら尋ねた。」

「半分はね。だって海君が知りたいって言うんだもん手伝ってあげるの当然じゃない。ま、私も彼にすっかり指輪買って貰ったけどね」

「当然なのか？」

「つて言うか、いつの間にそんな話してるわけ？  
隠れて会つてるとは思えないし……。」

「あ、誤解しないでよ？ 海君とは電話のやり取りだけよ、会ってはないから」

「電話でのやり取りって……いつの間に番号教えたのよ？  
本当に油断も隙もありやしない……。」

「本当、彩って可愛いわ」

「今のは絶対に褒められてないわよね？」

「べ……別に気にしてないわよ」

「嘘吐き。一瞬不安と嫉妬の入り混じった顔してたわよ」

「嘘っ……？！」

「私は再び顔に手を当てて俯いた。」

「さつさと結婚しちゃえば？ そしたら安心できるんじゃない？」

澄香は簡単に言ってくれるけれど……実際はそんなに簡単なわけがない。

重要なのは気持ちだというのは分かっているけれど……海の場合、事務所の許可も必要だろうし仕事の都合もあるだろう。

当然、親も無視できない。

「私の親をショック死させる気？」

「いつかはバレル事じゃない」

確かにそうだけど……。

私は指輪と一緒に保管している“契約書”の存在を思い出した。  
澄香には話していないけれど。

アレにサインしてしまえば自信を持てるようになる……？  
いや、そんなわけがない。

「彩？」

澄香が私の顔を覗き込んだ。

「何でもない……」

あんな紙切れで安心なんか出来るわけない。  
私は追い払うように頭を振った。

「彩……大丈夫？ 何か変よ？」

澄香は私を眺めながら苦笑していた。

酒の入った澄香はやはりノロケ話を始めてしまった。

今日もいつも通り馴れ初めからだ。

通勤電車の中で痴漢から助けてくれた“岡本さん”の話。

実際に会った事はないけれど、澄香がかなり惚れ込んでるのは分かる。

そして彼も澄香を大事にしている事も。

私は缶ビールを口に運びながら流すように聞いていた。  
いや、完全に流している。

覚えている台詞が合っているのか答え合わせをしている感覚だ。

暫くして壁の向こう側から微かな物音が聞こえてきた。  
海が帰って来たのだ。

私は澄香の反応を見たくて壁の扉の話はしていない。

「ただいまあ」

壁際のクローゼットが開き、海が姿を見せた。

私は澄香から視線を逸らさずに反応を見ていたが……。

噴いた。

勢いよく酒を口から噴き出した。  
そりゃもう豪快に……。  
まるでコントだ。

「澄香っ」

私は慌てて洗面所へ向かい、タオルと雑巾を持ってリビングに戻った。

タオルを澄香に渡し、雑巾で床を拭く。

「豪快なお出迎えだね澄香サン」

海は苦笑していた。

「誰だって驚くわよ」

タオルで口元を拭きながら澄香は溜め息を吐いた。

「カーペット敷いてなくてよかったね、彩さん」

「そうね」

「あんた……わざと黙ってたでしょ？」

澄香が私を睨み上げる。

「噴き出すって分かってたら話してたけどね」

予想を上回る驚き方に私は堪えきれずに大爆笑した。

こうやって笑って過ごせる日が、ずっとずっと続けばいいと思っ  
ていた。

その後の2人：5 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

更新時間が少し遅くなってしまつてすみません。

体調不良で……（苦笑）

出来るだけ午前8～11時までUPします。

他の作家様は夜中UPなさっている方が多いようですが、武村には夜中UPは無理なんです……ごめんなさい。

不安を抱えたままの彩ちゃん。

少しずつ本音を話すようにはなってきたみたいだけど、このままじやいつかその自信のなさからくる不安が溢れちゃうんじゃないでしょうか？

続きは明日

今日は終業式なんですかね？

マンシヨンの前を歩く子供達がランドセルを背負ってないんだけど……。

冬休み……懐かしい響きだ。

その後の2人：6 / 10（前書き）

夏です。

彩のプレゼン大成功で仕事は大忙し。  
休みの日は当然……トドになります。

その後の2人：6 / 10

私がプレゼンした案件が採用されて仕事は大忙し。  
外は灼熱地獄。

正直身体がキツイ。

夏バテ？

それとも、ただ単に年齢的なものなのか？

8月後半の、暑い暑い週末。

最近は休みの日のほとんどを家の中で過ごしていた。

外は溶けてしまいそうな暑さ。

仕事で疲れきった身体と脳味噌。

出掛ける気力もない。

食材の買い物に出掛けるのも日差しが和らぐ夕方以降。

家の中にいると時間を持て余してしまうけれど、外には出たくない。

その辺に若さというものが自分からなくなったとを感じる。  
エアコンによって快適な空間を作り上げているこの部屋から出たくない。



洗濯物が早く乾くのは助かるのだが……。

壁の向こうで物音が聞こえた。

海が帰って来たようだ。

私はすぐに来るだろうと思ってアイスコーヒーの準備を始めた。

しかし、海が来るよりも先に部屋のインターホンが鳴った。

……誰だろう？

宅急便？

いや、最近は通販も頼んでないしなあ……。  
っていつか玄関のインターホンだし。

私はインターホンのカメラに映った人物に顔を顰めた。

柴田さんだ。

いつも来る時は海と一緒にクローゼットの中から現れるのに、今日に限って何故玄関から？

嫌な予感がしたけれど、私は玄関の扉を開けた。

無視するわけにはいかないからだ。

「突然ごめんなさいね」

「……いえ、どうかしたんですか？」

聞きたくないと思っているのに、私の口からは考えるよりも先に質問が飛び出していた。

しかし、後悔はない。

どうせ聞かなければならない話だからだ。

「ちょっと話があって……」

柴田さんの顔には疲労感が浮き出ている。

取り敢えず部屋の中が上がってもらって、私は海に用意したアイスコーヒーを自分の前に、私のグラスに入れたものを柴田さんに差し出した。

「あのね……怒らないで聞いて欲しいんだけど……」

怒る？

なんで？

「何をですか？」

「海、怒っちゃって口も利いてくれないのよ……仕事の事なんだけど」

話し難い事らしい。

「はつきり言っちゃって下さい」

遠回しに言われても最終的には同じ事。

だったら言い訳臭い事を長々と聞かされるよりもズバッと言われる方がいい。

「宣伝で海と……今度共演する女優さんを写真誌に撮らせたの」

“撮られた”ではなくて“撮らせた”？

「この業界ではよくある事なのよ。番組を宣伝するためにわざと写真誌に撮らせるの。海はずっと嫌がってたんだけど、今回は社長直々に言われて断れなかったの。勿論やらせだから2人の間には何もないのよ?」

柴田さんは私の顔色を窺いながら言葉を続ける。

「彩さんが誤解するからって海もこのところずっと断ってたの……でも今回は、相手のプロダクションも大手でね……社長も断りきれなかったらしいの。多分、放送を開始したらもう1回くらいそんな話が来ると思っの」

女優さんならば綺麗な人なのだろう。

「そう、ですか」

「彩さん、海を信じてあげてね? 海には貴女しかないの」

私には柴田さんの言葉を信じる事が出来なかった。  
信じてあげられるほどの自信が……私にはなかった。

本当はその人と隠れて付き合ってたのではないか?  
もう私なんか飽きてしまっていたのではないか?

柴田さんの言葉に簡単な相槌を返しながら私の頭の中は不安でいっぱいになっていた。

一生懸命説明してくれた柴田さんには悪いけれど、その後の彼女の話は全く私の耳には届いてこなかった。

暗くなっても海は私の部屋にやって来ない。

バレてしまったので来たくないのではないか？

本当は早く出て行ってくれ、と思っているのではないか？

心の中でもう1人の私が刃物のような鋭い言葉を投げ付けてくる。

壁の向こうにいるのに……いると分かっているのに会えない。

自分から向こうに行く勇氣もない……。

私は閉ざされたクローゼットを見つめながら、携帯を取り出して澄香にメールを送った。

『海が女優さんと一緒のところを週刊誌に撮られたんだって。私は何を信じたらいい？』

返ってくる言葉は決まっている。

それでも誰かに聞いて欲しかった。

私1人ではキャパシティーオーバー……。

澄香からのメールはすぐに返ってきた。

『海君を信じなさい』

やっぱり……。

信じる方法を教えてよ。

どうしたら信じられるの？

携帯を握る手に生暖かい雫が零れた。

「海……好きよ、好きだけど……」

私はクローゼットの前に重いソファを移動させて海と通じる扉を閉鎖した。

重い家具もダンボールを噛ませば結構簡単に移動させる事が出来るのだ。

今は会いたくない。

澄香に返信する事も出来ず、私は携帯を持ったまま寝室に向かった。

海を好きになどならなければ良かった……。

不安で確認も出来ない。

きっと、確認できても演技なのではないかと疑ってしまう。  
信じたいけれど……信じられない。

誰か……助けて……。

海など……俳優など好きにならなければ良かった……。

私はタオルケットを頭から被って声を殺して泣いた。

流しているものが涙なのか汗なのかも分からなくなる程……とにかく泣いた。

翌朝、目を覚ますと瞼が腫れていた。  
酷い顔だ。

こんな顔では会社に行けない……。

恥ずかしいのもあるが、皆に心配を掛けてしまう。  
それ以上にこの精神状態で仕事が出来るとは思えない。

私は初めて会社を仮病で休んだ。

昼過ぎに伊集院君から電話があつたけれど無視した。  
誰とも話す気にならなかったからだ。

こんな事をしていても何も解決しないと分かっているけれど、ど  
うしていいのかわからない。

ベッドから出る気にもならず、私は夕方までずっと丸まっていた。

昨晩から飲まず食わずだった私のお腹が空腹である事を主張し始  
める。

落ち込んでてもお腹だけは空いてしまうようだ。  
生きているのだから当然だろう。

私は真つ暗な部屋の中を進み、リビングの明かりを点けた。  
予想以上の照明の明るさに一瞬だけ顔を顰める。

テレビを点ければ海の姿を見てしまうだろうと、リモコンに伸ば  
しかけた手を胸元に引き戻す。

空腹なのに食欲はない。  
作る気もない。

カウンターの上に乗っているカリーメイトを見つけ、それを開封して口に運んだ。

味など分らない。

分からなくてもいい。

空腹を訴える胃を黙らせたいだけなのだから。

しかし、選択を誤ったようだ。

パサパサしたものは喉が渴くという事を失念していた。

私はキッチンに向かい、いつも海が使っているグラスでアイスコ―ヒーを作った。

海がいつも使うグラスは綺麗な青の琉球ガラス。

ロケに行ったお土産にペアで買って来てくれたのだ。

ちなみに私のグラスは赤。

食器棚で2つ並んだグラスを見てみると気分が滅入ってくる。

このマンションから出て行ったほうがいいのかもしい……。。

何となくそう考え始めた時、インターホンが鳴った。

カメラに映ったのは意外にも伊集院君。

どうしてここを知ってるの……？

会社に住所変更の書類は提出したけれど、伊集院君を含めて誰にも教えた覚えはない。

私は驚きながらインターホンの通話ボタンを押した。

「……はい」

『伊集院だけど……彩ちゃん大丈夫？』

「うん、大丈夫……」

『榊達からお見舞い預かってるんだけどちょっとだけいいかな？』

嫌だ、とは言えない。

お見舞いを預かっているとわかれて持って帰れなどとは言えない。  
失礼だ。

「10階に警備員さんがいるんだけど、私の苗字は名乗らないで  
名前で分かるから」

私はそれだけ言ってエントランスのロックを解除した。

取り敢えず昨日と同じ服だし、着替えた方がいいだろうな……。

私は皺くちやのスーツを脱ぎ捨てて、トレーナーとジーンズとい  
うラフな格好に着替えて伊集院君を待った。

玄関のインターホンが鳴り、私は確認する事なく鍵を開けた。

「……彩ちゃん？」

伊集院君は私の顔を見て驚いていた。

すっぴんだからではないと思う。

泣き過ぎて腫れた瞼を見て驚いたのだろう。

「何があった？ あいつ？」

伊集院君は玄関の扉に手を掛けて勢いよく開けた。

「彩ちゃん」



「……話したくないの、明日には復活するから心配しないで」  
「するに決まってるんだろ！」

警備員さんがやって来てしまうのではないかと不安になった私は、伊集院君を引き込んで玄関の扉を閉めた。

「あいつだろ？ あいつの事で泣いてたんだろ？」

伊集院君は私に紙袋を差し出しながら尋ねてくる。  
しかし、答える気はない。  
答えなくともいずれ分かる事だ。

「……榊君達にお礼言っというて」  
「彩ちゃん」

「……ごめん、話したくない」

私は俯いたまま小さく答えた。

お願いだからもう帰って……。  
そう言おうとした瞬間、私の身体が引っ張られた。

……え？

寝不足と泣き過ぎによって頭の回転が鈍くなっていたのかもしれない。  
何が起こったのか瞬時には理解できなかった。

伊集院君に抱きしめられていると分かるまでに数秒を要した。

「い……伊集院君……?!」

「少しだけ胸を貸してあげるよ。話せないなら訊かないから、泣きたいだけ泣けば？　俺が帰った後泣かれると辛いし」

「それは出来ないよ、伊集院君は……海じゃない」

伊集院君の腕の力がずっと抜ける。

「キツイなあ……」

伊集院君が苦笑しながら私の頭を優しく撫でた。  
不思議と落ち着けた。

共有廊下を歩く足音が近付いてきて、勢いよく玄関の扉が開く。  
私は反射的に伊集院君から身を剥がした。

警備員さんに聞いたのかもしれない。

「あんたここで何してんのさ？」

海が伊集院君の胸倉を掴む。

「彩ちゃんを泣かす男にとにかく言われる覚えはないね」

伊集院君は顔色も変えずに海の手を掴んで捻った。

海の顔が痛みに歪む。

それでも伊集院君は海の腕を離さない。

「伊集院君やめて……っ」

「君が一般人なら俺は遠慮なく顔に1発入れるところだ」

伊集院君は怒りに満ちた顔をしていた。

心配してくれるのは嬉しいけれど……やり過ぎだと思っ  
とても言える空気ではないけれど。

「明日も彩ちゃんが会社に来なかったら誘拐するから」

伊集院君はそう言っ  
て睨みつけながら海の手を離して去って行っ  
た。

私は身体力が抜けてその場にへなへなと座り込んだ。  
伊集院君が海に手を上げなくてほっとしたからだ。

「彩さん……?!」

「出て行って……」

「彩さん、俺……」

「出て行って!」

「……じゃあクローゼットの前に置いてる物退けてよね。それが条  
件。うんって言うてくれたら帰る」

「……分かったから、出て行って」

そう答えるしかなかった。

でもすぐになんて約束しない。

私は海が出て行ってすぐに鍵を掛けた。

チェーンも忘れずに。

そして私は再び部屋の中に1人だけの空間を作った。

その後の2人：6 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

芸能人のスキャンダル。

絶対に避けて通れないものですね。

TVでも毎回やらせばかり流れてますしね。

でも、こういう2人には亀裂が入ってしまうほど大きな問題だった  
ります。

特にネガティブで自分に自信のない彩にはキツイでしょう。

そこまで惚れ込んでるんですね。

でも、クリスマス前だし、ドロドロするのは嫌いなんでパッと片  
付けちゃいましょう。

それではまた明日

やっぱ昨日終業式だったんですね。

同じマンションの方がうんざりしました。

その後の2人：7/10（前書き）

海と共演女優のスキャンダル。

その週刊誌がとうとう発売された。  
テレビでも流れている事でしょう。

その後の2人：7 / 10

週末、柴田さんの言っていた週刊誌が発売された。

あの日以降だんまりを続けていた理由が分かったらしく、伊集院君は出社した私の顔を見るなり溜め息を吐いた。

「おはよう彩ちゃん、ちよつといい？」

私も伊集院君も出社時間が早い。

まだほとんどの席が空いている。

社内を見渡しても片手ほどの社員しか来ていない。

廊下を進み、喫煙所と隣り合わせになった簡易休憩所に足を踏み入れる。

自販機でジュースを買った私達は、傍にある椅子に向き合って腰を下ろした。

「……何？」

訊かなくても話の内容など分かっていた。

「朝のニュース見たよ」

「……そう」

私はあの日以降テレビを点けていない。

だから、相手が誰なのか知らない……知りたくもなかった。

「あれってやらせじゃないの？」

「さあ？」

「さあって……聞いているんじゃない？」

私は答えられなかった。

「……彩ちゃん、そんなに辛いなら別れたら？」

「そんな……！」

簡単に言わないでよ……！

伊集院君はやっと顔を上げた私を見て微笑んだ。

「そんなに好きなのになんで信じられないわけ？」

自分に自信がないからに決まってるじゃない……。

「信じられない相手といっても同じ事を繰り返すだけじゃないかな？」

信じられないまま一緒にいて、こんな記事が出る度にそんな顔で仕事されても困るよ」

伊集院君の言いたい事は嫌というほど分かっている。

「迷惑掛けてるって分かっているの……でも、自分でもどうしようもないの」

どうにかできるなら最初からそうするわよ……。  
私だってこんな自分にうんざりしてるんだから。

海じゃないけど子供だわ。

頭では理解してるのに心が付いていかない、いけない……。

「彩ちゃん、あの男はそんなに器用じゃないよ」

伊集院君が私の肩を軽く叩く。

「あんなお子様に二股とか掛けられる甲斐性があるとは思えないな」

経験者は語るといふやつだろう。

伊集院君は昔、二股三股当たり前だと言っていた気がする。

私は心の中で呟いて苦笑した。

「今日は飲もう、大久保さんも何か聞いてるんじゃない？」

「……うん」

「さあ仕事、仕事。そんな顔していると部長が心配するよ。勿論俺もね」

「……そうね、ごめん」

私は自分に気合を入れるように両手で頬を2度叩いた。

「彩ちゃん……力入れ過ぎじゃない？ 赤くなってるよ」

伊集院君は私を見て苦笑しながら指の背で私の頬に触れた。



海とはあの日から会っていない。

ソファも退けると約束したけれどそのまま放置していた。  
毎晩、海が確認しているのは知ってるけれど退けられなかった。

私達は会社を出て、いつものように大久保さんの店に足を踏み入れた。

「いらつしゃい、彩ちゃん体調大丈夫？」

大久保さんが心配そうに私に尋ねてきた。  
水曜日も飲む気になれずキャンセルしたのだ。

「あ、はい。すみません」

大久保さんは困惑したような顔をした。

「彩ちゃん、ちょっといいかな？　話がしたいんだけど」

大久保さんの言葉に伊集院君が私の背中をそつと押した。

「行っておいでよ」

私は座敷の前に立ち止まった大久保さんを見て動く事が出来なくなつた。

そこに……海がいるかもしれないから。

「彩ちゃん大丈夫だよ、あいつはいないから」

私の気持ちを察してくれたらしい。

その言葉に落胆と安堵という対照的な感情を同時に抱く。

「失礼します……」

私は大久保さんに続いて座敷に上がり込んだ。

襖を閉めると大久保さんがテーブルの上に1冊の週刊誌を投げるように乗せた。

表紙に海の名前が大きく書かれている。

こんなもの見たくない……。

私は視線を逸らした。

「海が使い物にならないらしいよ」

大久保さんは私を見つめながらそう言った。

私のせい……？

違うでしょ？

「彩ちゃん、芸能界ってこういう事平気でやらせる世界なんだよ。今後も番宣でこんなのがたくさん載ると思う。都度疑うつもり？」

大久保さんは元々あの世界にいた人だ。

この人がやらせだと言うならばそうなのだろう。  
でも……私には自信がない。

「海はずっとここから君を見てたよ2年以上も。座ってご覧、ここからは君達の席も君達の声もよく見えるし聞こえる。海はここで君を見つけて、君だけを見つめてきた。独りで……。手が届かない人だと思いながら見つめてきたんだ。その気持ちが少しでも分かるなら信じてやって欲しい。あいつは不器用だしガキだし不安要素は腐るほどあるかもしれない、でも……ズルイ奴じゃない」

私は指差された海の特等席に座って伊集院君達を見つめた。

2年半もここで私達を見てたの……？

何を考えながら？

どんな気持ちで？

私の目から涙が零れた。

「彩ちゃん……？」

「私……自信がないんです。海の周りには綺麗で優しい人がたくさんいる。そんな中にいて……ただ私が珍しいから一緒にいるだけなんじゃないかって。……週刊誌に撮られたからっていうんじゃないって。……いつも……いつも、ずっと不安なんです」

私は言葉と共に溢れ出す涙を止める事が出来なかった。

「祥平……何、女泣かしてんのよ？」

襖を開けた人物が冷たい声を発した。

女性の声だ。

「由香……人聞きが悪いぞ、海の彼女だよ。週刊誌の事話してただけ」

大久保さんは苦笑しながら優しい声を彼女に返す。  
顔を上げると個性的な服装の美女が険しい顔で立っていた。

由香…… って大久保さんの奥様……？

「ああ、駄目じゃない、擦らないでよ。ちょっとお手拭き頂戴！」

由香さんと呼ばれた女性は従業員さんからお手拭きを受け取って私に差し出した。

「祥平、あっち行ってなさい。私が話すから」

異論を認めない物言いだ。

どうやら大久保さんは彼女に逆らえないらしい。

「彼女は一般の女性なんだからお手柔らかに頼むぞ」

大久保さんの言葉が妙に引っ掛かったのは私だけだろうか……？

「貴女が海君の彼女ねえ……」

由香さんの言葉は冷たく感じた。

しかし、視線は見下すというよりも観察されている感じた。

「付き合ってどれくらい？」

先ほどまで大久保さんが座っていた場所に由香さんが腰を下ろす。

「……１年とちょっとです」

「よくその間にこういう記事が出なかったわね」

由香さんが週刊誌を手にとって表紙を指で弾いた。

彼女の言葉に私は確かに……と思った。

柴田さんは海が嫌がっていたと言った気がするけれど……。

「海君ね……貴女の話する時凄く可愛いのよ、知ってる？ 本当に子供みたいな顔して話すの。私達も驚いたわ……長い付き合いだけどあんな顔見た事なかったから。本当に貴女に惚れ込んでるんだって思った。……芸能界って華やかでしょ？ だからってそれほど綺麗な世界じゃないのよ。人間だって同じ、テレビではいいけど私生活じゃ関わりたくない奴等ばかりだわ。海は貴女の中身に惚れたのよ？ 周りにどれだけ顔が綺麗な女がいたって今更海君の心は動きやしないわ」

由香さんは週刊誌をテーブルに投げると立ち上がって私の隣にやって来た。

そして、私の顔を両手で挟んでじっと目を見つめてくる。  
何だか落ち着かない。

本当に綺麗な人だ。

モデルだから綺麗なのは当然かもしれないけれど。  
ただ綺麗なだけではない。

背筋がピンと伸びていて。

自信に満ち溢れていて。

強い眼をしている。

きちんと自分を持っている。

私の持つていないものを全て持つている彼女がとても眩しかった。

「貴女、綺麗な目をしてるのね」

由香さんは私の目を見て微笑んだ。

おそらく他に褒める場所がないからだろう。

「海君がこの業界にいる限り、これからもこういう事って避けて通れないわ。でも、貴女なら大丈夫よ。自信持てないならそれを海君に言いなさい。不満があつたらぶつけなさい。海君は絶対に逃げたりしないから」

由香さんは私を優しく抱きしめた。

女性に優しく抱きしめられたのは初めてかもしれない。

ふざけたハグとは全く違う。

頼りない白く細い腕が私を安心させてくれる。

心を落ち着かせてくれる。

お母さんの腕の中のように。

「私達が味方でいてあげるから大丈夫よ」

由香さんは泣き続ける私の背中を優しく擦ってくれた。

その声はさつきまでの冷たさが消え、優しくて穏やかだった。

大久保さんや由香さん、柴田さんの言葉を信じよう。

自信なんてないけれど……自信なんて持てないけれど、私は海が好き。

そうよ、皆が言うように海は不器用なもの、二股なんて器用な真似出来るわけがない。

今度会ったら不満全部ぶつけてやるんだから。

そうよ、俳優なんだから仕方ないじゃない。

やらせだっていくらだってあるだろうし、その都度疑ってたら疲れちゃうわ。

こんなの今回だけで充分。

でも、その日突然なんて認めないんだから。

どうしても断れない時だけって約束してもらったから。

私だけだって、いっぱいいわせてやるんだから。

そうじゃなきゃ許してあげないんだから……。

自分にそう言い聞かせた夜。

海が不在なのを確認してから私はソファを元の位置に戻した。

少しだけ心が軽くなった気がした。

深夜、物音がして目を覚ました。

「彩さん……ごめんね」

私が目覚めたと気付いていない海は私の髪に触れながら小さな声で何度も謝っていた。

「社長直々に言われて断れなかったんだ。……だからって彼女には指一本触れてないよ、女として見てないし……本当にただの共演者ってだけなんだ。……彩さんが誤解しても仕方ないよね、分かっているんだ。多分俺が逆の立場でも誤解しちゃうと思うし……。でも俺は彩さんしか見えない、避けられて当然だけど……。でも辛かった。出て行っちゃったんじゃないかって毎日不安だった。……ごめんね……。それとクローゼットの前に置いてた物、返けてくれてありがとう……」

海の声も手も震えていた。

「愛してるよ彩さん」

海の唇が私の頬に触れた時、私の頬を何かが濡らした。

「……海？」

「わっ……。！駄目っ今起きないで！」

海は何故か慌てて部屋を出て行こうとする。

私は咄嗟に腕を伸ばして海の服を掴んだ。

「……どうして逃げるのよ？」

「今の……。俺の顔見られたくないから」

海は振り向く事なく小さな声で答える。



「見せたくない顔してるの？」

「……うん」

「じゃあ見せなさいよ」

私は掴んだ服を思いっきり引つ張った。

まさか引つ張られるとは思っていなかったのだろう。

海はバランスを失って私の上に倒れ込んだ。

その頬は濡れていた。

「カッコ悪いから見ないでよ」

海は私を抱きしめながらその顔を隠す。

けれど、見てしまった。

「泣いてたの？」

なんで？

「どうしてそういう事言うかな……」

「なんで泣いてたの？」

「……彩さんがいたから……かな」

「出て行ったほうが良かった？」

「駄目……絶対駄目。彩さんがいなくなったら俺狂っちゃうよ」

海の手が力が入った。

まるで縋るように私を腕の中に閉じ込める。

「彩さん、ごめんね……あの記事、決まりがあって11月まで否定できないんだ。……でも、俺には彩さんだけだから。……信じて？」

海の泣き顔を見るなんて思わなかった。

そんなもの見せられてしまったら何も言えない。

たくさんたくさん文句を言おうと思っていたのに。

「……今回は信じてあげる」

ああ……何でこんな言い方しか出来ないのかな私って。

「愛してるよ彩さん」

久しぶりに感じる海の体温が嬉しかった。

「次はその日突然なんて認めないんだから」

「うん」

「断れない時だけって約束して」

「うん、約束する。俺には彩さんだけだよ」

「……もつと言って」

「愛してるよ、彩さん……彩さん以外の女なんか要らない。だから俺から離れようなんて考えないでずっと傍にいてよ。俺には彩さんしかないんだ」

その日、海は私をただ抱きしめたまま眠りに就いた。

求められるのもいいけれど、たまにはただ抱き合って眠るのも悪くない。

私は海の腕の中で久しぶりにぐっすりと眠った。

その後の2人：7 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

周囲に助けられながらどうか仲直り。

コレって周囲に恵まれてなかったらどうなるんだろう……？

彩も言っちゃいましたね。

こういう事はちゃんと言わなきゃ。

でも、彩には難題だったのかもしれない。

相当恥ずかしかっただろうと思います。

でも、海を失いたくなかったんでしょうね。

今日はクリスマススイヴイヴでしょ？

明日はクリスマスイヴ。

他の作品達はシーズン合わせがキツイけど……ココだけはイっちゃいますか？

かるくですけどね。

まあ、芸能人なんであまあまなのは無理ですけどね。

ふふっ

続きは明日

残り3話です。

その後の2人：8 / 10（前書き）

週刊誌発売から2カ月。

クリスマスイルミネーションがチラホラとお目見えです。  
そんな時期になりました。

その後の2人：8 / 10

週刊誌が発売されてから2ヶ月以上が過ぎた。  
今放送中のドラマも残り数回。

11月下旬の週末の朝、私はテレビを点けて1人で朝食を摂っていた。

海は地方ロケに出掛けていて2日間会っていない。

テレビでは芸能ニュースを笑顔で読み上げるキャスター。

『現在沖縄で撮影中の噂の望月 海さんを直撃しましたあ！』

……え、噂？

私の眼と耳はテレビに釘付けになった。

たくさん報道陣が海を取り囲んでいる。

『野々原沙織さんとは連絡取ってるんですか？』

『滞在してるホテルも一緒ですよ？ オフの日は野々原さんとお出掛けになったんですか……？』

野々原沙織……ドラマの共演者だったわよね？

ああ……あの時のか。

『いえ、彼女は単なる共演者ですから』

海の冷たい声が一瞬にして興奮気味の報道陣を黙らせた。

『でも……何度かお食事されたんですよね？』

『ええ、2回食事しましたよ。でも、連絡を取り合った事もないしこれからありません』

海はきつぱりとそう言い切ってカメラの前から消えた。

啞然とする報道関係者だけが残されていて何だか笑える。

あれ以降、海は番宣用の記事の話を細かく説明するようになった。いつ・何時に・誰と・どこで会つか・否定できるのはいつからかをきちんと話してくれる。

そこまで細かく報告しなくても……と思うけれど、海なりの誠意なのだと感じたので黙って聞いている。

この2ヶ月の間に既に2回撮られている。

野々原 沙織と1回、あと映画で共演する女優さんで……名前何だっけ……？

変な名前の人だった気がする。

現在、三角関係なのではないかとテレビでは大騒ぎ。

疑っているわけではないが、2度目の時は澄香に誘われるまま覗きに行ってしまった……。

海は私には見せないような俳優の顔で食事をして、綺麗な女優さんのお誘いを一瞬の迷いもなく断っていた。

そんな海の姿を見て、私は嬉しくてこっそり泣いた。  
海には内緒だけど。

澄香にはからかわれたけれど、きっと私に教えてくれたのだと思う。

“海君ほど一途な男はいないよ、あんなの見せられたらもう疑わないわよね？”と、あの日の別れ際に澄香が言った。

もう大丈夫、疑ったりしない。

私が頷くと澄香は満足げに帰っていった。

相変わらず自信なんてないけれど、海は嘘を吐いたりしないと信じられる。

私と柴田さんの前にいる時の、素の望月 海を信じる。

海は演じるのは上手いけれど、嘘を吐くのは下手だと思うから。

きっと今夜は“テレビ見た？”と電話が掛かってくるだろう。

私は頼杖を付きながらテレビを見つめて微笑んだ。

そんな私の指には、あの日以降“海のいない休日限定”で引っ越し祝いに貰った指輪が嵌っていた。

12月。

世間はクリスマス一色。

なのに、私の部屋にはツリーもない。

海は忙しいので必要ないだろう。

それに、私はクリスチャンでもない。

わざわざ空しくなるようなものを飾ろうとも思わない。

イベントの日に一緒に過ごせるわけがないのだ。

去年もそうだった。

今年だけは……なんて甘い期待は出来ないだろう。

少しだけクリスマスの話題で盛り上がる女の子達が羨ましい。

そう思いながらテレビのクリスマス特集番組を眺める。

今度澄香と行ってみようとレストランの名前と住所と電話番号とお勧めメニューをメモしながら。

隣の部屋で物音が聞こえた。

海が帰って来たようだ。

私は立ち上がってキッチンへ向かう。

「ただいまあ」

海がクローゼットを開けてやって来た。

「おかえり」

私はいつものように珈琲を淹れて海に差し出す。

「あ、ありがと……ねえ彩さん、クリスマスツリー飾らない？」

……？



「そんなものないわよ？」

「買ってきたからさ」

「わざわざ？」

「世の中クリスマス一色だよ？ 何で何も飾らないのさ？」

「意味ないから？ 別にクリスチャンでもないし」

どうせ海も私も仕事だし。

平日と変わらない。

私はカウンターの椅子に腰掛けて珈琲を口に運んだ。

「一緒に暮らし始めたんだよ？ そのくらいやろつよ」

一緒につて…… 厳密には隣同士なだけど？

「クリスマスは仕事でしょ？」

海は言葉に詰まった。

「一緒に飾り付けしたい。駄目……？」

その捨て犬みたいな目はやめて…… 反則だわ。

「好きにすれば？」

そう答えてはいるけれど、実は嬉しかったりして。

海は自分の部屋に帰って、1m以上あるだろつツリーを持って再び現れた。

「随分大きいの買ったのね……片付けるの大変じゃない？」

「安かったんだ。このくらいのほうが存在感あるしね。片付ける事より飾る事考えようよ」

海は飾りも大量に買い込んだらしく大きな紙袋には呆れるほどの飾りが入っていた。

「こんなに飾れないんじゃない？」

「飾れるだけ飾ろうよ。ほら、彩さんも一緒にやろう？」

私達は夜中遅くまで騒ぎながら飾り付けをした。

こんなに飾り付けを楽しんだのは初めてかもしれない。

12月25日。

クリスマスだ。

私はいつも通り仕事をしていた。

定時も過ぎて既に残業。

当然かもしれないけれど、残業している人は少ない。

今日は社内の空気がいつもと違った。

絶対に残業しないぞ、というオーラをほとんどの人が醸し出していた。

私は人助けで仕事を引き受けて現在に至る。

もう少しで終わりそうだが……別にこの後の予定もないし急ぐ必要もない。

パソコンのキーボードを叩いていると、机の引き出しの中で携帯が震え出した。

定時を過ぎているので出ても問題はない。

私は引き出しを開けて携帯を取り出す。

掛けてきたのは……澄香だ。

仕事中だし、ノロケ話だったらさっさと切ってやる。

「もしもし？」

『メリークリスマス！これから時間ない？』

相変わらずテンションが高い。

「これから？」

今日はクリスマスよ？

『うん、一緒に行きたい場所があるんだけど？』

一緒に行きたい場所？

「彼氏さんは？」

『今日は仕事。でも昨日一緒に過ごしたから』

あつそう……聞いた私が馬鹿でした。

「今まだ仕事中なんだけど……そうね、あと30分くらいで終わる、

かな……？」

『じゃあ新橋駅で待ってるから』

「駅で？」

『うん、じゃあね！』

またしても一方的に電話を切られた。

「友達？」

伊集院君が目の前席で頬杖をつきながら尋ねてきた。

「うん、人生の半分友達やってる子から。どこだかに付き合えて」

私は苦笑した。

「残念だな……今日空いてるなら誘おうと思ったのに」

「澄香の方が早かったからね。大体、昨日一緒に過ごしたじゃない」

昨日はいつものように5人で大久保さんの店に行って飲んでいた。クリスマス色に飾り付けされた店内で、カットされたクリスマスケーキまでサービスで頂いて、少しだけクリスマスを味わえた。

「あいつらと一緒にじゃなくて彩ちゃんと2人で過ごしたかったな」

「残念でした」

私は笑いながらパソコンのキーボードに指を奔らせる。

そして澄香を待たせないように手早く20分で仕事を片付けて会社を飛び出した。

「彩！」

澄香が大きく手を振っていた。

澄香の横を通り過ぎる人達がその声に振り返る。  
親友の声はそれほどに大きいのだ。

「恥ずかしいからやめてっば……」

私は苦笑しながら澄香の手を下ろす。

「今日は本屋さんに行きたいんだよね」

そんなの1人で行けばいいじゃない。

「ま、理由<sup>わけ</sup>は後で分かるから行こつ、時間ないし」

時間がないって何よ？

私は訳が分からないまま澄香に腕を掴まれて電車に乗り込み、何故か新宿にやって来た。

「何でクリスマスにこんなトコに来なきゃならないわけ？」

私はカップルで溢れかえる改札口で澄香に尋ねた。

「目的地は紀 國屋書店新宿本店よ」

そこに行かなきゃ手に入らない本があるのかしら？  
確かに大きいし、その辺で売っていない本も見つかりそうだけ  
れど。

私は首を傾げながら澄香に付いて行く。

「あ、彩さん！」

聞き覚えのある声。

「……………柴田さん？」

なんでここにいるの？

「良かった、遅いから心配してたのよ」

心配？

「あ……………あの、何……………？」

意味が分からない。

「井守さんありがとう、初めまして柴田です」

「あ、どうも。井守 澄香です」

何、暢気に挨拶交わしちゃってるのよ？

っていつか“ありがとう”って何？

「……………何なの？」

私は2人に尋ねた。

答えるのはどちらでも構わない。

「今日海君の写真集の発売日で、サイン会やってるのよ。抽選で選

ばれた500人だけなんだけどね」

澄香が笑顔で答えると、柴田さんが写真集を私達に差し出した。そこには申し込んでもいないのに499と500の番号が印字された葉書が挟まっている。

「もう始まつてるの。行つてらっしゃい」

え……行つてらっしゃいつて……？

「彩、行くよ！」

私と澄香は係りの人に案内されて最後尾に並び、大人しく順番を待つ事になった。

何でこんな事になっているのだろうか？

「澄香……どういう事？」

イマイチよく分からない。

「去年のクリスマスも一緒に過ごせなかったんでしょ？」

そうだけど……芸能人だから仕方ないんじゃない？

一緒に過ごそうなんて考えていなかったし。

「拗ねちゃったんだって」

澄香が私の耳元で囁いた。  
誰が、とは言わない。

言う必要もない。

……やっぱりガキだわ。

私は溜め息を漏らす。

「それで機嫌を直してもらったために呼ばれたのね……」  
「彩だって会いたかったんでしょ？」

そりゃ、多少は……ね。

「メリークリスマスくらい言ってやるか……」  
「言いたかったくせに」

澄香は私の顔を見ながらクスクスと笑った。

どれだけの人が並んでたのだろう？  
結構な待ち時間だ。

バーゲンの入場制限以上に待たされている。

私が来た頃には既に始まっていると言っていたけれど……かなり  
の人数が並んでいたのだろう。

あ……500人って言ってたっけ。

いい加減疲れているのではないだろうか……。

やっと順番が来て目の前に立つと、海は聞かされていなかったよ



うで素直に驚いていた。

「彩は海君の大ファンなの」

澄香の言葉に海は苦笑した。

その顔は何だか嬉しそうで。

少し恥ずかしそうで。

明らかにテレビで観る海ではなくて少しだけ焦る。

だけど、私と澄香で最後なのだ。

関係者と思われる人しかココにはいない。

最後だからなのだろう、テレビカメラも一台だけ。

それも持っている人は何故かスーッ姿。

テレビ局の人ではないように感じた。

テレビで観るマスコミの人達……特にカメラマンさんや機材を扱

う人は普段着だった気がしたからだ。

「……メリークリスマス」

私が写真集を差し出しながら告げると海は破顔した。

ああ……笑っちゃったよ。

視界の片隅に映る柴田さんも手で顔を覆っている。

やはりマズかったのだろう。

「メリークリスマス、彩さん」

テレビカメラがあるけれど大丈夫……？

普段は笑顔を見せない俳優だというのに。

こんなに顔を綻ばせていたら、後々困るのではないだろうか。

私は少しだけ心配になった。

周囲のスタッフさんも驚きを隠せないでいる。

しかし、顔を赤らめた海は……可愛かった。

久々に見れた顔だ。

ゆっくりとサインをした海は私に写真集を返して手を差し出してきた。

あ、握手か……。

気が付いた私も手を差し出して握手を交わす。

……初めて握手したかもしれない。

それ以上の関係なのに何だか新鮮な気分だ。

たまにはこうしてファンの人達に紛れてみるのも面白いかもしれない。

柴田さん達は困ると思うけれど。

「クリスマスプレゼント代わりにハグしてやってくれませんか？」

澄香の言葉に海は小さく頷いて私を抱きしめた。

「彩さん、来てくれてありがとう……愛してるよ」

周囲に聞こえないくらい小さな声で海が囁く。  
今までで一番短くて、一番嬉しいクリスマスだった。

「ああいう場所で見ると海君って遠く感じちゃうわね」

電車を待つホームで澄香が呟く。

少々気落ちしたような声だったが、表情は全く違う。

写真集を抱きしめてご満悦のようだ。

タダで写真集とサインを貰えて嬉しさを抑えきれないといった感じだろうか。

「そう？ カメラあるのに笑っちゃって、こっちは冷や冷やしたわよ」

あんな映像が流れたら困るのではないだろうか。

海は笑うのが苦手だと言っていたから……。

そう思うと少しだけ会いに行った事を後悔して、大きな不安がこみ上げてくる。

「大丈夫、大丈夫。心配ないわよ」

「その余裕、どこから湧いてくるのよ？」

「用事も済んだ事だし、夕飯でも食べに行こうか？」

「まったく……訊いた私が馬鹿だったわ。そうね、今日は澄香に奢らなきゃいけないわね」

不安はあるけれど、こんな素敵なクリスマスを演出してくれたし。

「やった　コース料理がいい！」

「シバくわよ？」

大体今日みたいな日にそんな店に女2人で行ってどうするのよ？  
何よりも予約でいっぱいに入れないと思う。

かなりの時間待たされるか断られるに決まっている。

「じゃあ飲みに行こうよ」

「はあ？」

嫌よ……澄香はお酒に弱いし。

酔うとすぐに絡んでくるし……。

「ねえ、いつもどこで飲んでんの？」

え？

「いつも行ってる店あるでしょ？　そこ行こうよ」

大久保さんの店……？

「いや、昨日も行ってるし勘弁してよ」

明日も多分行く事になるのだから……。

「新橋だったわよね」

私は結局、大久保さんの店に引っ張られて行き、3日連続で顔を

出す事になってしまった。

大久保さんと澄香は妙に馬が合ったようであっという間に打ち解けていた。

もしかしたら私よりも仲が良いのではないかと思うくらいだ。

由香さんが見たら、きっと嫉妬するんだろうな……。

私は2人を眺めながら苦笑した。

そして数時間後。

私は泥酔した澄香をタクシーで送っていく破目になった。

大久保さんにも相当絡んでいたし、明日改めて謝罪しよう。  
渋々とはいえ連れて行っただのは私なのだ。

お節介で優しい親友は私の肩に頭を乗せて気持ちよさそうに眠っている。

明日はきっと二日酔いだろう。

でも……今日は柴田さんと澄香に感謝。

素敵なクリスマスをありがとう。  
メリークリスマス……。

その後の2人：8 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

海君の居ない日限定で指輪を嵌める彩ってやっぱ素直じゃないなあ……。

2人のクリスマスはとても短かったけど、今までで最高に嬉しいクリスマスだったんじゃないでしょうか？

こうやって少しずつ二人の思い出が増えていくといいなあ……なん  
て思いながら書いていました。

芸能人が相手ではそう簡単にデートなんか出来ませんからねえ……。

皆様にも良い1日になりますように……。  
メリークリスマス、イヴだけど（笑）

明日もよろしくです  
時間が一気に飛びます。

その後の2人：9 / 10（前書き）

新しい年を迎えた二人。  
相変わらずです。

海不在の中、彩は覚悟を決めて引き出しを開けました。

その後の2人：9 / 10

正月にバレンタインデーにホワイトデー。

1月から3月までのカップルの主なイベントだ。

しかし、私達には無関係。

渡しそびれたチョコレートは既に私の胃袋の中で消化済み。

勿論用意していたなどとは言わなかった。

私という女はそんな奴だ。

そして……私達は出会って3度目の春を迎えた。

海は海外ロケに出掛けていて2週間は帰って来ない。

私は引き出しを開けて封筒を取り出した。

海曰く“契約書”だ。

私はそれを初めて封筒から出して広げた。

海の欄は既に記入されている。



「意外に綺麗な字書くのね……。って、え？ 本名は海斗なの？！  
……今知ったわ」

私は書類を見て驚いた。

ずっと本名だと思っていたのに違ったからだ。  
たった1文字足りないだけだけれど、芸名だったなんて知らなかった。

何も言ってくれないのだから知らなくて当然かもしれないけれど。

「本名くらいちゃんと教えろっての、馬鹿海……」

海の詳細プロフィールは公開されていない。

所属事務所のサイトで公開されているのは芸名と生年月日くらいだ。

その他には出演したドラマや映画、モデルとして載った雑誌名などが年表のように並んでいる程度。

同じ事務所の他のタレントさんやアーティストさんもその程度の情報しか開示されていない。

他の芸能事務所と比べても遥に情報量が少ないのだ。

海の字を見るのも初めて。

曲がる事なく綺麗に並んだ漢字。

読みやすい文字。

数字も読み間違っ事もない。

まだまだ知らない海がいる。

それが私を不安にさせるけれど。

それを知る事が出来るのは、きっと私だけ。

そう思うことで不安を誤魔化す。

もうすぐ、コレを預かってから1年になる。

私はボールペンの蓋を外して慎重に書き込んでいった。

渡すのは海の誕生日だと決めているけれど、こうやって何日も来ない日があるとは限らない。

記入し終わった私はその“契約書”をじっと見つめた。

これを提出する日が本当に来るのだろうか？

そんな不安は常にある。

いつ捨てられてしまうのだろう、いつ帰って来なくなるのだろう

……海と出会って2年、その不安を抱かない日はない。

それでも海の“愛してるよ”という言葉だけを信じるしかなかった。

信じたかった。

ふと、証人の欄が空欄な事に気付く。

……やっぱり親よね。

冗談じゃなく、シヨック死しないかしら……？

私は新たな不安を抱きながら“契約書”をそつと畳んで封筒に入れた。

そして海から部屋の鍵を貰った1年後……。

私は海に“契約書”を渡した。

それは結婚を承諾するという事だ。  
重々分かってる。

海は封筒を受け取ると私を抱きしめた。

「彩さんズルイよ……俺の誕生日って知っててやってるでしょ？  
俺……彩さんの誕生日何もしてあげてないよ？」  
「気付かなかったわ……誕生日だったの？」

さすがに気が付いちゃったか……。  
でも……海だって自分の誕生日だなんて言わなかった。  
本名だって教えてくれなかった。  
だから、私も気付かないフリを貫いただけよ。

「嘔吐き」

海の腕に力が籠る。

「彩さん、愛してるよ」

海の手が私の頬を撫でて優しいキスの雨を降らせる。

「彩さんの両親にもご挨拶行かなきゃね」

唇を離した海がそう言って微笑んだ。

「心臓止まらなきゃいいけど……」

両親は素直に現実を受け止めてくれるかしら？  
いや、それよりも本当に心臓が停まらない事を願おう……。

海はオフの日、両親に挨拶に行くと言った。  
私は海の予定を聞いてから両親に電話をして都合をつけてもらった。

『そろそろ見合いとか考えなきゃってお父さんとも話してたのよお』  
母は嬉しそうに言う。

そうよね……さすがにもう33になるし、心配になっているだろうとは思ってたけれど……。

『どんな人なの？』

訊かれるとは思ってたけれど……。

「……驚くような奴」

『はい？』

「年は25」

『今……いくつって言った……？』

これだけで驚かれるのでは先が言えない……。

「25」

『…………』

返ってくる言葉もない。

「取り敢えずお父さんとお母さんだけに会って欲しいから、宇宙そらは呼ばないでよ？」

私はそれだけ言って電話を切った。

宇宙は私の4つ下の弟。

海よりも年上……。

26歳で結婚して今は2児の父だ。

どんな顔されるんだろ……？

気を失わなきゃいいけど……。

7月2日の朝。

海の休みに合わせて前以て休暇を願っていた。

海に言われた通り2日間の有給も貰った。

多分、初日はうちの実家で翌日は海の実家に行くのだろう。

私と海は柴田さんの運転で実家に向かった。

恥ずかしいけれど私の指には海から貰った指輪が嵌っている。

海の前で嵌めているのは初めてだろう。

それでも、嘘ではないのだという意味でしておいた方がいいと思っただのだ。

我が家の父は公務員、母は専業主婦という至って普通の家庭。

「ただいまあ」

午前9時。

実家に辿り着き、玄関を開けると母が飛んで来た。

「あら、お相手の方は？」

「まだ車の中だけど……」

「車庫に入れちゃって……って運転してる人、女の人じゃない？」

変な顔しないでよ……っていつか何考えてんのよ？

「事情があるのっ、いいから中で待ってて」

私は柴田さんに車庫に入れるように言って、その場で2人を待った。

「お待たせ」

柴田さんと海が車を降りて来た。

海は立派なスーツを着てサングラスを掛けている。

正直、見る人が見ればバレそうなののだが……。

私達は足早に家に入り、靴を脱ぐ前に海はサングラスを外して胸元のポケットに差し込んだ。

「本当に私も一緒にしてもいいのかしら……？」

柴田さんは困惑気味に呟く。

「お願いだからいて下さい」

私は縋るように言って2人を居間に案内した。

上座には父が胡坐を掻いて座っている。  
その隣にはお母さん。

「久しぶりお父さん」

私の顔を見て父が優しく微笑む。

「元気そうだな」

「うん」

「いつまでもそんなところに立ってないで中に入ってもらいなさい」

分かってるんだけど……。

「驚かないでね……？」

父が怪訝そうな顔をした。

私が海に視線を移すと、海は私の横に立って頭を下げた。

さすがに両親も海の事を知っているようだ。  
完全に動きが停止した。

「あ……」

連ドラが大好きな母は口を開けたまま私達を見上げている。

「初めまして望月 海です」

自己紹介の必要もなさそうなんだけど……。

「俳優の……？」

父が私の顔を見る。

それ以外のどんな望月 海がいるんだろう？

少なくとも私はこんな顔のこんな名前の人物を他には知らない。

「そう……俳優の望月 海」

「驚くような奴って……」

驚いてるじゃない。

間違ってるじゃない？

「彩さん……どんな説明してんのさ？」

「連れて行くのが海だって電話で言えると思う？」

海は困った顔をした。

「で、こちらの方は海のマネージャーの柴田さん」

「初めまして。柴田と申します。立场上1人には出来ませんので同行させて頂きました」

柴田さんが深々と頭を下げると、両親も深々と頭を下げた。



「とっ……取り敢えず、座って下さい」

楽しいくらいに両親が動揺している。

一先ず心臓が停まらなくて良かった……。

「お前が連れて来たという事は……そういう事なんだろう……？」

父は明言を避けた。

当然かもしれない。

「はい、今日はお2人に僕と彩さんの結婚を認めて頂きたくて参りました」

私の代わりに海が答える。

そこにいるのはいつものお子様な海ではなかった。

「彩の年齢はご存知ですよね？」

「はい」

「それでも構わないんですか？」

「構わないんじゃないんです、年齢なんかどうでもいいんです。僕には彩さんしかいない、彩さんしか要らない、誰にも代われない大事な人なんです。たとえ彩さんが50歳でも僕は今日ここにいますよ」

どのドラマの台詞？ と訊きたくなるほど現実と受け入れにくい言葉。

でも、両親の前で堂々とそう告げる海を見て泣きそうになった。少しだけ視界がぼやけて、私はゆっくりと呼吸をしながら視線を上に向けて涙を抑える。

隣では海が封筒を内ポケットから取り出して父の前に差し出していた。

「僕と彩さんの欄は既に記入済みです。証人の欄にご署名頂けませんかでしょうか？」

父は海をじっと見つめていた。

「証人は2人だと知っているかい？」

「はい、片方は僕の親にお願いするつもりです」

父はその言葉を聞いて微笑んだ。

「彩は気が強くて天邪鬼だけど、それも分かって仰ってるんですよ？」

「はい。僕はそういう部分もひっくるめて彼女を愛しています」

父は海に微笑むと近くにあったペン立てからボールペンを引き抜き、黙って署名をした。

やはり名前の欄を見て少し驚いた顔をしていたけれど。

「娘をお願いします」

「はい」

署名を終えた父が海に封筒を返しながら微笑み、受け取った海は真っ直ぐに父を見据えて力強く答えた。

「僕の親との会食の場も用意するつもりですが……スケジュールの都合で暫く難しいので順序が違つてすみません。提出したい日が近いのでこちらを優先してしまって……あ、決して子供が出来たとか

じゃないので安心して下さい」

「そうだね、順序は違う気がするけど……まあ相手が君じゃ仕方ないだろうね。孫はゆっくり待たせてもらっよ」

お父さんは苦笑したけれど、どこか安心したような顔をしていた。

「生涯忘れられない誕生日ね、彩？」

母の言葉に私は小さく頷いた。

そう……今日は私の誕生日。

きつと海は知っていた。

驚かないのがその証拠である。

「お誕生日おめでとう、彩さん」

海はそう言って私の肩を抱いた。

「やっぱり分かってたんだ？」

「うん、俺の誕生日のお返し」

海は私の蟀谷こめかみに軽く口付ける。

「馬っ鹿じゃないの？」

「「彩っ」」

照れ隠しに小さな声で言っただつもりだったが、どうやら両親にも聞こえてしまったらしい……。

両親は焦り、柴田さんと海は苦笑していた。



その後の2人：9 / 10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

一気に半年も飛んじやいましたね。  
すみません。

でもって、あんまりにも長くなってしまったので中途半端なところで切ってしまいました。  
ごめんなさい。

彩は鬱陶しいと言いながらも記念日好きなんだと思います。  
過度な記念日が嫌いなだけなんでしょうね。

そして……親への挨拶。

「たとえ彩さんが50歳でも僕は今日ここに居ますよ」  
年下の彼だったら言われてみてえ。

なんて思っちゃったんで書いちゃいました。

話の流れでこの辺が彩の誕生日だろうなんて思った方がいたのか居なかったのか。

でも、コッチの親に会ったと言う事は当然アッチの親にも会わなきゃいけない訳で……。

いよいよ明日は最終日

その後の2人：10/10（前書き）

彩の両親に挨拶に行った2人。  
次に向かうのは勿論こっち。

その後の2人：10 / 10

実家で昼食を摂った後、私達は海の実家に向かった。  
どうやら2日間の有給の使い方が予想と違うようだ。

「海の両親ってどんな人？」

「うちは父親だけだよ、母親はいないんだ。父親はね……一言で言えば変な人」

海はそう言って笑った。

「大丈夫、変な人だから結婚に関しても何も言わないよ」

違う意味で不安なんだけど……。

緊張しながら海の実家に辿り着く。

うちとは比べものにならないくらいに大きな家……いや、お屋敷だった。

「海の……実家……？」

「そ」

門を潜って無駄に広い玄関前のスペースに柴田さんが車を停める。

「私はここで待機しておくわ」

私は何故一緒に行かないのかと疑問に思ったけれど、柴田さんの言葉に海は小さく頷いた。  
いつもの事なのだろう。

「行こう、彩さん。緊張しなくても大丈夫だから」

海は気にしていないようで、私の手を握って大きな屋敷の中に足を踏み入れた。

緊張しなくて大丈夫、と言われて緊張が解けるならば苦労などしない。

「あら……お帰りなさい、海」

「ただいま」

階段上から綺麗な女性が声を掛けてきた。  
私よりも年上そうだけど……誰だろう？  
母親はいないって言ったわよね……？

「お父様は書斎にいらっしゃるわ」

お父様……？

「分かった」

海は素っ気なく答えて奥の重々しい扉の前で立ち止まった。

「父さん、いるんでしょう？」



「……海か？」

「うん、入るよ」

気のせいかこの声聞き覚えがあるんだけど……？

扉を開けた海は、私の手を放して室内に入った。

少し開いたままの扉の隙間から聞こえてくる2人の会話に耳を傾ける。

「芸能界に入ってから年に数回しか帰っても来ない不良息子が、家で待ってるなんて電話を遣すとはどういう風の吹き回しだ？」

「結婚しようと思ってさ」

海は平然と答えた。

「ほお……そうか、子供でも出来たのか？」

「あんたと一緒にしないでよ。したいからするだけだよ」

か……海、態度悪くない？

「相手の親御さんの承諾は？」

「誰に言ってるんのさ？ ここに来る前にちゃんと行って来たよ」

「で？ 相手は連れて来たのか？」

「連れて来なきゃサインしてくれないでしょ？」

「よく分かったな」

「兄さん達の見てれば学習もするでしょ」

「それもそうだな」

反応薄っ……。

なんで息子が結婚するっていうのにそんなに無関心なわけ？

驚きもしないなんて……こんなのはびっくりなの？

「彩さん、入って」

私は海に手を掴まれて室内に足を踏み入れた。

「……彩ちゃんか……？」

その声に私は顔を上げた。  
見覚えのある顔……。

「望月社長……？」

目の前にいたのは会社でお世話になっている望月建設の社長さんだった。

望月社長は私を見て、それはもう誰が見ても明らかなくらい愉快そうに笑った。

「海の相手が彩ちゃんか？ そりゃいい」

私は眩暈を覚えた。

確かに同じ苗字だけれど……まさか親子だとは思わなかった。  
だって望月社長は70を越えていらっしやるはず……。

「海の相手が彩ちゃんなら文句のつけようもないな」  
「そうでしょ？」

そうでしょって……海は知ってたの？

「証人の欄にサインしてよ。都合のいい日に出しに行くからさ」

望月社長は躊躇う事無くペンを奔らせる。

「息子をよろしく頼むよ、彩ちゃん」

望月社長の言葉に私は深々と頭を下げた。  
驚きのあまり言葉が出てこなかったのだ。

海だけでも充分に驚かされたけれど、まさか父親にまで驚かされるとは……。

「ゆつくりできるのか？」

「今日は無理。また今度ゆつくり来るよ。彩さんの両親との食事の場も設けるしさ。ありがとね」

海はそう言つて書類を受け取ると、私の手を掴んで書斎を出た。

「彩さん、大丈夫？ 何かかなり動揺してるみたいだけど？」

そりやそうでしょ？

「海は知ってたの……？」

「彩さんから名刺貰つた時に気付いた」

何の話？

「うちの家族は皆父さんの会社で働いてるんだ。俺だけ異端児なんだよね。で、こっちに帰つて来た時に家族がある会社の女の人の話を楽しそうにしてたんだ。会社の話なんか俺分かんないし興味もないからどうだってよかったんだけど……彩さんから名刺貰つて、その時の女の人が彩さんだったんだって初めて知った」

どんな話されてんだろ……？  
恐くて訊けない……。

「彩さん、念のため言っとくよ。俺は彩さんに惚れたんだよ。父さんとか会社とは無関係」

そんな事分かってるわよ……。

「さっきの女の方は……？」

「さっきの……？ あ、階段のところで会った人か。あれは2番目の姉さん」

はい……？

姉さん……？

私よりも年上じゃないの？

「海つて……何人兄弟？」

素朴な疑問。

「兄さんが5人と姉さんが3人、弟が1人と妹が2人。だから12人兄弟？ 1番上の兄さんは今年53だし、上の3人とは腹違い」

恐るべし望月社長……。

「ま、隠し子とかも含めると何人だか分からないけどね」

サラッとそういう事言わないでよ……。

「だから変な人だつて言つたでしょ？」

意味違つし……。

「柴田さんも来る度に口説かれてるからとうとう家の中に入って来なくなつちやつたしね」

海の言葉で柴田さんが中に入らなかった理由に納得できた。しかし……あの社長さんがそんなに軽い男性だとは思えない。人は見掛けによらないという事なんだろうか。

「あ、そういえば……常務の相川さんってお兄さん？」

ふと思ひ出して海に尋ねた。

「ああ……時子さんの……一番上の姉さんの旦那さんだよ。まあ、兄妹の事兄さんとか姉さんとか呼んだ事なんかないけどね」

まあ、あれだけ年齢が離れてればね……。  
気持ちは分からなくもない。

「彩さん、俺は彩さん一筋だからね」

「分かつてるわよ……」

「彩さん、愛してるよ」

海はそう言つて私に口付けた。

8月20日。

焼け付くような夏の日差し。

地面からは陽炎。

アイスなら1分も掛からないでドロドロに溶けてしまいそうな暑さ。

私達は2人でタクシーに乗り込んで区役所に向かった。

海がこの日休みを取っていたのだ。

「俺が彩さんを初めて店で見つけた日なんだ」

海は嬉しそうにそう言った。

よく覚えてるなあ……。

私は海と初めて会った日さえ覚えていないのに……。

4月の金曜日という事だけは覚えているが、日にちは記憶していない。

区役所の中に入り窓口で“契約書”と必要書類を差し出す。

窓口にいたのは中年のおじさんだ。

おじさんはこの男があの望月 海だとは気付かなかったようで、あっさりと“契約書”を受理した。

若い人だったならば気付かれていたかもしれない。  
少しだけほっとした。

「おめでとうございます」

社交辞令なのは分かっているけれど祝福の言葉が嬉しかった。

私達は顔を見合わせて微笑んだ。

「お幸せに」

差し出された“婚姻届受理証明書”を受け取って私達は役所を出た。

その瞬間、私は密かに望月 彩になったのだ。

「柴田さんが待つてるから駐車場に行こう」

海は私の手を引っ張って駐車場に向かう。

柴田さんは用事があるとかで、今日は市役所で合流する事になっていたらしい。

駐車場には既に柴田さんの姿があった。

やっぱり乗って来たのはアル アード。

念のために言うておくが、これは事務所名義の車である。

決して海の手ではない。

今更だけれど、私用に使ってもいいのか？ と疑問に思う。

稼ぎ頭だからなのかもしれないが、事務所は海に甘過ぎる気がしてならない。

「やっと出せたのね、おめでとう。海、頼まれてた物受け取ってきたわよ」

頼まれてた物？

「ありがとう」

海に促されて私が先に乗り、海は柴田さんと何やら話をしてから乗り込んだ。

海は柴田さんも使い過ぎだと思う。

そして柴田さんも甘やかし過ぎ。

だからいつまで経っても海がオコサマなのではないかとさえ思っ  
てしまう。

「彩さん、目を閉じて手出して」

意味が分からない。

だけど、取り敢えず言われるままに目を閉じて両手を差し出した。

「じゃ、ゆつくり10数えてね」

私が数を数え始めると、海が私の左手をぎゅっと握った。

「何……？」

「目を開けちゃ駄目だよ。もう1回声出して1から数えてね」

目なんか開けてないのに……。

「1……2……3……4……5……6……7……8……9……じゅ  
……」

私が目を開けようとした瞬間唇を塞がれた。

いくらカーテンで仕切られてるといってもマズイでしょ……？！

深いキスを繰り返された私は、唇が離れると海を睨んだ。



「何考えてんのよ？」

「今日からよろしく、奥さん」

海が微笑んだ。

海の胸に拳を振り上げた瞬間私の目に見覚えのない物が飛び込んできた。

左手薬指に見慣れない指輪。

嵌められた感覚なかったのに……。

「な……に、これ？」

「結婚指輪だよ。俺のもほら」

海が自分の左手を私の手に重ねると同じデザインの指輪が薬指に嵌っていた。

「仕事の時も肌身離さず持っておくからね。そのためにチェーンも買ったんだ」

海はそう言って再び私に口付けた。

「愛してるよ、彩さん。彩さんは？」

「大っ嫌い」

言えるわけないでしょ！

「恥ずかしがらないで教えてよお……」

「だから大っ嫌いだってば！」

「仕方ないなあ……今夜ベッドの中で聞かせて？」

爽やかな笑顔でそんな台詞を吐かないでっ！

「却下！」

私は真っ赤な顔で答えた。

俳優でなかったら間違いなく殴っている。

柴田さんがいるのに平気でこんな事言えるんだもんね……。  
やっぱり俳優は嫌い。

羞恥心つてもものを知らないし。

誰の前でもサラッと恥ずかしい台詞を言えてしまうから。

「ま、いいや。彩さんは俺のものだもんね。望月 彩さん」

海は役所で貰った“婚姻届受理証明書”を笑顔で広げて見せた。

こんな奴だから私は一生勝てない気がするんだわ。

私は左手を振り上げ、海が目を瞑った瞬間、頬にキスをした。

「あ……彩さん、い……今……」

海が頬を押さえながら動揺している。

うるたえている様子が可愛い……。

「ここで襲っていい……？」

「駄目！！」「」

私の声に柴田さんの声が見事に八もった。

「意地悪……」

柴田さんは運転しながら私達の会話を聞いていたようだ。  
私はおかしくて笑い出した。

「笑わないでよ、彩さん……」

海の腕が私を引き寄せて唇を重ねた。  
優しく深いキス。

私は心の中で小さく呟く。

海、愛してる。

ずっと傍にいてね……。

「海、午前3時撮影開始だから0時には迎えに行くわよ。いつまでも彩さんに甘えてないでよね」

「ええっつ新婚初夜だよ！ 初夜！ 初夜、初夜、初夜っ！ 何でそんな時間から撮影なのさ？！」

初夜をそんなに強調しないで欲しい……。

それ以前に今の生活環境からそんなもの関係ない気がするのだが……。

「仕方ないでしょ仕事なんだから」

「ええっつ、俺具合悪くなってもいい？」

おい……。

「駄目よ」

当然でしょ……。

「寝坊してもいい？」

コラコラ。

「却下」

そりゃまた当然……。

「失踪してもいい？」

「今から連れ回すわよ？」

いつそのまま持つて行って下さい……。

あ、私はマンションで降ろして下さいね。

でも、膨れっ面の海は可愛い。

私って、もしかして嫁馬鹿……？

私は右手の上に頬杖をつきながら2人の会話を聞いて小さな溜め息を吐く。

会話に終わりが見えてこないからだ。

「頑張つて、旦那様」

私の言葉に海が大きく反応した。

面白いくらい真っ赤な顔で。

「い……今……旦那様って言った……？」

「違った？ 今日から旦那様なんじゃないの？ 仕事をいい加減にする男は嫌いよ？」

私は海の顔を見ながら微笑む。

「お……俺、頑張るからっ」

海は私の手を握り締めて真っ赤な顔で力いっぱい答えた。

「海って単純！」

私と柴田さんは耐え切れず声を出して笑い出した。

「暫くはこの手が使えそうね」

運転席から柴田さんの楽しそうな独り言が聞こえた。  
今のは……聞かなかった事にしよう。

素直で子供で我が儘な海。

時々大人の男になる海。

テレビの中の望月 海……。

全部……全部愛してる。

私からは離れたりしないからずっと一緒にいて……ずっと私だけを見ていてね。

私は海の指に自分の指を絡めた。

海は私の指先をキュツと握り返す。  
こんな小さな事が嬉しい。

私は海の肩に凭れて瞳を閉じた。

「ずっと、ずっと愛してるよ彩さん」

海が私の耳元で囁く。

嬉しくて閉じた私の目から涙が零れた。  
そう、不安だからではない。

幸せだから。

「彩さん？ ど……どうしたの？」

動揺する海の声。

「幸せだなあって……思っただの」

私の言葉に海はクスツと笑った。  
目を開けると優しく微笑む海の顔がある。  
これは夢ではない、幸せな現実……。

「もっともっと幸せになろうね、彩さん」

海はそう言って唇で私の涙を拭った。

そして……今日から“望月 彩”としての新しい生活が始まる。

F  
i  
n

その後の2人：10/10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

とうとう最終日です。

とにかく勢いで書いてしまった続編。

説明不足な部分もあるかもしれないと思いながら突っ走ってしまいました。

様々なメールやメッセージをいただいているのでリクエストによる番外編が続けていく事になりそうです。

その方のお望みのお話かどうか分かりませんが書きますよー

10日間お付き合い頂いてありがとうございました

m ( ) m

またお会いしましょう

武村 華音



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7791c/>

---

有名人な彼

2010年10月11日03時32分発行